

資本と人口とは新事情の下に於いて従前のやうには増加しないかも知れないが未だ將來大に増加し得る力を蓄へて居るのである。

しかるに工業國に於いては食物と材料の缺乏は其の滅亡を意味するものである。極端な場合を假定して見ると、かゝる國の存在は全く外國貿易に倚るのみならず、其の富力増進は對手貿易國の進歩と需要とに依つて測定せられなくてはならないのである。かゝる國民は其れ自身如何に熟練で、勤勉で、貯蓄心に富んで居やうとも、其の顧客たる國民が怠惰で浪費的であり、年々増進する製造貨物の價值を購ふの意志と資力がなかつたならば、折角の熟練も機械も其の効果を久しく持續することが出来ないであらう。

或國が熟練と機械とのため加工品を廉價に生産すれば、原料生産國の生産を促進する結果になることは疑ふの餘地がない。併し高率の利益があつても怠惰にして稅政の下にある國に於いては、往々久しく何等富の増加を齎らさぬ事もあり、周圍の國の富と需要とが増加しなければ、工業國が何んなによい機械を持つて居ても、將た又どんなに努力しても、生産品の價額は常に低落して終に何んにもならぬ事もある。かゝる場合工商國は其の熟練と資本が増大するに従ひ、原料品を輸入するため益々多量の加工品を製造しなくてはならぬことになるのみならず、他方其の製品の價額を引下けても對手國の購買力を刺戟することが出来ないかも知れない。

い。即ち食物と原料品の輸入を益々増加し得る程度に對手國の購買力を刺戟することが出来ないかも知れない。而してかゝる場合其の國の人口が停滯的となるのは明白なことである。

かく食物の輸入増加を不可能ならしめることは、其の原因が穀物の錢價騰貴であつても或は加工品の錢價下落であつても結局同じことで、其の結果は工業國に於ける競争の激増と資本の蓄積、農業國に於ける兩者の缺乏といふ事實から、穀物生産の實質的困難が未だあまり大ならざるに常に上のやうな形(即ち穀物の錢價騰貴若くは加工品の下落)をとつて起るのである。

第四、其の原料と食料とを殆ど他國から購入する國民は、顧客の怠惰、勤勉、氣まぐれ等によつて全然需要を左右せらるるのみならず、顧客たる國家が進歩するにつれて必然的不可避的に需要の減退を見るのである。即ち年月と共に原料國の熟練と資本とが漸次に増加するにつれ輸入加工品に對する需要を減ずるのである。一體工業國と云ひ海運國といふことは一般に偶然一時的のこゝろであつて自然的永久的な分業ではない。國の土地が廣く農業の利潤が非常に高い間は他の商工業國に十分の支拂をしてもよいのであるが、土地の利潤が減退し或は條件が悪く蓄積資本を投下してもあまり儲からぬならば、資本の所有者は自然之れが投資を他の方面に求めるであらう。かくてアダム・スミスや其他經濟學者の正しく論斷した通り、工業原料と生活資料とを國內に求めつゝ、同時に貿易をも自ら之れを行ふこととなり、之れに依りて他の商工業國を伸

介とする場合よりも一層低利にて自ら商工業を營むに至るであらう。農業國が増加資本を主として土地に投じて居る間は、其の資本の増加は却つて商工國にとつて非常に有利であるのみならず、商工國の富と人口との増進を資ける一大原因、一大調節作用を爲すであらう。然るに農業國が其の注意を工業と商業とに向けた後に於いては其の資本の漸増は關係商工國の衰頽滅亡を意味するものである。かく純乎たる商業國といふものは國家の自然的發達の道程に於いて、他の一層優れた熟練資本とを有する國家の競争がなくとも、必や土地を廣く所有する國家の廉賣のために市場から放逐せらるべき運命に在るものである。

此の進歩發達の途中に於ける富の分配に付いては一獨立國の他の獨立國に對する利害關係は或一地方が其れの從屬する一國家に對する關係とは本質的に異なるのであるが、之れは從來十分に注意せられなかつた事である。例へばサセックスに於ける農業資本が増加し、農業利潤が減少すると假定すれば、過剰資本は倫敦、マンチエスタ、リヴァプール其他へ流入し、サセックスに於けるよりも有利に商工業上に流用せられることであらう。しかし若しサセックスが獨立國である場合であるとすれば左様はいかぬ。今日倫敦に送られる小麥は若しサセックスが獨立國である場合には決して送られず却つて其の國境内に居住する商工業家を支持するために保留せられるに相違ないのである。其れ故若し英國が普通り七王國に分立して居たと假定すれば倫敦の繁榮は恐

らく今日とは大に異なるであらう。而して今日に於ける富の分配法、今日全英國にとつて最有利であると想像せられる富の分配法なるものは、若し其の目的が全國を富ませることにあらずして特殊な地方に於ける富と人口との最大増加をはかるにありとすれば、本質上今日とは大に趣を異にするに相違ないのである。事實として各獨立國は其の境域内に大量の富を蓄積することを利益とする。従つて或獨立國の對手貿易國に對する利害は、或一地方が所屬國家に對する利害關係とは同じきを得ない。即ち同じ資本が蓄積せられても前者の場合に於いては國內に漸次發達し行く商工業家を支持するため、小麥の輸出を差控へなければならぬのに、後者の場合に於いては毫も其の必要を見ないからである。

上に述べた原因の一若くは二以上が作用し、商工國に對する小麥の輸出が本質的に阻害せられ、其れが減少し或は増加をこめられたとすると、該商工國の人口は殆ど同一の割合で阻害されるに相違ない。

ヴェニス は外國の競争に因り富と人口とが一度に阻害された商業國の著しき一實例である。葡萄牙人が希望峰を迂廻する印度への航路發見は印度貿易の一大變革であつた。ヴェニスの富を急速に増大せしめ、ヴェニス人をして海軍、並に商業上に於ける絶對優越權を占めさせた高率利潤といふものは急に減少したのみならず、利潤の根源であつた貿易すら殆ど全滅し、其の國力

富力は幾何もなく其の自然財源にふさはしい程度の狭小なるものとなつてしまつたのである。

第十五世紀の半頃にフランダースのブルージュは南北歐羅巴間の貨物集散地であつたが十六世紀初期にはアントワープとの競争から早くも衰頽し始め、多くの英國其他商人は其所を去つてアントワープへ移轉した。十六世紀の半にアントワープは其の繁榮の極に達し、十萬以上の人口を有し一般に最立派な商業都市として知られ、北歐羅巴に於いては最廣大の商業を行ふものと稱せられた。

アントワープは不幸にもバルマ公に依つて包圍せられ陥落したが之れは正に擡頭しつゝ、あつたアムステルダムに大なる利益を與へることとなつた。而して和蘭人の非常な勤勉と忍耐に依る競争は終にアントワープに昔の隆盛を回復する機會を與へなかつたのみならず、又大に他のハンザ同盟諸都市の外國貿易に對して痛烈な痛手を與へたのであつた。

アムステルダム其の後の衰頽は、國內競争と資本の過剰より生ずる利潤の減少に因り、日用品の價格騰貴を招來した極端な課税にも因るが、其れ等よりも大きな原因は恐らく、和蘭に比して一層大なる天與の資源を有する國家の興隆であらう。即ち是等國家は熟練、勤勉、資本に於いて和蘭に及ばなかつたとしても、漸次發達して一層有利に自ら商業を行ふことが出來たのである。

である。

既に一六六九年と一六七〇年の頃に於いて資本の過剰と國內競争が甚しく、當時和蘭に滞在したサー・ウィリアム・テムブルの記すところに依れば、外國貿易は印度を除く外多くは缺損で、

*Sir William Temple*

假令利益があるとしても二或は三パーセントを越ゆることなかつたといふことである。かゝる状態の下に於いては貯蓄力も貯蓄心も大に減退せざるを得ないわけで、資本は停滯するか退縮するか、或は良く見ても其の増加が頗る緩慢であつたに相違ない。テムブルは其の間の消息を漏らして曰く、和蘭の貿易は數年間絶頂に在つたが終に明に衰頽に傾いたと。其の後他國民の進歩が益々著しくなると共に和蘭の貿易は漁業と共にめつきりと衰へ、其の商業も亦米國並に亞弗利加貿易及び外國の競争から獨立して居たラインとマイゼ貿易を除く外、昔時の趣を止めなかつたこと文書に依りて明瞭である。

*Klino*

*Maseo*

一六六九年に於いては和蘭と西フリゼランドの全人口はジョン・デ・ウィットの概算に依れば二百四十萬であつたといふことであるが、一七七八年には是等七州の人口は僅に二百萬となつた。之れに依つて見ると百餘年間に同國人口は通常の場合とは反對に大に減少したのである。

上述商業國の場合に於いては富と人口の進歩は本章に縷述し來つた一若くは其れ以上の原

因——其れは多少とも必然的に食物購買力に影響するものであるが——に依つて妨害せられたやうに見える。

一般に云へば或一若くは其れ以上の原因から或國の資本が増加しなくなると労働需要が減少し、賃金も亦漸次減少して、現在の食物價額と人民の習慣を以つてしては纔に停滯的人口を支持し得程度になるのである。かゝる状態下に置かれた國家は、他國に何んなに多くの穀物があ  
り、何んなに高い資本利潤があらうとも人口を増加することは全く不可能である。但次の時期  
に於いては違つた事情の下に於いて人口の増加はあるかも知れない。或る機械の發明、新貿易  
路の發見、或は附近國家に於ける異常な農業の發展、人口の増加といふやうな事實があつて、  
其の輸出品が異常な需要を見ることがなれば、穀物の輸入を増加し、再び人口の増加を見るか  
も知れないのである。しかし食物の輸入が年々増加しない限りは増加人口を支持することの不  
可能なるや明白のこゝで、若し商業取引の状態が悪く労働者を維持する資金が停滯し或は減少  
することになれば、其の國はこの不可能に面接せざるを得ないのである。

## 第十章 農商並立論

専ら農業に従事する國家でも國內使用のため多少原料品の加工を行ふのだし、専ら商業を營  
む國家でも其の都市城壁外に少しの領土でもあれば多少の食料牛馬等を之れから得るのであ  
る。しかし農商兩業の並行を論ずる上に於いては右にか、けた例よりも一層深いところに論究  
するつもりである。即ち本章に於いては土地の利源と商工業に使用せられる資本とが共にかな  
り澤山で、しかも兩者何れにもあまりに偏せざる國家に付きて論じて見たいのである。

かゝる制度の國は農業國の利益と商工國の利益とを併有し、且つ其の各々に附隨する特殊の  
弊害を免れるわけである。

或國家の商工業が繁昌するといふことは同時に其の國家が封建制度の最惡の弊害を脱して居  
ることを示すのである。其の人民の大部分が奴隸状態を脱し、貯蓄の意志と力を有すること  
を示す。又そこでは資本が蓄積すれば安全な投資の途があり、従つて政府は財産に對して必要  
な保護を加へることが出来るといふことを示すのである。

かゝる事情下に於いては勞働竝に土地產物に對する需要が時々歐洲諸國の歴史に起つたやうに尙早的沈滞を見ることは減多にないのである。商工業が繁昌する國に於いては農產物は常に國內にて販賣市場を發見するのだし、又かゝる市場は資本の漸進的增加には殊に好都合なのである。而して資本の漸進的增加、殊に勞働雇用資金の量と價值との漸進的增加は、又勞働需要とよき穀賃金（穀物にて支拂はれる賃金）の大原因となる。同時に工業上に使用される機械の改良と資本の増加とは、穀物の相對價を高からしめ、外國貿易の隆盛と相俟つて穀賃金の一定量をば内外便宜品竝に奢侈品の多量と交換せしめ得るのである。かく農商互に相益する國に於いては勞働の需要が多少衰へ始め、穀賃金が減少しても、穀物の相對的高價は割合に勞働階級の狀態を衰へしめずに維持し、又其の人口は多少阻害されても其の大部分は衣と住とは不自由なく、又内外便宜品奢侈品を使用し得るであらう。之れを勞働需要が少く、同時に加工品と外國品とに比して穀物の價額が極めて低廉である國々の人々の憐れむべき狀態に比べれば其差幾何であるか。

かゝる次第であるから純乎たる農業國のあらゆる殊特的不利益は商工業の發達によつて避け得るのであり、同時に又單なる商工業國に伴ふ特殊な不利益は土地資源を所有することに依つて避け得るのである。

食物自給國は如何なる種類の外國競争が起つても必しも直ちに其の人口が衰頹し始めるとは限らない。しかるに純粹商業國の場合には其の輸出が外國の競争に依つて實質的に衰へると直ちに同一人口數を支持するの力を失ふのである。而して前述土地資源國の場合には輸出が減退しても其れは單に外國便宜品奢侈品の多少を失ふだけで最重要な内國各地間の商業は割合影響を蒙らないであらう。なるほど従前通りの刺戟がなくなるから其の發達の速度は多少妨害を蒙るに相違ないが退歩する理由はなく、外國貿易の減退に依つて不要となれる資金も決して遊金とはならないのである。即ち其れは從來と同一利益を收める事が出来ない迄も尙有利なる利用方法が發見せられ、外國貿易が隆盛であつた當時と同一の歩調を維持しがたい迄も尙増加し行く人口を支持するに足るであらう。

同様に國內競争の結果も右兩種類の國家に對しては非常な相違を現出するであらう。

純粹商工國に於いては國內競争と資金の過剩とは原料に比し加工品の價格を大に下落せしめるから、工業に使用せられる資本が増加しても其の代償として食物の増加量を得ることが出来ぬ。併し同時に土地資源を有する國家ではかゝる事はあり得ない。一方には機械の改良進歩が行はれ、他方には新しく耕作される土地は肥沃性に於いて漸次劣等となるから、加工品と原料との相對價値は反比例し、一層多くの加工品を以つて原料と代ゆることにはなるが總體とし

ての加工品の價值は減少しない。何故なら製造工業には競つて多くの資本が投ぜられ、而も地方土地投資は之れに應ずるほど増加しないからである。

又國家の収入が主として利潤と賃金である場合には利潤と賃金の減少より國家の自由に使用し得べき收入は大に影響を蒙るかも知れず。資本と勞働者數の増加は多くの場合に於いて利潤と賃金とが減少せる割合を償ふに足りないかも知れない。然るに國家の収入が利潤と賃金と、同様に又地代とから成立つ場合に於いては、利潤と賃金とに於いて失へるところを大部分地代にて取かへすことが出来るから國家の使用し得べき收入は比較的損害を蒙らないのである。

土地廣く商工業殷盛な國民の有する他の著しい利益は其の富と人口の増加が他國に倚賴すること少いといふ一事にある。全然商工業に依る國家の場合には、其の富と人口は貿易對手國の原料が増加しなければ増加しない。他國產の原料が増加せぬのに自國人口と富との増加を謀らんとすれば、勢是等對手國民が從來實際上習慣的に消費し來つた分量中から或量を奪はなくてはならないが其れは殆ど不可能なことである。といふやうな譯でかゝる國の人口と富とは他國に倚ること多く、他國の無智と怠惰とは、其の進歩に對して有害であるのみならず、致命的である場合すら豫想せられるのである。

然るに自ら土地資源を有する國家は決してかゝる不便に曝されることはなく、其の勤勉と、工

夫と節約とが増大すれば他國に交渉なく其の富と人口とが増加するのである。其の工業資本が過剰になり加工品が安くなつても隣國に於ける原料品生産の増加を待つ必要がないのである。何故なら過剰資本は之れを自國の土地に向けることに依つて新しい産物を得、之れと自國の加工品とを交換し得べく、一方供給を減ずると共に他方需要を増加することに依つて加工品の價を騰貴せしめ得るからである。原料品が過剰な場合にも同一の作用に依つて農業と工業との間に利潤の平衡を保たしめることが出来る。同一の理論に依り、國家の資本は時の事情に従ひ、農業資本か工業資本か何れの使用が有利であるかに鑑みてどちらへでも廣く全國に分配することが出来るのである。

かく農業と商工業とが並立し、國內各地方が互に相協力し合ふ國に於ては富と力とは明に漸時増大するであらう。而してかゝる國は外國貿易の状態如何にかゝらず、最よく之れを利用し得る國であり、貿易の消長は、其の生産に與へる有力な刺戟の消長を意味するには相違ないが、しかし同時に又他方から觀察すると、自ら農業を營む關係上、生産物の増加に付いては外國に倚ること最少ないので、外國貿易の不振に因り、生産物の増加は一時損傷を蒙ることはあつても之れが杜絶或は退歩を見ることはあり得ないのである。

農工の並立、殊にそれが殆ど平衡を保つ場合に得らるべき第四の利益は單に他國の自然的發

第二卷 人口理論より生ずる害弊に關し、社會に提供せられ  
或は流行せる種々の制度と方法

展に因つて其の人口と資本とが退歩せしめられることがないと云ふ點である。

あらゆる一般原則に依ると、自ら製造工業を營み、且つ商業を行ふといふことは結局多くの土地資源國が之に適するといふことになるであらう。原綿が米國で生産され、數千哩も離れた外國に運搬され、其處で加工され、而して米國へ逆輸入されるといふ如き事實は永久的ではあり得ない（なるほど多少の期間かゝる状態が繼續することは疑を容れないが）。唯予は右の情勢が永續せぬものだからと云つて現在製造國の有する利益を放棄すべしと論ずる意志は毛頭ない。しかし若し此の利益が一時的のものであるならば、此の事を念頭に置き、此の利益が消失した場合に、却つて害を將來に醸さしめないやうに豫め注意することは確かによいことであると信するのである。

若し或國が右の如き一時的利益のため、商工業に國力を集中し、大に輸入穀物に倚賴するの情勢を馴致したならば、將來外國の商工業が自然的發達を遂げた場合、自國の資本と人口とは退歩の時期に遭遇すべく、今日の一時的利益は何にもならぬことになる。然るに商工業者が自國の農業に依つて支持せられる國に於いては兩者共にかゝる一時的利益から著しい刺戟を受け、而も此の利益が消失する時が來ても何等重大な損害を蒙らなくて済むのである。

かく大なる土地資源と殷盛な商工業を並有する國、商人の數があまり農夫の數を越えざる國は情勢の急轉に對して著しき安全性を有する。駿々乎たる其の富の増加は尋常一様の出來事によつては害せられず、富と人口との増加は數百年、否數千年に亘つて繼續しないと誰れが云ひ得やう。

かうはいつても此の進歩發展が絶對無限であるといふ意味ではない。但其れが遼遠の未來に亘り、過去に於いては如何に大なる土地資源國も未だ此の極限に達したものはなかつたといふまでである。

商業國の人口は外國市場の實狀に因り、食物の増加量を規則正しく輸入することが不可能となる時が來ると必然制限を蒙るのだといふ事は既に説いた通りである。而して食物自給國の人口は、土地が十分占有耕作せられ、今一人の勞働者を増して見ても、増加人口を容れる餘地ある位の大きさの一家族を、養ふに足るだけの食物増加量を平均に得ることが出來ぬやうになつた時に始めて制限を蒙るのである。

之は明に人口の増加に對する極端なる實際的制限で、世界何れの國民も未だ此の極點に達したもなく、將來に於いても恐らくないであらう。何故なら食物ほどではなくとも多少考慮の中に容れなくてはならぬ。他の必需品と資本の利潤とに對し、こゝでは何等の斟酌も加へられ

て居ないからである。

しかしこの極限ですら若し他の必要品の製産に従事して居らない人々即ち例へば陸海軍人、奴僕、贅澤品製造工等の凡てが土地耕作に使役せられる場合に、生産せられ得べき農産物の全量に比すれば尙足らざるところ遠い。なるほどかゝる人々を使役しても家族を養ふだけの食糧を得ることは出来ないであらう。否終には自分達自身の食糧さへ得られないかも知れない。其れでも土地が絶対に食物を増産しなくなる迄は、尙多少の分量を全産出量の上に附加するであらうし。而して之れに依つて生活資料を増加し、増加人口の扶養を助けるやうになる。かくて國の全人口は二六時中純粹必要品の生産に使役せられ、他の仕事には些少の餘裕も與へられないことになるのであるが、かゝる状態は國家の權力に依つて國民を強制することに依つてのみ可能である。しかし私有財産制度、恐らく永久に社會に嚴存するであらうと假定して差支ないところの此の制度の下に於いては決してかゝる事態を生じ得ない。蓋地主や農夫の個人的利害といふ事を眼中に置く以上は、自己の賃銀の價值以上を生産しない労働者が雇用せられる筈がないのだし、此の賃銀が平均、妻を養ひ、二子を結婚年齢迄育てるに足らなければ、人口と生産とは必然停頓すべき筈であるからだ。従つて人口の極端なる實際的制限の下に於いては、最後に耕作に従事する労働者達が恐らく僅に四人の生活資料を産出し得るやうな土地の状況を現出するに相違ない。

而して之れが自然法の規矩であるといふことは人類にとつて幸なことである。若し人口増加の道程に於いて必需品に對する競争から、全人類を驅りて之れが獲得に全時間を投ぜしめることになれば人類は常に墮落の状態に向ふであらうし、又其の中途に於いて行はれた改善進歩も終りに於いては全然其の影を没することであらう。しかし實際に於いては、又私有財産の普遍的原則に従つて、土地に對し之れ以上の労働を使用することが割に合はないといふ時が來れば、耕作者が實際に消費しない過剩原料は、地代、利潤、賃金といふ形で、殊に地代といふ形で、全體の生産に對して従前通りの割合を占めるだらう。少くとも自ら労働をせず、或は土地生産原料を人間の満足に最適形式に變化する製造工業にも従事せざる社會生活の一大部分を支持するに足る位の割合を生ずるであらう。

だから吾々が人口の實際的制限といふ場合に於いても、土地の食物産出力極限には未だ大分遠いのだといふことを念頭に置くことは重要な點である。

又此の實際的制限が達せられるずつと前に於いて人口増殖率が漸次減少するだらうといふことも留意しなくてはならぬ。或國の資本が税政、怠惰、奢侈、或は商業の急變から停頓すると人口上の妨害が多少急激にやつて來るかも知れず、又此の場合には著しい痙攣を作ふに相違な



第二卷 人口理論より生ずる弊害に關し、社會に提供せられ  
或は流行せる、種々の制度と方法

い。しかし國の資本がその斷えざる蓄積と耕作可能地の消盡から停頓する場合には、資本の利潤と労働賃金とは長い期間に亘り豫め既に漸減しつつ、あつたに相違なく、終には資本の増加に對して何等の刺戟を與へず、増加人口の支持に對して何等の資けをも與へなくなるに相違ない。若し土地に對する投資が常に同一利潤を收めるとが出来る位の程度であり、且つ農耕上労働を節約し得べき改良進歩が行はれないと想像すると出来るならば、資本蓄積が進むにつれて明に利潤と賃銀とが低下し、人口増加率も亦全然規則正しく減退するであらう。しかし事實上かゝる情況は起り得ない。自然的並に人爲的な種々なる原因が協力して此の規則正しさを阻害し、人口の終局的制限への進行度は時代に依つて大なる差異を示すことになるであらう。今此の點に作用する種々の事情を考へて見ると大體次の諸項を擧げることが出来る。

第一土地は實際上殆ど常に資本不足である。之れは何から起るか。通常耕作地の借地權は、商工業資本の土地への流用を妨げ、土地に對する資本は主として土地から生まれるのを待つからである。又廣汎な農耕地の性質として小資本の投資は何等得る所なくとも、灌漑の改良及び天然肥料人造肥料の多量を使用することによつて、地質を改良するため多額の資本を投下すれば大なる收穫を得ることになるかも知れないからだ。最後に又利潤と賃金の一步一歩低下せる後に於ても耕作地所有者が單獨にて投資し得たよりに遙かに多量の資本を土地に投下し得る

餘地の存することも間々あることである。

第二は農業の改良である。新しく優良な耕作法が発見され、土地がよく管理され、より少い労働にて耕されることになれば、比較的瘦せた土地も、従來の肥沃な土地に於けるよりも大なる利益を收め得るかも知れない。改良農具を以つて改良耕作法を行へば、長く耕作地擴張の趨勢を阻止し、且つ遞減的收入を得るために資本を増加するやむなき趨勢を阻止し、其れ以上に更に利益を收め得るかも知れない。

第三は製造工業の發達である。製造工業上熟練が増し、機械が發明改良せられ、一人の労働者が八人十人の仕事を爲すことが出来るやうになれば、人の知るやうに内國競争の原則と其の結果たる貨物の供給増大から内國製品の暴落を招致する。而して此の製品中に労働者及び農夫の必需品、慣用便宜品が含まれて居る限り、土地が必然に消費する貨物の價額も其れだけ減少し、こゝに多額の殘金を生ずることになる。而してよしや資本が増し耕作地が擴張されても此の殘金から高率利潤を生むこと必しも不可能ではない。

第四は外國貿易の繁榮である。普通吾人の經驗するやうに、外國貿易が盛なため他國の貨物が比較的あまり大なる騰貴をしないのに自國の勞銀と貨物とが著しく騰貴すると、農夫は従前に比し、より少量の穀物と労働とに對して、必要な砂糖、綿布、麻布、皮革、脂肪、木材等

を得ることが出来る。而して此の外國品購買力の増大は利潤の低下を惹起せずして耕作地擴張の資力を與へる點に於いて、上述製造工業の進歩發達と全く同一の結果を農業上に及ぼすのである。

第五、需要増大のため原料の相對價が一時的に騰貴する。原料價額の騰貴は一定年數後勞銀其他貨物を其の割合で騰貴せしむると假定して——實は此の假定は確かに眞理を穿つては居ないのだが——も原料價額が他の物價に先行する期間に於いては、耕作地が擴張され、資本が繼續的に蓄積されながら、尙耕作の利潤が増加し得ること明である。而して此の期間が農業國民の富力の進歩上限りなき重要性を持つて居ることといふは注意すべきことである。前述土地に對する資本不足の原因に想到するとき殊に其の然るを覺ゆるのである。若し土地が大部分新資本を生み、其れが耕作地の擴張に使用されるならば、而して又一定期間に互る莫大な資本の投下が土地を爾後數年に互つて比較的少額の費用で耕作し得るやうな狀況に化するならば、此の高率農業利潤の期間は、よし其れが僅に八九年に過ぎぬと假定するも、一國に取つては屢々新しき土地の獲得と等しい資源を與へることになるのである。

かういふ譯で不斷に増加する資本と、擴張される耕作地は利潤と賃金との兩者を遞下せしむる傾向を伴ふ事は、疑ふ餘地なき必然の眞理であるが、しかし上掲の諸原因は明に此の遞下の傾向を大に、又長期に互つて不同不規律ならしむる十分の理由となるのである。

従つて歐洲諸國の資本と人口との進展に於いても時期を異にするに従ひ大なる差違あることを認めるのである。例へば殆ど夢死停滯の狀態であつた後、或國家は猛然新植民地に見る如き急速の進歩を遂げた。露國及び普魯西の或地方の如きは其の實例で、資本の蓄積と耕地の擴張とが多年急激に行はれた後、引續き此の種の急速な進歩を遂げたのである。

同じ原因の作用から吾英國に於いても同じやうな差異を表はした。前世紀の半頃に於いては金利は三分であつたが、資本の利潤も殆ど同一率であつたと結論してよからう。而して出産と結婚數から判斷すると人口の増加も頗る遅々たるものであつた。例へば一七二〇年から一七五〇年に到る三十年間に増加人口は五、五六五、〇〇〇に對して約九十萬に過ぎなかつた。此の後國の資本は莫大な増加を見、耕地は大に擴張せられたこと疑ふの餘地がないが、而も該世紀の最後の二十年を通じて金利は五分以上、利潤もほぼ同率で、一八〇〇年から一八一一年に互る期間に於いて人口増加は九、二八七、〇〇〇に對して百二十萬であつた。即ち此の増加率を取つて三十年に互る先きの期間に比べれば殆ど二倍半に當るのである。

資本と人口との進歩は、是等原因によりて不同不整均となるが、頗る緩慢な作用に依つてこの外其の必然の實際的極限に達しないといふ事は確實である。資本の蓄積が必然的に停止す

るに先立つて、資本の利潤は夙くも既に非常に低下して貯蓄に何等の獎勵を與へなくなつて居るだらうし、人口の進歩が終局的に止まるに先立つて勞働の實賃金は漸次低下して、民衆が現在の習慣を捨てない限り、單に實際人口を維持するに留るだけの家族を養ひ得るに至るであらう。

以上論じたこゝから判斷すると次のやうに結論することが出来るやうだ。最大の國民的繁榮を齎らすものは、農商並立の制度であつて、農商兩制度中の何れでもない。廣汎にして豊饒な地積を有し、其の耕作が農業、製造業及び外國貿易の改良進歩に依つて刺戟を受ける國家に在つては其の財源豊富多様にして何日極限に達するか斷言し難い。其れにも拘らず矢張り極限は存するのであつて、若し國の資本と人口とが引續き増加するならば必や之れにぶつかり、如何にしても之れを突破することの出来ぬものである。しかし此の極限は私有財産制度の下に於いては地球の食物生産の極限には尙遙かに遠いところにあるのである。

## 第十一章 富の増加が貧民に及ぼす影響に就

いて

アダム・スミズは研究の目的を「國民富力の性質と原因」に置くと稱するもスミズが時々之れと混同する他の一點、而も一層興味ある一點がある。即ち各國民中最大多數を占める下層民の幸福と慰安とに影響する原因之れである。是等二つの問題が密接の關係を有することは疑を容れない。しかし此の關係の性質と範圍と而して又富の増加が貧民に及ぼす影響とは十分的確に又精細に論及せられて居らない。

スミズは勞働賃金論に於いて社會のストック或は収入の増加は勞働維持資金の増加であると考へた。而して彼は前に既に賃金勞働者に對する需要は、賃金支拂の資金増加に比例して増加すると前提したのであるから、當然の結論として富の増加は勞働の需要を増し下層階級の狀態を改善する傾向があるとした。

しかしよく考へて見ると勞働維持資金は必しも富の増加に伴つて増加しない。況んや其れと

比例する如きは頗る稀れなことである。又下層社會の状態は専ら勞働維持資金の増加、即ち勞働者を支持し得べき資力の増加に倚るものでないといふことが分る。

アダム・スミズは一國の富とは其の土地と勞働との年産額であると定義して居る。即ち土地の産物と加工品とを含むこと明瞭である。今或國民が特殊の事情からして増加食物量を得るの途なきものと假定し、其の土地の生産物或は小麥輸入力が増大の餘地ないとしても、其の勞働の所産が必しも停止せないといふ事は明である。若し製造工業の原料が内國或は外國から得ることが出来れば、技術と機械の進歩とに依り、勞働者数は同一でも加工品の分量を大に増加せしむることが出来るからだ。而して又他方に於いては製造工業の進歩は之れに對する趣味を惹起せしめ、軍人、家僕等と比較して、工業勞働者數を大に増加せしむることすら出来るかも知れず、従つて全人口中のより大なる割合が商工業勞働に就役することになるかも知れないのである。

かゝる場合が屢々發生せぬといふことは尤もな次第である。がとに角發生の可能性があるのみならず。農業の自然的進歩上、人口の増加に對して特定の極限——富の進歩に對する極限とは明に同時發生でないところの特別の極限となるのである。換言すれば人口は食物の方面から既に制限を蒙つて居るが、他方富は尙進歩の餘力ある状態である。人口や富に對する極限はめつたに之れにぶつかるといふことはないから、右の如き場合もめつたに生じないには相違ない

が、之れに近い現象は常に起りつゝ、あるのであり、普通の進歩の道程に於いては、富と資本が増加しても、之れと比例して、より多くの勞働者を維持する力、即ち勞働維持資金の増加を伴ふことは寧ろ稀れなのである。

或古代國民は吾々の持つ記録に依れば殆んど云ふに足らぬほどの商工業の資本を持つて居りながら、他方田地平分法を行つて農耕上の大進歩を遂げ、其の人口も頗る稠密になり得たこと疑ふの餘地がない。かゝる國に於いては人口は既に充満して居たが資本と富とは大なる増加をなし得べき餘地があつた。しかし之れと反對に、資本が増大せるため、食物の生産と輸入に大なる刺戟が與へられると假定しても、生活資料は之れに應ずるだけ大なる増加をなし得ないかも知れない。

歐洲に於ける多くの強大國の初期時代を現在の状態に比較すると、私の此の結論が殆んど一般的に經驗に依つて是認されることを發見するであらう。

アダム・スミズは各國民富力の相異なる進歩を論ずる際に、英國はエリザベス朝以後絶えず商工業の進歩を爲しつゝ、あつたと云ひ、言を繼いで曰く

英國の農耕改良は疑もなく漸進しつゝ、あつたが、併し其れよりも一層進歩の速であつた商工業の後方より追隨して行くに過ぎなかつた。思ふに英國の大部分はエリザベス朝以前既

に耕作せられたに相違ない、而も今日未だ鋤を入れない地面も非常に廣く、更に一層廣い地面は立派な耕作地となり得るのに、實際に於いては遙かに劣等な有様にあると。

同じ説は歐洲の他の國の多くにも適用することが出来る。最良の土地は自然最初に占有される。かゝる地面は封建時代の特質であるだらしない耕法と努力の大浪費とを以つてしても著大の人口を支持することが出来るであらう。而して資本が増加せる曉には、便宜品と贅澤品とに對する趣味の増加が、新開墾地の生産力遞下といふ事實と結合して、自然に又必然的に此の新資本の大部分をば商工業に向けしめ、人口の増加に比し、一層著大な富の増加を招來せしめるのである。

エリザベス朝に於ける英國の人口は殆ど五百萬と想定せられる。即ち現在(一八一一年)人口の二分一に少し不足する程度である。然るに商工業の生産物が、今日人間消費の爲めに收穫される食物量に對して有する著大な割合を一考すると、全體の富力、即ち國のストック並に収入は、通貨の價值變動を除外して、四倍以上に増大したと云つても寧ろ頗る内輪の算定であらう。歐洲諸國中商工業の富に於いて英國ほど著しき進歩を示した國は殆んどない。其れでも尙是等諸國民の一般富力の進歩は、増加人口を支持すべき生活資料の増加に比すれば遙かに著しかつたといふ事を示して餘りあるのである。

國民のストック或は収入が増加する毎に眞の勞働維持資金が必しも増加するものでないといふことは支那の場合に於いて著明に表はれて居る。

アダム・スミズ曰く、支那は既に長く其の法律制度の性質が許す限りに於いて富んで居たのであるが、若し別の法制が布かれ外國貿易が尙ばれたならば一層遙かに富んだであらうと。

若し商工業と外國貿易とが支那に於いて大に尙ばれたと假定すれば、其の勞働者數の多いことと低廉なる賃金とに依つて貿易の爲め多量の加工品を製造し得たであらう。が同時に又莫大な食物消費量と國土の絶大な廣表とから判斷して、其の代りに生活資料を輸入しても著しく目に立つほどの分量を増加するといふことは到底不可能であつたらうと思はれる。従つて加工品の莫大な額は國內で消費されるか、或は世界各國の奢侈品と交換されるであらう。現今に於いては支那は使用し得る其のストックに比して過多の人口を有するやに見え、食料生産上の勞働を節約し得ないのである。従つて支那では外國貿易のため加工品を造る目的で莫大の資金を流用することになれば、必や農業勞働者を奪ふの結果となり、引いては國の農産物を殺滅するの傾向を招く。

今一步を譲り、此の缺損は最劣等地の耕作に加へられる技術の進歩と、努力の節約といふ二大利益に依つて償はれると假定するも、尙生活資料の分量といふ方面に於いては殆ど何等の増

加を見ないのであるから、加工品に對する需要——勞銀の騰貴を伴ふ其の需要の増加は、必然之れに相應する食料價の騰貴を伴ふべく、畢竟勞働者の食物購買力は依然として舊の如きに止るであらう。かく支那の富は明に進み、其の土地並に勞働の年産額の交換價値は年々増大しても眞の勞働維持資金は殆ど停滯して進歩せぬといふことになるのである。此の議論が支那に適用される時一層明瞭に見えるのは其の富が長く停滯し、而も其の土地は殆ど極度迄耕作されたと一般に信ぜられるからである。

凡て是等の場合に上に述べた結果が起るのは、農業に比し商工業に不當の重要さを置くがためではなくして、單に土壤の食物生産力が製造工業上の熟練と趣味とに比して其の限度一層狹隘なるが爲めである。従つて生存制限への接近といふ上からも、是等二種の富中一は他に比して自然其の増加の餘裕と獎勵とを多分に有する次第である。

かういふ譯で勞働維持資金は必ずしも常に富の増加と共に増大せず、況して之れと相比例する如きは頗る稀れなことである。

しかし下層社會の状態が専ら勞働維持資金の増加、即ち一層多數の勞働者を支持するの資力にのみ待つといふことは確かに事實ではないのである。此の資力が勞働者の状態に有力な作用

を成すものであり、且つ人口増加にも主なる要素を成すものであることは疑を容れない。さりながら下層社會の安福は第一食物にのみよるものでなく、又嚴密に必需品にのみよるものではない。彼等は多少の便宜品、奢侈品を有せなくては幸な状態に在るとは云ひ得ないのである。第二に人口増加が生活資料と十分歩調を合せんとする傾向は、一般に是等資料の増加が、貧民の状態改善上、著大永久の効果を發揮することを妨害する。第三、下層民の状態改善上、最永續的效果を有する原因は懸りて各個人自身に依る。従つて直接且つ必然的には生活資料の増加と關係がない。

其れ故、生活資料の増加と同様に、勞働者の状態に影響する他の原因にも注意しつ、一層深く富力増加の作用する有様を究明し、之れに伴ふ利益と不利益と兩方面を説明することが望ましいのである。

或國が自然的規則的發展を遂げて大富力と大人口とを有するやうになる際には、下層階級が必然的に受けなくてはならぬ二つの不利益がある。第一、社會現在の習慣を持續する限り、必需品といふ點から子供の扶養力が減退する。第二、健康上よろしくなく又需要の變動と賃金の不安定が甚しき職業に益々多くの人口が従事することになる。

子供扶養力の減退は或國が人口の極限へ進歩する場合絶対に避けることの出来ぬ結果であ

第二卷 人口理論より生ずる弊害に關し、社會に提供せられ  
或は流行せる種々の制度と方法

る。一定地積の食物產出量か或制限を有することを認むる以上、吾々は又此の制限に近よるに従つて人口増加が緩慢となり、子供扶養力が漸減することを認めなくてはならぬ。而して終に產出食物の増加が停止すれば、平均單に人口増加を許さぬ位の大きさの家族を扶養するだけに止まるやうになる。かゝる情態には一般に勞働穀價の下落が伴ふものである。下層民間に於ける戒慎的習慣の流行に依つて此の傾向が阻止せられると假定しても、やはり早晚同様の結果が起らずには居らぬ。而して此の豫防的制限の作用が大に有力で勞働の穀價が低くないと假定しても、かゝる場合に於ける子供扶養力は寧ろ表面的で眞實のものではない。従つて其の作用が一度顯著となるや否や、此の力はすぐさま消失してしまふのである。

富の増加に伴つて下層階級の受ける第二の不利益は彼等のより大なる部分が不健康な職業に従事し、農業や單純な家内職業に於けるよりも一層賃銀の變動多き仕事に従事するやうになるといふことである。

工場勞働者が健康と賃銀の變動に關して如何なる状態に置かれるかに付いては私はドクトル  
エイキンの「マンチエスタ附近地方の記述」から一節を引用したいと思ふ。

勞働節約のための機械の發明改良は英國の貿易を伸張する上に驚くべき影響を及ぼし、且つあらゆる方面より勞働者、殊に小兒を紡績工場に招致した。しかし利益の存する處必不

利益が伴ふのが人生で、是等紡績工場や同種工場には明に多くの不利があつて普通勞働の便宜改良に伴ふ人口の増加を阻害して居る。是等工場には幼年の子供等が使用せられて居るが彼等は多く倫敦とウエストミンスターの救貧所から集められ、自然と法律とが彼等を任せた人々の手に依り、數百哩も離れて居る處で、知る人もなく、保護もされず、忘れられたまゝ、働いたために徒弟として工場主へ群送されるのである。是等の幼年者は普通閉め切つた室であまりに長い時間働かされる。一晚中働くことさへ稀れではない。機械其他に使用される油杯のため、彼等の呼吸する空氣は有害であり、彼等の清潔に對しては殆ど注意せられない。加之濃い濃厚な空氣から、冷い稀薄な空氣への屢轉は病氣と衰弱の誘引となる。殊に是等工場にて一般に流行する熱病に對して其の誘引となるのである。而してこゝに疑問とせられる一事は少年等が幼年時代にかゝる待遇を受ける事よりして社會自らが害を蒙らないかといふことである。即ち彼等は徒弟期間が満期となつた後、勞働すべくあまりに弱く、といつて其他の業務に就くことは出来ないのである。女兒は裁縫編物其他良妻賢母たるに必要な家事に付きては全く教育を受けて居ない。かゝる状態が彼等自身にとつて、將た又社會にとつて大なる不幸であるといふ事は農業勞働者の家族を一般工場勞働者の家族と比較すれば分ることである。即ち前者に於いては清潔と安福とを見、後者に於いては

其の賃銀が農業者に比して殆ど二倍なるに却つて汚穢と褻褻と貧窮とを見るのである。更に又附記すべきことは幼年時代に於ける宗教的教育と範例との缺乏、是等建物中に於ける多數者の雜居は彼等將來の行狀に對して非常に悪い影響を残すこと之れである（註一）。

右の書物に依るとマンチエスター協同教會戶籍簿は一七九三年のクリスマスから翌年のクリスマスまでに結婚數に於いて百、洗禮式五百三十八、埋葬式二百五十を減じた。附近ロクデイル教會區に於ける減少の割合は尙一層悲惨を極め、一七九二年に於いて出産七四六、埋葬六四六、結婚三三九であつたものが、一七九四年には各々三七三、六七一。一九九となつた。人口に對するこの急激な妨害の原因は、戰役當初に起つた需要と商業信用の破壊であつたが、かゝる妨害が急に起る以上は其の半面に賃金の激落に因る極度の困窮といふことを伴はざるを得ないのであらう。

戰役から平和、平和から戰役へとの轉換より生ずる變動に加ふるに或特殊な工業が趣味の氣まぐれから失墜することのあるのも周知の事實である。スピタルフィールドの紡織業者は絹布に代るモスリンの流行に依つて最困窮の立場に陥つた。シエフィールドとバーミンガムの非常に多くの職工は一時靴の縮金と金屬鈕の代りに紐ミ包み鈕が流行した爲め失職した。英國製造業は全體としては非常な速度で増進したが、或特殊な場所では衰退した。而して衰退の起つた教

會區は必や極貧の窮民群で充滿する狀況である。

一八一五年の穀物法案に先立てる審議中、上院に提示せられた證據の中に種々の記録が——小麥の高價は工業勞銀を騰貴せしめるよりは寧ろ低下せしめる結果を生ずるものだといふ事を示す目的で種々の記録が各工場から提出された。アダム・スミスは明に且つ正しく勞銀は食料價と勞働需給の狀態に依つて定まると説明したが、又小麥不作の場合には勞銀は食料價と反對の方向に變動することもあると説明して居る之れは勞銀が如何に後の原因、即ち勞働需給の關係に依つて左右せられるかを示すものであり、上院に提出せられた記録は彼の此の議論に對して著明な實例となる譯である。然しながら此の記録は彼の議論の他の半面、即ち勞銀が食料價に依つて左右せられるといふ斷定が虚偽であることを證明するものではない。何故なら假令數年間は勞銀と食料價とが反對の方向に動くこともあるにせよ、自然的必然的勞銀、換言すれば勞働を繼續せしむるに足るだけの賃金が支拂はれなければ、工業勞働の供給は結局市場に其の迹を絶つに至るべきこと明瞭であり、而して之れを防がんが爲には勞銀が食料價と權衡を保ち、勞働者が必要な職工數を將來の工業に供給し得る位、十分大きな家族を養ひ得ることが必要であるからだ。此の意味に於いては勞銀は食料價によつて定まるといふことになるのである。

右の記録はかく勞働に關する通説、若くはアダム・スミスの説を打消すものではない。が其



れは他面に於いて工業労働者の状態が大なる變動に曝されるものであることを明示する。

是等記録を通覽すると或場合には紡織工賃は三分一乃至殆ど半分に落下して居るのに麥の價額は三分一乃至殆ど二分一騰貴して居ることが分る。而も是等の割合は必しも價值變動の全般を表はしては居ない。何故なら價額の低廉な時分には需要状態は通常の労働時間さへ働くことを許さないが、反對に價額の高い時分には定時間外の労働をも可能ならしめるからである。

同一の原因から農業上の賃仕事の價にも同一種の差異を生ずることもたまにはある。之れは認めなくてはならない。併し第一に其の差異は工業労働の場合に於ける如く著しくないし、第二に農業労働者の大部分は日雇で、其の日給が一度に一般的暴落を示すが如きは極端に稀な事柄である(註2)。

かういふ次第で富の自然的な、又普通な進程に於ては早く結婚して家族を支持する資力は減少する。而して人口の大部分は、農業労働者に比し健康上道德上の條件が一層悪く而も勞銀の變動一層甚しき職業に従事するといふことを認めなくてはならぬ。

而して是れは實に富の増加に伴ふ著しき不利益で、若し十分ではないまでも、九分通り之れを償ふところの利益がなかつたとしたならば、富の増加は明に貧民の幸福にまつて不利であるといふことになるのである。次に此の有利な方面を考へて見やう。

第一、ストックの利潤は依りて以つて中流社會が主として支持せられる財源であることは明だ。又資本の増加は(其れは増加富力の原因でもあり又結果でもあるが)社會の多數を地主の寄食的境遇から解放する有力な動機となると云つても差支あるまい。限られた肥沃な國土が大きな財産に區分されて居るやうな國家に於いて、資本が少く云ふに足らないほどである限り、社會の構成は自由と善政とに極めて不都合である。之れは正しく封建時代に於ける歐洲の状態であつた。地主は澤山の徒食の家來達を養ふことより外、自分の收入を使用する途を知らなかつた。而して此の地主等の有害な勢力が破壊せられ、其の寄食的家來共が商工業家、職人、農夫、獨立労働者になつたのは實にあらゆる方面に於ける資本が發達した結果であり、かゝる變化は労働階級をも含み社會大部分に對する莫大な利益であつた。

第二、農耕と富力との自然的發達の經路に於いて小麥の増收は一層多大の勞力を要するところなる。しかし同時に又資本の蓄積よりよき分配の爲め、機械が不斷に改良せられ、外國貿易が容易になれば、加工品と外國品とがより少き勞力にて製産され或は購買されることになり、従つて一定量の穀物は國が貧困であつた場合に於けるよりも一層多量の加工品、輸入品と交換し得ることになる。其れ故労働者の得る小麥は従前よりは減少するけれども、彼が食ひ餘した分量、即ち便宜品の購買に使用し得る部分は高い價值を發揮し、量に於いて失へる所を償

つて餘りあるかも知れない。なる程彼は從來の如く大家族を維持する資力を持たないかも知れないが、小家族に一層よき衣ミ住とを與へ且つ相當氣樂な生活を營むことが出来る。

第三、勞働階級は食物が多少拂底を告げ、食物と比較して便宜品慰安品等が十分豊富になつた時、始めて是等に對する趣味を有するに至るものなること經驗の示すところである。若し食物が得易く、勞働者が二三日の勞働に依つて自分と家族とを十分扶養し得ると假定し、便宜品慰安品を得んがためには尙三四日働かなくてはならぬとすれば、彼は自分にとつて嚴密な意味では必要でない品物を得るため、此の勞働をあまりに大なる犠牲と考へるのが普通であり、従つて又よりよき住宅と衣服を思ふよりは怠惰を一層好ましいと考へるのである。フンボルトの云ふところに依れば南米の或地分には殊に此の傾向が著しく愛蘭印度其の他資本と加工品とに比して食物の豊富な國に於いては凡て多少此の傾向が存在するのである。之れに反し勞働時間の大部分が食物を得るために投ぜられる場合には勤勉の風が必然的に發生するから殘餘の時間はよしや其れと代へ得る貨物が些少のものでも之れを愛惜すること甚しい。而してかゝる事情が善き政治に一致した場合こそ勞働階級が便宜慰安の生活に對して明確な趣味を得る最大の望があり、一定時期の後に於いては此の趣味は勞働費價の或程度以上に下落することを妨げる作用をするかも知れない。しかし若し勞働の費價が引つゞきかなり高く、貨物の小麥に對する相對

價が大に下落した時こそ勞働者にこつて最好都合な時である。此の便宜慰安品に對する固定せる趣味があるため、勞働費價が高くとも一般には早婚を阻止するであらうし、彼等の中假令大家族を持つ者があつても使ひ慣れた慰安便宜品を犠牲にしさへすれば獨力で之を養ふ資力にはこと缺かないであらうから。かくて下層民中の最貧者も食物に窮することはめつたにない、同時に下層民の大部分は十分な生活資料を有する上、かなり便宜氣樂な生活が出来るとだし、之れに依りて、自然的の或は後天的の慾望を満足せしむることが出来ると同時に、心意を改善し品性を向上せしむることも出来るのである。

かく富の増加が貧民の状態に及ぼす影響を細心に検討して見ると、其れは勞働維持資金の比例的增加といふことを意味しないが、下層民に對しては或利益を齎らすものであり、其の利益は他方富の増加に伴ふ不利益を償つて餘りあるものである。嚴密に云へば貧民の状態の善悪は社會が十分な富有状態へ進む道程中に生ずる或特別の階段と必然的關係を有するものではない。富の迅速な増加は、其れが主として生活資料を増すものであつても、或はまた便宜品慰安品を増すものであつても、若し他の條件が同一であると假定すれば、常に必貧民の上に好影響を及ぼすものである。しかし此の原因から来る影響ですら他の事情に依つて大に制限せられ變更せられる、其れ故個人の戒心謹慎が富を産むべき熟練勤勉と合致するものでなければ、下層民

は永久に自己の幸福を獲得することは出来ないのである。

(註1) 同書第二一九頁。

ドクトル、エイキン曰く、是等弊害を矯正せんとして色々盡力せられ、或工場では成功した。此の記録が書かれた後、紡績工場に於ける少年の状態が一は當局の干渉に依り、又個人の博愛的な盡力に依り、實質的に大改良を見たることは大に慶賀すべき事である。

(註2) 英國に於ける殆ど唯一の實例は一八一五—一八一六年に起つたものであるが、其の原因は原料生産物の交換價值が未曾有の暴落を示した事であつた。即ち該生産物所有者は同一代價に依つて同一労働量を使用することが出来なかつたのである。

## 第十二章 人口と食物、前後の問題

人口最稠密な時代に於いて、多くの國家は最豊かな生活を爲し且小麥を輸出することが出来、人口稀薄の時代に於いては却つて貧困缺乏が引續き、小麥を輸入しなければならなかつたことはよく人の言ふところであり、埃及、パレスチン、羅馬、シシリ、西班牙等は此の特例として列擧されるが、之れから推論して開墾の餘地ある國に於いては人口の増加は全社會食物量の相對的豊富を減少せしめずして、却つて増加せしむるものであると云はれ、又農業は消費者數に比例して食物を産出する特性を有するものであるとの理由から、ケームズ卿の如く一國農業の支持し得ないほど人口が過剰になるといふことは容易に起り得ないと論ずる人もある。  
*Lord Kaimor*

是等の推論が引出された一般的事實は疑ふべき理由がない。しかしかゝる事實を前提として決してかゝる推論は爲し得ない。

前にも論じた通り、農業は殊に其れが普く行はれれば、實際の従業者以外、多數の人口を支持し得るものである。従つて若し是等の人數——サー、ジェームス・スチュアートがフリー、

Handと名けた人數が此の剩餘生産に依つて養はれる極限に達しなへしなれば、一國人口は長く農業改良の度合に應じて増加を續けることが出來、而も同時に小麥を輸出し得るのである。此の人口増加は單に農業の漸進に因る生産物の緩慢な増收に追隨するものであり、一定期後に於いては、絶對無制限な人口増加とは頗る有様を異にして、人口は矢張り食料を得ることの困難に依つて阻害されるのである。かゝる状態に於ける國の人口増加を測定すべき精確な尺度は食物量ではなくして——何故なら其の一部は輸出されるから——仕事の分量である。而して此の仕事の多少は必然的に勞働賃金即ち下層民の食物購買力を左右するところの賃金を支配することになる。即ち仕事の量が緩慢に或は急速に増加するに従ひ、賃金が少くて早婚を抑止するか或は多くて之を奨励するか何れかになるのである。換言すれば勞働者をして僅に二三の小兒を扶養させるか、或は五六の多數を扶養し得せしめるか何れかになるのである。

此の場合並に其他の既に考察せられた一切の場合に於いて、人口の増加は勞働の實質賃金に依つて支配せられ制限せられるといふが、之に付いては註釋を施して置かなくてはならぬことがある。即ち現在の日傭賃金の額は實際上必しも下層民の消費し得る必需品の量を正しく表はすものではなく、時としては過少に失し、時として過大に失するといふこと之れである。小麥其他あらゆる貨物が騰貴しつゝ、ある際に勞働賃金は常に必しも之れに比例して騰貴せ

ぬ。しかし此の表面的不利益は時として仕事の豊富なること、賃仕事の多大なること、婦人小兒も亦働いて家族の收入を著大に増加せしむること等の事實に依つて却つて利益となることもある。此の場合に於いては勞働者の必需品購買力は現在の賃金率に包含されるよりも遙かに大きく、従つて勿論人口に對しても其れだけ大きな結果を與へる譯である。

之れに反し一般的暴落の場合、賃金が之れに應じて下落せぬ事がある。此の表面的利益は、しかし仕事の稀少、甘んじて働かんとする家族等のために内職を得ることの困難等に依つて屢無効に歸することもある。此の場合勞働者の必需品購買力は現行賃金率に包含せられるよりも貧弱なのである。

同様に貧民家族に對する教會區の補助金、賃仕事の習慣的就業、婦人小兒の就業等は勞働賃金の騰貴と同一の結果を人口の上に與へる。而して他方に於いてはあらゆる仕事の日勘定、婦人小兒の仕事缺乏、及び勞働者の怠慢、其の他の原因から一週間中僅に三四日の就業等は低い賃金と同一の結果を人口上に與へるものである。

右の如き場合に於いては一年を通じ食物量にて測られた勞働者の實收は表面の賃金とは相異なる。而して結婚の奨励、小兒扶養力等の決定は此の場合食物に換算して見た一日の賃金に依らずして一年中の家族收入に依ること明瞭である。

此の重要な事實に注意すれば、何故人口の増加が多くの場合所謂労働賃金に依つて支配せられないかが自ら明瞭となる。又何故人口増加が一日の賃金にて平均以上の小麥を購買し得る時、往々にして却つて減退するかといふことも明瞭になる。

例へば英國に於いては十八世紀の半頃、穀價は頗低廉であつて、一七三五—一七五五の二十年間、一日の賃金を以つて平均小麥一ヘックを買ひ得たのである。而も此の間の人口増加は寧ろ緩慢で、一日の賃金を以つて到底一ヘックの小麥を買ひ得なかつた一七九〇—一八一一年間に於ける如く迅速ではなかつた。此の後の場合に於いては資本の蓄積頗る迅速で労働需要も盛であつた。又食料の繼續的騰貴は賃金の騰貴よりも甚しかつたが、他方苟も働かんと欲するものは皆職を得たること、賃仕事の多量、加工品と比べて小麥の相對的高價、馬鈴薯の使用増加—等は下層民に對して食物のより多量を與へたること疑ふの餘地なく、一般原則とは全然反對に、該世紀後期に於いて却つて人口の一層急速なる増加を見たのである。

同一の理由で若し溫暖な氣候と豊饒な土地で、小麥が安く一日の労働に依つて得られる食物量が人口の急速な進歩を可能ならしめさうなのに、事實必しも左様でない場合がありとするも、其れは稅政の結果怠惰の習慣が根深く、同時に労働需要が不活潑なるため、不斷の就業が不可能である(註1)といふ事實に依つて十分説明がつく。労働日數が漸く一年の半分に滿つる位

の場合には、停止的人口を支持するだけでも、高率の日給を必要とするのである。

慎重なる制限が習慣的に行はれ、便宜氣樂な生活が明確な趣味となつて固定せる場合に於ても、是等の習慣と趣味は早婚を抑止し、且つ事實其の收入全部が穀物購買のため使ひ盡されるといふことはないのだから、結果に於いて此處にか、けた一般原則と一致するのである。即ちか、る國の人口は、若し他の事情が同一であるとすれば、穀賃金の同等に高い他の國、即ちか、る習慣と趣味とが固定せぬ國に於いて普通であるやうな率では増加しないのである。

或國に於ける仕事の量は、氣候の變化に依つて左右される生産物の量のやうに年々變化することはない。従つて仕事の缺乏から來る人口制限は、直接食物の不足から來る制限に比すれば其の作用に於いて漸進的であり、下層民にとつては一層好都合なのである。即ち一は豫防的であり、他は積極的であるからだ。労働に對する需要が停止的であるか、或は其の進歩が遅々たる時は、労働者は家族を扶養するに足る仕事を見出すことが出來ぬか、或は仕事はあつても普通の賃金では家族扶養に不足であることを知つて、勿論結婚を延期するであらう。之れ豫防的制限である。然るに食物供給が氣象の變動と輸入に待つ關係から不確實であるのに、他方労働需要が多少速に増加すれば、人口は明に増加を繼續し、饑饉或は激烈な缺乏から生ずる疫病等

に依て積極的に制限せられるに至るのである。

一般に饑饉と極貧は事情に依つて人口増加に伴ふこともあり伴はぬこともあるが、人口が永久的に減少する場合には必ず之れに伴ふものである。蓋し永久的に人口を減少せしむる原因は食物の缺乏以外にはなかつた事だし、將來に於いても恐らく他になからうと思はれるからだ。歴史上に起れる人口減退の無数の例を見ると其原因は氣象激變、暴力、無智等から人民の勤勉を失はしめ、若くは勤勉の指導を誤り、かくて先づ食物缺乏となり、人口減退を結果すること比々皆然りである。羅馬が小麥の全部を輸入に待ち、伊太利全土を牧場とした時人口は直ちに減退した。埃及、土耳其の人口衰退の原因は既に屢々人の説くところであつた。西班牙の場合に於いては其の原因はモリア人を驅逐して多大の人口を失へるがためではなく、之れに依つて勤勉と資本とを驅逐し永久に人口を阻害するに至つたからである。

或國家が暴力的原因に依つて人口の減退を來し、虐政につきもの、財産の不安定といふことが更に之れに加はるならば——現今人口の一層稀薄となれる凡ての國は、一般にかゝる經過を取つたのだが——食物も人口ももはや回復の餘力を餘さない。のみならず殘存國民は恐らく極貧の生活を送るであらう。然し偶發的の人口減退が、以前人口殷盛勤勉であり且つ穀物を輸出して居た國に起つたとしても、若し殘存國民が従前通り自由に努力勤勉な生活を爲すとするれば、

従前通り豊富に小麥を産出し得られぬ筈はない。況んや殘存國民は國土の最肥沃な處を耕作するに相違なく、人口稠密當時に於ける如く瘠土に倚るの必要なきに於いてをやだ。かゝる國が以前の人口を回復し得るのは明白である。或人々(註2)は食物の相對的豊富な状態に達せんがためには殷盛な人口が始めから絶對的に必要だといふが、若し果して然らば新植民地が舊國家と同一の速度で富を増加せしむることは不可能だといふことになるではないか。

人口問題に對する偏見は昔正貨に關して行はれた偏見に酷似して居る。而して吾々は此の正貨に對する偏見を矯正するに如何なる困難が伴つたかを知つて居る。政治家輩は強大隆昌の國家が殆んど常に人口稠密なるを見て原因と結果とを錯倒し、人口が國家隆昌の原因であると速斷する。丁度舊時の經濟學者が正貨の饒多なることが國富の結果であることを忘れて其の原因であると速斷したのと揆を一にするものである。是等の場合に於いては土地と勞働の年産は従つて第二位に置かれ、其の増加は或は正貨の増加に伴ひ、或は人口の増加に従ふものと誤認せられた。或國の正貨を強制的に増加せしめやうとするの愚は、或程度以上之れを蓄積することの人間の法律を以つてしては絶對不可能なることと共に今や確認せられ、西班牙葡萄牙の實例に依つて實證された。然るに人口に關する誤解は尙存在し、此の誤解の下に、あらゆる政治論は人口を如何に支持すべきやといふ點を閉却して徒に人口増加を獎勵すべしと論じて居る。貨

物の増加なくして一國正貨を増加せしめやうと焦慮するの愚は食物の増加なくして人口を増加せしめんと欲すると相去る遠くない。法律に依つては之れ以上人口を増加せしめ得ないといふ人口上の制限は、正貨蓄積の制限に比し、一層固定して打越ゆること難いのである。例へば國土と勞働との生産物が要求し、且つ他國との權衡上必要な程度以上、多量の正貨を國內に保持することは實際上殆んどあり得べからざるほど困難ではあつても、手段を講ずるの見込全然ない譯ではない。然るに今大獎勵の結果、人口が多大の増加を遂げ、國家全生産を擧げて纔に生命を支ふるだけの食物量を各個人に分配し得る程度に至らば、如何に智恵を廻らして見たところで最早其れ以上更に人口を増加せしめることは絶対に不可能となるのである。

いろくの社會の實例に付いて考へると住民が最未開で最酷い專制政治に苦しめる國は、實際の人口はどんなに少くとも、生産資料に比較しては頗る人口稠密であつたらしく、従つて些少の收穫不良から多大の苦痛を蒙つたのである。一體無智と壓制とは人口増加を促進する情慾を破壊せず、却つて理性と先見とが命ずるところの豫防的抑制を全然破壊するものである。現在の慾求のみを考へるところの不用意な未開人、或は惡政のため自分の蒔いたものを蒔るの確實性をすら有せぬ貧農夫の如きは、將來の不便を豫想して情慾を抑止することをすら知らない。

無智と壓制とから來る此の先見の明の缺乏はかくて寧ろ兒孫の繁殖を促進するの傾向があるが、他面自分達がよりにて以て生活すべき勤勉心に對しては之れを減ぼすの結果を齎らすのである。勤勉は先見と安心とがなくては存在し得ない。野蠻人の怠惰は周知の事である。資本なき埃及若くはアビシニアの農夫、入札によりて年々土地を借用し、壓制な地主の要求と、敵の掠奪と、而して又時としては契約の不利益な條件に苦しめる彼等農夫等の如きは勤勉ではあり得ない。假令勤勉があつても之れを以つて成功することが出来ない。貧窮は一定度を越ゆれば勤勉心を刺戟するものであるが、其れすら彼等に對して殆ど働きかけない。絶對的な貧乏はあらゆる活潑な努力を減ぼし、單に生きるための努力をさせるに過ぎないのである。吾々にとつて勤勉心の最上の刺戟は缺乏其れ自身ではなく吾々の状態を改善せんとする希望と缺乏に對する恐怖であり、極貧の状態を脱出せる階級の間には此の勤勉心の不斷的な而して又最もよく指導された努力が存在するものであるのに、彼等の間には其れがなかつたのである。

無智と壓制の結果は常に勤勉の源泉を枯らし、従つて國の土壤と勞働との所産を減少せしむるもので、此の減少は又出産率の大小如何に拘らず其の國の人口を減退せしむるの結果となる。成程かゝる國では直接満足の慾望強く他方戒慎的抑制の缺乏せるため恐らく一般に早婚を促すであらう。が其れが人民をして極度の貧困に陥らしめた以上はもはや人口に對して増殖的

の結果を生ぜしめない。否其の唯一の結果は死亡率の多大といふ事に表はれるばかりである。婦人にして結婚せざるものなく、而も其の凡てが早婚である南方諸國の死亡率に付精確な統計がとれるとすれば、年死亡率は豫防的抑制の行はれる歐洲に於ける三四、三六、若くは四〇對一といふ比率に對して、恐らく一七、一八、若くは二〇對一といふ多數に昇るであらう。

自然の順序を追ふて人口が増加すると云ふことは本來積極的善事であり、土地勞働の所産を増進する上に絶對的に必要な事である。之れは私も決して否定しない。唯一の問題は其の順序如何といふ事である。此の點に關しては一般的に該問題を論じて正鵠を得たところのサー・ヂームス・スチューアート氏も亦一つの誤謬に陥つたやうに私には思はれる。氏は人口増加が農業の有力な原因であり、農業が人口増加の原因ではないと斷定して居る。なるほど天然産物では生活し得ぬほど多く人口が増加した事は、始め人をして地面を耕さしめることになつたのだし、又家族扶養の希望と、農耕所産の代價として價値あるものを得たいといふ希望が、耕作の有力な刺戟として作用して居るに相違ないが、永久的に増加し行く人口を支持せんがためには、先づ現在人口の最低慾求以上の農産物がなくてはならないのである。吾々は無數の實例に於いて、出産の増加が農業上何等の結果を表はさず單に疾病の増加を伴つた事を知つて居る。

が農業の繼續的發達が其の社會の何處かで人口の繼續的增加を伴はなかつた事例を知らない。従つて農業は人口増加の有力な原因であつて、人口増加が農業の原因ではないといふのが一層適切な斷案である。尤兩者が互に反應し、互に相助け合ふといふことは認めなくてはならないが。要するに問題解決の鍵は此こにあるので人口に關するあらゆる偏見は右の前後を轉倒することより生ずるのである。

「人間の友」(註)の著者は農業衰退の人口に及ぼす影響を論ずる章中、自ら人口増加を國家人の源泉と思惟したことの根本的誤謬を認め、其後に至つて収入が人口増加の源泉であることを確認するに至つたと云つて居る。此の最重要な差別を知らぬ政治家たちは人口を促進するため、早婚を獎勵し、家族の夫長に賞與し、且つ獨身主義を輕蔑するやうな結果を醸成した。之れは同書の著者が道破したやうに種蒔かざる地面に肥料と灌溉とを與へて收穫を望むが如きものである。

農業と人口との前後に付きて茲に論じたる事は此書の初めに論じたること、即ち人口と食物の増加は自然的發達の道程にて動搖轉倒するの傾向ありとの所論とは矛盾しない。此の進歩の道程中に於いて或時期人口が食物より一層急速に進歩することあるは當然過ぎる位普通のこ



とて、其れは寧ろ一般的原則の一部と云つてよい。而して増加人口が製造業に従事することになつて、労働賃價が下落を阻止せられれば、需要益々しけき麥價が騰貴し、屢々農業に對する最自然的な刺戟となる。がしかし此の時に於いてすら人口の大なる増加に先立つて、人民の最低要求以上に大なる食物の増加があつたことを豫想しなくてはならぬ。若し食物の増加が先行しなければ人口は増大し得ないからだ(註4)。

一般に労働賃價が低廉な爲め、多少の期間人口が停止する時は——かゝる事情はまゝ、實際に起ることである。——前に豫め食物が殖えて居るか、少くとも労働者に與へられる割合だけでも殖えて居らなかつたとすれば明に人口は再び前進を始めることは出来ぬ。

同様に労働者の状態を改善し、安慰生活の資料を一層多く與へんと欲すれば、最低消費量を標準として、豫め食物量が増加すること、其の増加量が人口増加量よりも大なることが絶対に必要である。

かゝる次第で嚴密に云へば人間は食物なしに生きることが出来ないから、前後の順序に於いては食物が先に立たなくてはならぬ。但し農作の状態其他の原因から、労働者の得る平均食物量が停止的人口を支持し得る以上に著しく多い時には、此の分量の減少するといふことが却つて農夫の勤勉心を輕蔑し、農業に對して最も有力な不斷の刺戟となるのは當然の事ではあるが。

人口論に關して世間に行はれる他の邪説中、富者階級に浪費が行はれるか、或は國中未開墾地がある間は食物缺乏に對する不平は當を得ないといふ説がある。或は少くとも貧民に對する困窮の壓迫は上流階級の非行と土地管理法の失當に歸せらるべきであると論ずる者もある。併し是等二つの事情は實際上人口増加の制限を一層狭少ならしむるだけで貧民階級に對する困窮の壓迫には殆ど何等の關係が無いのである。若し吾々の先祖が勤勉儉約であつてかゝる習慣を子孫に残したと假定し、何等の浪費が今日上流階級に行はれず、馬も逸樂の爲には乗らず、土地は必開墾するといふことにしたならば、實際地球人口の上には著しき差異を生じたに相違ない。併し下層民の状態、即ち其の賃金家族扶持の難易等には何等加ふるところなかつたであら。富者間の浪費、逸樂のための乘馬等は前に支那に付いて述べて置いた酒釀造のために消費される穀物に比れば何でもないことであるし、是等上流者が右の如く乘馬其他に浪費しつつある穀物を饑餓の際に中止して貧民救助のために投ずるといふことになれば、其れだけ穀物に餘裕が出来るから、必要時にのみ開かれる穀倉と同一の作用をなし、従つて貧民にとつては害どころか却つて益になるのである。

未開墾地に就いて云ふも其れが貧民にとつて毒にも藥にもならないことは明である。急に新

しい土地を開墾すれば一時彼等の状態を改善するかも知れない。又既に耕作された土地を忽諸に附すれば一時彼等の状態を悪化すること明であるが、此の種の變化が始まらない限り未開墾地の貧民に及ぼす影響はより狭少な國土を持つと變らない。唯國が習慣上小麥を輸出するか、或は輸入するかといふことは、貧民にとつて多少重要な關係がある。併し之れとても全國土の完全な或は不完全な開墾とは必しも關係なく、剩餘生産と之れに依つて支持される人々、即ち商業人口との割合に依つてきまるのであり、而して事實上此の割合は一般に全國の開墾を終らない國に於いて最大である。例へば英國の土地が寸尺に到る迄よく耕されたとしても、單に其れだけで英國が小麥輸出國となるとは限らない。輸出といふ點に關する英國の力は、全然此の剩餘生産の商業人口に對する割合如何に依るのである。而して之れは又他面商業か或は農業か、何れに資本が投ぜられるかに依つてきまるのである。

廣き領土を持つて國家が隔々まで完全に耕作されることは望み難い。未開墾地の外觀から國の産業や政治を論ずると隨分無思慮な結論に達するここが少くない。勿論政府としては土地の構柵開墾にあらゆる便宜を與へることは明に其の義務であるが一たび之れが行はれた以上は、後は全く個人の利害に一任せられなくてはならぬ。而して此の主義に依る時は新しい土地が皆開墾せられるとは豫期し得ない。何故なら之れに要する肥料と勞力とは既耕地に使用した方が

屢々非常に有利であるからだ。領土廣汎なる國には常に廣い第二等地がある。即ち其の悪化を避けるため不斷の施肥を必要としながら、肥料と勞力とを大に使用すれば面目を一新し得る土地が其れである。土地改良に對する大障害は十分の施肥が困難であり高價であり時としては不可能なることだ。理論上は兎も角事實上施肥には制限がある。だから問題は何うすれば其れが最有利に使用されるかといふ事になる。今新しき土地開墾の爲めに投じられた一定量の肥料と勞力が、若し既耕地に投ぜられ永久的に却つてより大なる利益を收め得ると假定すれば、開墾を行つた個人も國家も損をする譯だ。此の故に或境地に於ける農夫は最下等地には決して施肥せず、之れからは單に三四年毎に僅少の收穫を得ることに満足し、肥料の全部を（其れは事實上制限せられてあるのだ）最大の割合で効果を上げ得る土地に投ずるのが普通である。

狭少な土地と、土地の収益に依らず他の資金に依つて衣食する大人口とを有する國に於いては事情は自ら異なる譯だ。土地には選擇の餘地がないし、肥料は餘るほどある。だから最下等地も開墾し得られるのである。其れにしても其の人口は單に多いだけでは駄目で、自國の生産を改良しながら他國の生産物を輸入し得るものでなければならぬ。でなければ折角の大人口も狭少な瘠地の僅少な所産に比例して直ちに減退し、土地改良といふことは決して行はれないか

も知れぬ。假令行はれても頗る緩慢であり、従つて人口も此の緩慢な進歩の率以上には出ることが出来ないであらう。

此の好實例はブラバントに於けるカムピネ地方の開墾である。マン僧正の記述に依れば此の地はもと乾燥不毛の砂地であつたので之れが開墾を企てた人は随分あつたが皆失敗した。此の事實は單に耕作のみを唯一の目的とし、之れに依つて衣食せんとすれば此の地方に於ける農業が割に合はぬといふ事を示して居る。しかし或る信仰家の一族が此處に轉住するや、他の資金にて衣食し、第二位的從屬的の目的で之れが開墾を行つたが、土地の改良が十分に行はれると同時に農夫に貸與へ、二三世紀にして終に殆ど全土を開墾し盡したといふことである。

如何なる瘠地でも此のやうな方法に依り、或は工業地の集中の人口に依つては肥やされないことはない。しかし之れは人口と食物といふ問題に關係して人口が先さであるといふ證據にはならぬ。何故なら此の集中人口は或他の地方に於ける剩餘生産といふ十分な食物が豫め存在しなくては存在し得ないからである。

ブラバント或は和蘭の如く肥料が十分で、地面が缺乏せる處では、カムピネの如き地方は有利に耕作される可能性がある。しかし廣き土地と、殊に第二等地とを澤山に持つ國に於いては、かゝる地面を耕作することは個人的國家的資本の明白なる浪費に終るであらう。

佛國は既に其の瘠地のあまりに多量を開墾するの誤謬を發見した。彼等は今に於いて始めて、若しよりよき地面の改善に適用されたならば永久によりき效果を生じたであらう。この勞力と勞働の一部を空費したことを覺つた。あれほど十分に開墾せられ、あれほど人口稠密な支那に於いてすら、或地方には不毛の荒野がある。其れは何を意味するか。食物のためあれほど困難して居るとは見えながら、尙かゝる土地に多少でも肥料を使用することが割に合はないといふことを示すのである。瘠地の廣い面積を耕作することに因り、必ずや種々の大濫費を生ずるといふことを回想すれば此の説が尙一層明確に理解せられであらう。

だから何等其の他の證據がない限り、單に不毛の荒蕪地が存在するからして一國內の經濟に付いて早計な推論を下してはならない。が事實は如何なる國も其の生産の最極度に達したことがないし、又恐らく將來にも達せられないことではないであらうから、生産と人口とに對する事實上の制限が、増收に對する自然の絶對的拒否ではなくして、却つて勤勉の不足若くは勤勉の誤れる指導であるかの如く常に見られるのである。が室内に閉籠められた人はよしや自分の手は四壁に觸れなくとも矢張り此の壁に依つて制限せられて居る通り、人口と生産に關する制限も目には見えなくとも結局土地の増收拒絶に存するのである。だから其れが人口論に關する限りに於いては、或國が一層多く生産し得るか否かは少しも問題ではなく、殆ど無制限に増加する人

第二卷 人口理論より生ずる弊害に關し、社會に提供せられ  
或は流行せる種々の制度と方法

日と歩調を一にし得る如く土地をして生産せしめ得るか否かといふことが問題なのである。例へば支那に於いては農事の改良により米の一定量を増收し得るか否かといふ事が問題ではなくて、次の二十五年間に増加すべき三億の人口を養ひ得るだけ十分の増收を得ることが出来るか何うかが問題なのである。英國に付いて言へばあらゆる共有地を耕作して現在以上の小麥を増收し得るか否かは問題ではなくして、次の二十五年に二千萬の、次の五十年に四千萬の人口を養ひ得るほど増收があるか何うかが問題なのである。

地球の生産力が絶對的に無制限であると假定しても私の此の議論は一毫の微だも其の重さを減じない。何故なら其れは全く人口と食物との増加率の差から生ずるものだからである。従つて今日最開明な政府、竝に最大最良の努力を待つて爲し得るところの全部は人口に對する必然的制限を一層平等ならしめ、且つ之れより生ずる弊害を最少限度に止めしむることであつて、之れが全廢を企圖する如きは絶對に望みなき事柄である。

(註1) 合衆國に於ける人口の増加に比し、米國に於ける西班牙領土の或部分の人口増加が緩漫なるは此の一實例である。

(註2) 是等の人々の中、私は殊にアンダソンAnderson氏を挙げたい。氏は「現在英國に於ける穀物拂

底を招來せる原因に付きての冷靜なる調査(一八〇一年發行) 中にて此の不可思議なる眞理を國人の心理に印象せしめんとした。彼が證明せんとした特殊な論據は次の一點に在つた。

曰く、最極度迄耕作せられ(かゝる事は地球上未だなかつた事だが)ざる國家に於いては人口増加は必や生活資料を減せしめずして却つて之れを増加せしむ。之れに反し人口減退は生活資料を減少せしむと。此の提言は多少漠然として居るが前後から判斷すると人口の増加は相對的の食量夥多を促進する傾あり、其の逆も亦眞なりといふことに歸する云々

(註3) *L'Ami des Hommes*

(註4) 人口理論に従へば人間は食物よりも速に増加する傾がある。だから一國人口は食物の限度迄充滿する不斷の傾向がある。しかし自然法に依つて決して此の限度を越ゆることを許さない。而して此の限度とは停止人口を維持し得る最低食物量を指すのである。斯ふいふ譯で人口は嚴密に云へば決して食物より先行するといふことはあり得ない。

第三卷

人口理論より生ずる弊害の除去或  
は緩和に關する人類將來の望

## 第一章 道德的抑制と之れを行ふの義務

吾々が觀察した各社會の實情に於ては人口の自然的増加は不斷に力強い妨害を受けて居るやうに見える。而して如何に政治を改善しても、移民策を講じても、慈善事業を起しても、將來國民が如何に勤勉であり、或は之れを如何に指導しても或形に於ける人口妨害の不斷的作用を如何ともなし得ぬこと明白であるから、不可避の自然法として吾々は之れに服従しなければならぬといふ結果になる。其所で目下残つて居る唯一の問題は其れが人間社會の道德と幸福に與へる害を最小限度に留めしめんが爲には何うしたらよいかといふことに歸するのである。

同一の若くは相違せる國に存在するところの人口に對する一切の直接的妨害は道德的抑制、罪惡、貧困の三つに分つことが出来る。若し吾々の撰擇範圍が此の三以外に出ないとすれば吾吾は何れを最推奨すべきかといふことに付いては長く遲疑するを要しないのである。

本書第一版にて予は次の如く論じて置いた。自然法の上から人口に對しては必ず或種の妨害が伴ふやうに見える以上、其の妨害は實際的缺乏と疾病から來らずして、家族扶養に對する困

難の豫想と、他の厄介になることの恐怖から來ることが寧ろ好ましいと。予は更に一步を進めることが出來ると思ふ。而して私は疑なく未開時代に生じ、而して自分たちの利害から一部社會に依つて支持せられ、且つ引續き流布された人口に對する俗説が行はれるため、此の問題に付いて吾々が自然と理性との明瞭な指示に従ふことが出來なかつたのだと考へる。

自然的道德的弊害は、吾々の生存に適せず又吾々の幸福を害する如き行狀を避けしめるため、神の用ひ給ふ手段であるらしく見える。若し吾々が飲食を攝せざれば吾々の健康は傷はれる。若し吾々が憤怒すれば後悔の已むなきやうな行爲をせざること稀である。若し吾々があまりに多産すれば吾々は貧乏と流行病とで死ぬのだ。凡て是等の場合に於いて自然法は同様齊一だ。即ち是等は吾々があまりに深く衝動の趣くところに従つて、之れと同様に尊重しなくてはならない他の法則を侵害したといふことを示すものである。飽食満腹に伴ふ不安、憤怒に際して自己に加ふる傷害、貧乏に瀕して感ずる不便等は、衝動を一層よく規正せよと教ふる神の聲だ。若し吾々が此の戒に従はなければ吾々は當然不柔順の罰を受け、吾々の苦痛は更に他人への見せしめとして作用するのだ。

從來人類は増殖過多の結果に留意しなかつたから、是等の結果を其の原因たる行爲と直接に又十分に連關せしめて考へなかつた。が特殊の結果は吾々が之れを自覺することの遲速に關せ

ず嚴存するのだし、吾々が一朝非行の改むべきを知る以上は、右の結果に従つて翻然吾人の行爲を規正すべき義務がある。多くの他の場合に於いても人間の幸福に都合よき行爲は長き苦痛を嘗めた後に於いて始めて人間の上に強ひられたのだ。人間の滋養と味覺の満足に最適當せる食物の種類と其の調理法、種々なる病氣の治療、低き濕地の人體に及ぼす悪影響、最便利にして着心よき着物の發見、よき住宅の建築、文明生活を飾るあらゆる便利と多様の享樂、かゝるものは一度に人間の注意に上つたものではなく、經驗の結果であり、多くの失敗の後漸く承認せられた天警の緩慢な結果なのである。

一般に病氣は不可避の天警であると考へられて來たが、其の大部分は吾々が或る自然法に違反した結果であると考へる方が一層正當であらう。コンスタンチノール其の他東洋諸都市に於ける黒死病は此の種の訓戒である。人間の體質はかゝる汚穢と無感覺には堪え得ない。塵埃と極貧と怠惰とは幸福と道德とに對して不都合極まるものであるから、かゝる状態が自然法に依りて疾病と死亡とを招來し、他人への戒めとなるといふことは、慈愛深き天の配劑に外ならぬのである。

一六六六年に到る迄倫敦に於ける黒死病の流行は吾々の祖先の行狀に對する適當な報ひであつたが、汚穢の除去、排水の敷設、市街の擴張、家屋の通風等は此の恐ろしき流行病を撲滅し

て市民の健康と幸福に資するところ頗る多大であつた。

流行病史に必ず見る現象は食物粗悪にして不十分、狭小不潔な家屋に群居する貧民が其の主なる犠牲者であること之れである。之れは社會の大部分がかく貧しき生活をしないでならなくなるまで、人間が生活資料以上に繁殖するのは自然の一法則を犯すものだといふことを自然が吾々に教へるものである。自然が此の教訓を垂れるに之れよりよい方法が又とあらうか。自然は過食が不健康を招來するといふことを宣言すると全然同一の方法で、此の繁殖に關する法則を宣言して居るのである。而して飽食が人體に悪いといふことが自然法であると同様に此の結果を招來せぬやうな飲食の方法が善であるといふことも又自然の一法則なのである。

自然的慾情の衝動に默従すると途方もない致命的な結果に立至るものであるが、同時に吾々は是等慾情が吾々の生存に非常に大切なもので、一般に之れを弱め減すると必ず吾々の幸福を損ふものだと信すべき十分の理由を持つて居る。吾々の慾望中最有力普遍的なものは食物其他衣住等饑寒の苦痛から脱するため直接に必要な物品に對する慾望である。而して之等の慾望が人間の活動、即ち凡百の改善と文明生活の利便が依つて來るところの人間活動の大部分を躍動せしむるといふこと、並に是等目的の追求と是等慾望の満足が、文化の程度如何に拘らず人類大半の主なる幸福を形作り、残れる一半の一層高尚な享樂にとつても絶對的に必要であること

とは、人々の皆認むるところである。即ち吾々は若し是等慾望が指導よろしきを得れば、測り知るべからざる利益を與へることを知るが、同時に指導を誤れば弊害を生ずるといふことも知つて居る。之れ社會が是等慾望の不法満足に對してひどい罰を加ふる所以である。而も右の二つの場合に於いて慾望は等しく自然的であり、其れのみを抽象して考へれば等しく善なのである。他人の棚から一塊のパンをとつて空腹を満たす人の行爲と、自分の持てるパンに依つて空腹を満たす人の行爲とは、其の結果に依るほか決して區別が出來ぬ。而して是の結果を商量して見ると吾人は茲に始めて次の結論を得るのである。即ち他人のパンを取つて自然的慾望を満たす人を罰せざれば、パン塊は世間一般から減少するといふこと之れ。此の經驗は財産法の根本であり、又其他の點に於いて全く同一である慾望満足といふ行爲に善惡といふ差等が出來る根柢でもある。

今是等慾望の満足から生ずる快樂が一般に其の鮮かさを減ずるとすれば財産に關する犯罪は其の件数を減するであらうが、他方に於いては此の利益は人間享樂の源を狹隘ならしめるといふ弊害に依つて大いに割引されるであらう。即ち人間の満足に寄與するあらゆる生産物の量の減少は比例上盜難件数の減少よりも遙かに多大となり、一方に於ける一般幸福上の損失は他方に於ける幸福の増進に比し、比較にならない程大きいであらう。人類の大部分が攷々營々とし



て勞働する様を見れば吾々は實に次の如き感慨にふれざるを得ない。即ち夕方に於ける食事の樂、温かき家と氣樂な爐邊の樂……是等の樂が日中の勞働と不自由とに興味と元氣とを與へる十分鮮明な刺戟とならなかつたならば人間幸福の源泉は大打撃を蒙るであらうと。

食欲の次ぎに最有力一般的な慾望は廣義に於ける情慾である。情慾の人生に及ぼす幸福に付いては之れを感知せざる人は稀れである。友情に依つて高尚にされた正しい戀愛は殊に人性に適切にして、又最力強く精神的同情を喚起し、且つ最いみじき喜を與へるところの、肉慾的にして智識的な一種の混合的享樂であるらしく見える。假令どんなに智的快樂の盛んな人であつても、苟も一たび正しき戀愛の純乎たる喜びを経験した人ならば、必や其の戀愛をば生涯の思ひ出とし、花やかな其の頃の生活を繰返したいと願はない人はいないであらう。

ゴドウィン氏は肉體的快樂の劣等なることを示さんが爲め、曾て「性交より之れに附隨する事情を除け、然らば其は一般に輕蔑すべきものとならん」と云つたが、此れは恰も木を鑑賞する人に向つて、其の木から廣がれる枝と、愛すべき青葉をとりて裸柱となれるものに何の美があらうと云ふに等しい。即ち吾々の讚美を惹起するものは枝と青葉のついた木であつて、其れ等のない木ではない。同様に吾人の愛をそゝるものは其れが單に女であるといふことではなく

して、彼女の「均齊の美であり、快活さであり、氣立の柔さしさであり、愛情のこもつた親切さであり、空想と機智」とである。

兩性間の情慾が直接の満足をする時に限り、人間の行爲に作用し影響すると想像するのは大なる誤謬であり、生涯の或特殊計畫を立て、之れを確實に追求することが幸福の最永続的な一原因であるとする考は正常である。而して世間多數の計畫中此の情慾の満足並に之れから結果する兒供の扶養と大關係を有せざるものは少いと思ふ。晚餐、温かき家、氣樂なる爐邊、是等は若し共に分つべき或愛情の對象がなかつたとすれば其の興味の大半を失ふことであらう。

次に吾々は兩性間の愛情が人間の性質を柔和にし、善良にし、慈悲と憐憫の心を躍動せしめる傾ありと信すべき大なる理由がある。野蠻人の生活に對する觀察は一般に愛情の發達鈍き國民が獍猛邪惡であり、殊に婦人に對して壓制忍殘であることを證明する如く見える。實際夫婦の情愛が若し大に薄弱となれば、男は其の勝れた肉體力を以つて野蠻人に普通である如く妻を奴隸とするか、然らずんばよくいつたところが兩性間に起る少しの不和が愛情を疎隔するの結果となるであらう。而して此の事實は同時に子供に對する愛情と注意とを殺滅し、社會全體の幸福上に重大な影響を與へずには已まないであらう。

更に又注意すべき一事は、各國人性の觀察から得たる結論に依れば情慾は青春尙早の満足を阻害せられる時却つて強く、其の柔和、親切、懇懇等の資質を生ずる上の一般的効果が一層有力である。あらゆる衝動が殆ど直ちに満足せられる南國の或部分に於いては愛情は單に動物慾に墮し、過度に陥ることに依つて弱められ殆んど絶滅する。従つて品性に及ぼす影響は頗る僅少なのである。然るに歐洲諸國に於いては、婦人は社會から隔絶せられては居らないが、情慾の満足には習俗上著しい制限が付せられて居り、其のため情慾は却つて強力となるのみならず、其の效果の一般的にして有益なる點に於いても大に勝れて居り、其の満足せられること最少き所に於いて屢々品性の形成陶冶上最大の影響を與へて居る。

かく兩性間の情慾をあらゆる關係から考察し、其れから生ずる親子の情義迄もこめて考察すると、其れが人間幸福の主要な要素であるといふことはだれも否定することが出来ぬ。併し經驗に依ると其の不正な満足から生ずる弊害も亦少くない。此の弊害はなるほど利益と比較すれば重要視するに足らぬものかも知れないが、其の絶對量は情慾が強力普遍なものであるだけに決して輕視は出来ない。其れにしても各國政府が定めた罰則を見れば、此の原因より來る弊害は財産慾の不法満足ほど社會に對して直接の大なる脅威とはなつて居らないこと明である。然るに此の弊害を極端に恐れると、其の原因たる情慾の撲滅乃至滅度といふ高い代價を拂つて

之れを買はなければならなくなる。而してかくの如きは恐らく人生を冷氣索然たる虚空と化するか、或は野蠻犖猛な社會と化するか、恐らく其の一に終るであらう。

あらゆる人間情慾の間接直接の結果と、一般自然法とを細心に觀察すると、現在事情の下に於いては、是等情慾を大に殺滅すれば必然に弊害よりもより多く之れより豫期される利益を害すると結論しなければならない。而して其の理由は明白である。情慾は事實上凡ての快苦の材料であり、幸不幸の材料であり、善と惡との材料であるからだ。故に又吾々の必要とするところは其の殺滅撲滅ではなくして、之れを規正し指導するにあるといふ事に歸する。

ペイリは此問題に付き次の如く論じて居るが蓋至言である。

人間情慾は人間の福祉に必要である。少くとも幸福に資せしめることが出来るし、實際大多數の場合に左様いふ結果を表はして居る。是等情慾は強力で一般的である。又左様でなかつたらば其の目的に添はないであらう。しかし其の力強く且つ普遍的であるといふことからして、其れが放任されると過度に流れ、濫用されることになる。而して此の濫用と過度からして人間の罪惡（其れは又多く不幸の原因となるが）が発生する。此の事は罪惡が如何にして發生するかを示すと同時に、理性と自制の作用すべき範圍をも示すものである（註1）。

其れ故合理的生物としての吾々の道徳は、神が吾々に與へた一般的材料から最大量の幸福を抽出するにあるといふことは明白だ。而して自然の衝動は凡て抽象的には善であり、唯其の結果に依つて差別が出来るのだから、此の結果に嚴密な商量を加へ、之れに従つて行爲を規正するといふことが吾々の主要な義務となる。

人間の生殖は或點に於いては兩性の情慾とは明白に別なものに屬する。何故なら其れは情慾の強弱に依るよりもより多く女子に妊娠の能力があるか否かといふ事に依るからだ。而して之れも亦大體に於いては凡ての他の自然法と精密に同一のものだ。其れは強力普遍的で大に殺滅すれば繁殖の目的を達し得ない。其れに伴ふ弊害は強力普遍といふ屬性に免れがたいものであるが、人間の精進道徳を以つてすれば大に輕減され得るものである。吾人は地球上に人間が満ち殖やされるといふことが神の御心であることを疑はない。而して此の目的のためには食物よりも速く人口の繁殖する傾向が必要であると思ふ。而も現在の如き増加の原則を以てしては地球上に人口を殖やすといふとはあまり迅速には行はれないのだから、此の増加の原則は其の明白な目的に對して強力過ぎる底のものではないと信すべき理由があるのである。人口が若し強力普遍的に生活資料の供給以上に、迅速に増加せんとする傾向がなかつたと假定すれば、生活資料を得んとする人間の慾望は比較的に微弱であり、人間能力の改善上、是非共必要な普遍的

努力をも生ぜしめないかも知れない。若し此の人口増加の傾向と生活資料に對する慾望とが精確に平均すると假定せば、人間の怠惰に打勝ち、進みて土地耕作をなさしむる如き有力な動機は之れを求めるところがなく、何んなに肥沃な大領土でも恐らく五百、五千、五百萬、五千萬の人口にて停止するであらう。故に此の二傾向の平均は却つて繁殖といふ大目的に反すること明である。現在事情の下に於いては吾々は多年を経ずして無人の地に人間を充満すべき偉大な繁殖力を持つて居る。而も同時に又他の事情の下に於いては此の力は比較的少量の弊害を拂ひさへすれば、吾々の道徳と努力とに依つてどんなにでも局限することが出来るのだ。若し此の事例に於いてのみ附隨的缺點を除く道なく、人間の惡徳、即ち他の一般自然法から發生する部分的弊害に對して匡濟の策なしとすれば、凡ての他の自然法との一致は卒然として破れる譯である。若し何等の弊害をも伴はしめずして人口増殖の大目的を達成せんとすれば各國の事情が異なるに從つて増加の法則に不斷的改變を加へることが必要となるであらう。しかし其れよりも法則自身を普遍的のものとして置いて、之れに附隨する弊害は人間自身をして輕減或は除去せしむることが他の自然法との一致を完うせしむる所以であるのみならず、人間心意の形成陶冶上にも其の方が助けとなるのである。此の場合に於いては人間の義務は境遇に依つて違つて來、彼は自己の行爲の結果に付いて一層注意を怠らず、彼の能力は、事情に従つて時々法則を

變更することに依り弊害を除去する場合に比して、明に活躍の餘地多く、従つて又改善進歩の機會も多い譯である。

若し情慾が容易に鎮壓せられるか、或は密通が容易に行はれる結果、獨身生活が少しの苦痛もなく又多少の不自由をも伴はなくなれば、地球上に人類を繁殖するといふ自然の目的は明に失敗に終るであらう。人口があまり急速に増加せぬことは人間の幸福に極めて重要なことであるけれども、之れが爲め結婚の慾望が大に薄弱となることは又其の目的を達する所以ではない。兒孫扶養の望の出来る迄結婚を差控ゆることは明に吾人の義務である。しかし同時に自分の希望を實現するために努力し、且つ一層多くの家族を養ひ得るやう刺戟を得んがために、結婚の慾望を衰退せしめずして把持することが必要だ。

故に人口理論に關して必要とせられることは、情慾の殺滅變更ではなくして規正と指導であること明だ。而して若し道德的抑制が此の理論の附隨的弊害を避ける唯一の道德的方法でありとすれば、之れを實行すべき吾々の責務は、他の道德を實行すべき吾々の義務と精確に同一根據の上に存するのである。

困難と知られて居る義務の遂行に際して屢々失敗が伴ふといふことは、吾々も之れを認めるに吝なるものでないが、而も困難ではあつても義務はやはり之れを行はなければならぬ。吾

吾が子供を扶養し得る相當の見込の出来る迄結婚せぬといふ義務は、之れを遵守することに依り、貧困の防止の上に最大の効果を持つものだと分れば、道德學者達も亦之れに注意するの價値があるといふことを覺るであらう。即ち若し自然の第一衝動に服従して青春期に結婚することが一般的風習であると假定すれば、あらゆる道德がどんなに盛であつても、最ひどい絶對的貧窮の状態、並に之に伴ふ疾病と饑飢から社會を救ふことは到底出来ない。この事が分つたならば、吾々の結婚延期に對する義務は又道德學者等の注意を惹起するに足るであらうといふのである。

(註1) Natural Theology 第二十六章

## 第二章 道德的抑制の實行が社會に及ぼす影響に就いて

人口は生活資料以上に増加する不斷的傾向があるといふ説に、人々が同意せぬ主要原因の一は自然法の生かして置くことの出来ないやうな人間を神が自然法に依つて此世に生れしむるといふ事の信じ難いところから来る。併し是等自然法に刺戟されて勤勉心の一般的活動と指導とが始まるといふこと、それに加へて自然法の附隨的弊害は吾々の注意を常に人口の適當なる制限、即ち道德的抑制に向はしめるといふことを考へるならば、而して又是等弊害も自然と理性が吾々に教へ、且つ天啓に依つて確證は認められた義務を嚴重遵守することに因り、回避し得るのだといふことが判明すれば、右の反對も自ら氷解し、一見神の善意に對する冒瀆と思はれる誤解も消滅するであらう。

異教道德學者は徳を中介とせずしては幸福は地球上にて達し得られぬと説いた。而して彼等の所謂徳中に最高の位置を占めるものは用心戒慎であり、或學者の如きはあらゆる徳を以つて

此中に包容されると説いた。クリスト教は吾々が天國の樂みを受するに適當なる如き道德の實行に現在並に未來の幸福を置く。従つて情慾を理性の制御下に置くこと（之れは用心の全部ではないとしても其の主要なる要素だ）は殊に勸説せられるのである。

古來勝れた哲學者たちが自然法から演繹した義務、直接經驗から教へられ、且クリスト教の道德教義中に有力な是認を経たところの其れら義務の嚴守に依つて、各人が其の幸福を得んと努むる如き社會が若しあつたと思像すれば、今日吾々が考へる社會とは頗る趣を異にするであらう。其處では直接の満足を目的とし、より大なる苦痛を結果する如き行爲は義務に反するものと考へられる。従つて二兒を養ふに足るだけの収入しか無い者は如何に情慾に驅らるればとて四兒五兒を養はなければならなくなるやうな境涯には決して身を置かぬであらう。而してかかる慎重な抑制が一般に採用せられる時、市場に於ける労働の供給を局限し、自然に賃金を騰貴せしめるであらう。満足延期間には獨身者は収入の過剰を貯蓄し得べく、他面眞面目、勤勉、經濟の習性を得、數年後には其の結果を疑懼する要なく結婚生活に入ることが出来るであらう。かく豫防的制限は常に人口を食物の増加に追隨せさせながら、しかも之れを其の局限内に留め置くからして、賃金の騰貴と結婚前の貯金はこゝに始めて眞價を發揮する。之れを無理強ひに行はれた賃金値上げや、勝手にきめられる教會區補助金等に比すれば非常な相違である。（何故

なら是等後者の場合に於ける収入増加は必ずや其れだけの食料騰貴を伴ふからである。かくて勞働者はかなり大きな家族を養ひ得る賃金を得、且つあらゆる夫婦は多少の豫備金を得て世に出るのだから、全くの極貧は世に絶つことになり、偶々之れあるとするも其れは如何に用心をして見ても不幸を避け得なかつた少數者に止るであらう。

此の假定社會に於いては青春期と結婚時期との間の期間には嚴重な純潔さが維持せられなければならぬ。何故なら純潔さを破れば必や弊害を伴ふからだ。妊娠を妨げる亂交の如きに到つては明に美しい性情を弱め、殊に婦人の品性を墮落せしめるものだ。其他の交接に到つては或種の不都合なる手段を弄せざる限り、結婚と同様に多くの子女を出生せしめるに相違なく、是等産兒が結婚者の場合に比し、より多く社會の負擔となることは恐らく避け得ないであらう。

かく考へて來ると性の純潔は或人々の想像する如く人爲的社會の無理な産物ではなく、人口理論から屢發する罪惡と貧困とを避くべき唯一の道德的手段であるから、自然と理性に最眞實堅確な根據を有するものと云はなくてはならぬ。

此の假定社會に於いては男女共長く獨身生活を送らなくてはならぬ者がある。而して比較的長く獨身で居ることが一般的となれば、後年に到つて結婚する者がより多數となるであらうから全體として一生を獨身で過さなければならぬ人は其れだけ減する譯である。晩婚が一般

の習俗となり、純潔の喪失が男女にとつて共に不名譽となれば、一層親密な男女の交際が危険を伴はずして行はれるであらうし、男女共に密通や結婚の意志を疑はれずして懇談することが出來、共に相手の性質を熟知し、結婚生活の幸福上必要な強き永續的の愛着の生ずる機會を掴み得る譯である。かくて青年期には愛情の十分な満足を得ないが、しかし全然愛情を伴はない譯ではない。情慾は現に吾々が見る如く尙早の満足に依りて損はれ、失はれることなく、後に一層赫灼、純潔、的確な情焰となつて燃えさかることが出来るやうたゞ一時鎮壓されるだけのことである。而して又結婚生活の幸福は、單に直接の満足を與ふるがためではなく、勤勉と徳操の報償として、又純粹不變な愛着の結果として望まれるやうになるであらう。

戀愛に伴ふ情熱は品性の形式上有力な刺戟で、屢々高尚仁俠な努力となる。但之れは情愛が一つの對象に集中され、而も種々の困難に依つて其の十分な満足が延期された時に限られる。事實人間がかゝる情愛の影響下に在る時ほど道德的な行を念ふこと少く、此の時に於けるほど性的純潔を守るに容易なことではない。かゝる社會に於ける晩婚は、名稱は同一でも今日の晩婚とは雲泥の相違があるだらう。蓋今日の晩婚に於いては夫婦は往々利益の爲めに結婚し、屢身體も愛情も勞れ果て、居るからだ。又今日の晩婚は主として男に限られて居るが、彼等は自分は何んなに老境に在つても配偶として若き婦人を選ばざること稀れである。だから財産なき

若き婦人が空しく二十五歳を過ぎると、一生を獨身で送るのではないかと自ら自分の前途を恐れるのも尤至極のことなのである。彼女は強き愛情を抱き得る心を持ちながら年の過ぎ行く毎に、愛情の對象を發見するの望が漸次減少するを感じ、又境遇に伴ふ不安が世間の愚劣不公平な偏見によつて益々甚しくなるのを感じるのである。若し婦人間に於ける結婚の一般年齢が晩くなれば若き望の時代が長くなり、而も最後に失望する者の數が減るのである。

かゝる變化が社會のより道徳的なる一半の人々にとりて明に利益であるべきこと疑ふの餘地がない。男は大なる不自由を忍ばなくてはならないかも知れないが、其れは又女の甘んじて忍ぶところである。若し一般婦人が安んじて二十七八歳を婚期として望み得るやうになれば、二十五歳で大家族の氣苦勞をするよりもたしかに此の時期迄待つことをよしとするであらう。尤も適當な結婚年齢は事情と境遇によつてきまるものだから一概には定められないが、人間の一生を通じ、十七八歳から二十歳迄の期間ほど性の衝動の強烈な時代はない。併し理性と先見との全くない下等の社會状態を脱した處に於いてはかゝる早婚の傾向は必や抑制せられるに相違なく、若し事實上この自然的衝動に對する抑制が是非とも必要なことであるとすれば、現在社會の下に於いて家族を養ひ得る見込のたつ年齢を以つて、抑制解除の時期と爲すのが至當ではあるまいか。

此說に對しては恐らく道徳的抑制が困難であるといふ反對が出るであらう。クリスト教義を認めない論者に對しては、予は唯一般自然法から生ずるであらうところの或種の弊害を避けるため此の道徳が絶對的に必要であると云ふに止めたい。元來非クリスト教道徳學者の說に依れば、自然法と矛盾せずして最大善を求めるのが人間の義務である、即ち或種の自然法に従ひ他の自然法を無視することに依つて最大目的を逸し、却つて差引多量の不幸を醸さないやうにするのが人間の義務だとせられて居るのである。徳は永久的幸福に達する唯一の途ではあるが、之れを攀登ることは常に容易な事ではない。之れ實に彼等の説く所である。

クリスト教徒に對しては予は次の如く云ひたい。即ち吾々の情慾を理性の制御下に置くといふことは聖書に依つて明確に吾々に示された義務であるからして、理性が必不幸な結果に終ると教ふる如き方法にて慾望を満足せしめることは、此の法則に違反すること又疑ふの餘地がない。苟もクリスト教徒である以上道徳的抑制の困難を理由として此の義務に反對することは出来ない。何故なら聖書は各べーヂ毎に、人が抵抗し難い誘惑に依つて圍繞され居ることを記し、其の命ずるところの義務は必や天上に於ける如く地球上の幸福にも資するものではあるが、而もよく之れに従ふといふことは始めから難事であるを教へて居るからである。

少年の愛せんとする傾向は非常に強力なもので、此の時代に於いては彼の戀が一時的のものか眞に永久的のものか區別することは極めてむづかしい。少年の頃から相似たる性質の男女が容易に相交はることが出来、而も男女共に道德的抑制を守ることが出来るとすれば、米國の如く年少早婚の可能なる國に於けるよりも一層幸福な結婚が行はれ、従つて相互の愛情は一層大なる快樂を生むのではないだらうか。吾々が上來假定し來つた社會に於ける男女交際を現在歐洲に行はれる男女交際と比較すれば、前者に於いて貧困といふ重荷を避け得る利益は姑らく之れを別として論ずるも、愛情から起る快感の量が大に増加すると斷言して差支ないであらう。

若しか、る制度が一般的になれば社會の對外的關係に於ける幸福の増加は、社會内部に於ける其れの増加に比して劣らぬほどとなるべく、戰爭といふ人類の大慘事が現在に於ける如く屢發して廣く暴威を振ふといふやうなことは絶滅するであらう。

戰爭の最初の一原因、最有力な一衝動が餘地と食物の缺乏であること疑を容れない。戰爭が始めて人間の間に於いては、人類の事情は大に改變せられたが、同じ原因が尙存在して、其の規模は小さいながら矢張り結果を生みつゝある。若し下級民の貧乏が彼等をして王公の旗下に向はしむることがなかつたならば、王公の野心も實現の手段がなかつたであらう。新兵募集官たちは常に收穫不足と失業とを祈りつゝあるではないか。換言すれば過剰人口を狙ひつ

つあるのではないか。

人間の初期に於いて戰爭が人間の一大事業であり、此の原因からの人口殺滅が現在よりも更に大きかつた時代に於いては各國立法官政治家等は主として攻守の關係から不妊と獨身とを貶し、結婚を尊んだ。生殖崇拜教はかくて發生し、自然の生殖力は嚴肅な崇拜の的となつた。マホメット教——此の教は劍に依つて押し擴められ、従つて此のために非常に多くの信者を殺した譯であるが——に於いては神を讃えんがため、小供を繁殖することを人間の一大義務とし、最多數の兒孫ある者は此の世に生れた目的に最よく添へるものと考へられた。かゝる道德觀は勿論大に結婚を奨励することとなつたが、之れに伴つて起れる迅速な繁殖は不斷の戰爭に對して其の原因ともなり又結果ともなつたのである、即ち戰爭に因る人口の荒廢は新しき繁殖供給の餘地を作り、此の供給の流溢過剰は更に新しき戰爭の刺戟となり手段となるのである。だからかゝる道德觀の行はれる以上戰禍は果して何日止むに至るか分らないのである。

クリスト教が結婚と子孫繁殖に關する吾々の義務を、クリスト教以前に於けるとは異なつた見方で見るといふことは、此の教の眞實性と神格とを證明し、其れがもつと進歩した社會にも適用せられることを示すものとして愉快に思はれる。

此の目的に就いて細論を試むるのは岐路に入るものだから已めるとして單に此の事だけを云



つて置かう。即ち若し吾々が結婚に關する聖ポールの宣言の精神を、今日の社會狀態と周知の人間性に適用するならば、其の自然の結論として、結婚は其れがより高尚な義務と撞着せざる時正しく、撞着する時誤りであると云ふことに歸するらしいと。倫理學の純真な方則に従へば「行爲が一般幸福を増進するの傾あるか或は減少するの傾あるかを究明するは、自然法より神の意志を知るの方法である」と(註一)。小供を扶養するの資力なくして結婚するほど直接一般幸福を減少するの恐れあるものは少からう。故に此の行爲に出づるものは明に神意に反するのだ。即ち自己の生活する社會の負擔となり、且つ家族を擧げて道德的習慣の維持最困難なる貧困に投ずるからして、自己竝に隣人に對する義務に違犯し、情慾の奴隸となりてより高尚な義務に背反する者と云はなくてはならないのだ。

予の假定せる社會、即ち其の各員が自然法より抽出せられ神の啓示に依りて強きは認を経た道德律に服従することに依りて幸福を得んと努める社會に於いては、上述の如き無責任な結婚が決して行はれないこと明瞭である。而して此の方法に基く過剰人口の防止は、對外的には攻勢戰爭の一主因を一掃することとなり、對内的には相互に因果的關係に在る二つの不幸な政治的病患、即ち内治上の壓制と動亂とを根絶するの力あるものである。

攻勢的戰爭を行ふの意志なきか、る社會でも防衛的戰爭には盤石の如く鞏固な位置に立つの

である。各家族が十分に必需品を持ち、相當氣樂な生活を送り得る場合には、社會變動を思ふの念、或は之れに對する幽鬱冷淡な態度、——其れは下層民をして「何んでも起るなら起るがよい。俺達は今より悪くなりやうはないのだ」を叫ばしめるところの——が起りやうがないのである。各個人が自分の享受する確實な利益の價値を自覺し、何かの社會變動が起れば、却つて此の利益を失ふのみだと思ふ場合には、人々は侵入者を排撃するために協力一致するに相違ない。

かく道德的自制を行ふことに依り、人口理論より生ずる弊害——自己竝に社會に對して——を避けることは各人の權能に屬すること明なるが故に、又此の道德の實行は各人の幸福を減ずるよりは寧ろ多少増す傾があると考ふべき理由があるが故に、之れを以つて神の公平を彈劾すべき理由はないのである。即ち神の一般法則が此の道德の嚴守を必要とすること、吾人が之れに背反すれば罪惡に伴ふ弊害と、天死の種々な形に伴ふ苦痛とに依つて罰せられることは事實であるが、之れを理由として神の公正なさを非難するのは當らないのである。予の假定せる如き眞に道德的な社會に於いては是等の弊害は存在しない。だから神の明瞭な意圖は、惡徳に伴ふ苦痛に依つて惡徳を避けしめ、徳が招來する幸福に依つて吾々を徳に導くにあること想像に難くない。而して吾人の考ふる所に依ればかくの如きは神の慈悲にふさはしい行爲であり、

人口に關する自然の法則は實に神の此の意圖を促進するの傾を有するのである。神の慈悲に對する非難——不完全な生活状態に必附隨する凡ての弊害のどれにも等しく適用せられ得ないやうな偏派な非難——は、是等自然法の上には築かれ得ないのである。

(註I) Paley's Moral Philosophy, vol. I. b. ii. c. iv

### 第三章 貧民の状態を改善すべき唯一の有 効なる方法に就いて

茲に道德律、若くは道德標準を公表する者があると假定し、彼の考として、之れは各人が必嚴守しなければならぬものであるとする。而も其れが一人のこらず、普遍的に實行されるものとはまさかに信じないであらう。併し此の事實は右の道德律發表に對して正當な反對理由とはならぬ。若し單に一般的に行はれぬといふとが或法則に對する正當な反駁となり得たならば、かゝる反駁は常に起り、吾々は全然道德の一般原則を持たぬこととなるべく、誘惑より起る人間の罪惡に加へて、無智より生ずる罪惡を現在に比してより多く持つことになるであらう。

單に自然法より判斷して、若し吾々が一方人口過多より貧困の生ずることを確知し、他方亂構より殊に婦人に對して弊害と不幸とが與へられることを確知するならば、功利を道德の大規矩と信ずる人々は、道德的抑制、即ち家族を養ひ得るに至るまで堅く道德を守りつゝ、結婚を延期するところが吾々の守るべき義務であると結論せざるを得ないであらう。況して神の啓示は更

に此の義務に對して強い確認を與へるのである。此の道德的義務はかく自然法からも神の啓示からも確認されるのであるが、併し予は人間の一般的行狀が之がため、急に大變化を起すべしとは樂觀せぬ。此の點予は讀者よりもむしろ悲觀に傾いて居るのである。然らば何故前章に於いて私は此の道德が行はれると假定したか。其れは神の善意に對する非難を剷除せん爲めであつたのである。即ち人口理論より生ずる弊害は、他のあまり非難の聲を聞かない弊害の一般的なると全く同一性質のものであるといふこと、此の弊害は人間の無智と怠惰とに依つて増進せられ、智識と道德とに依つて減少せしめられること、各人が若し此の義務を嚴守すれば此の弊害は殆んど全く除去せらるべきこと、而も此の除去は正しく人間幸福の主要素と考へられ來つた情慾の合理的満足から生ずる快樂の源泉を何等衰退せしむることなくして行はれること等を示し、之れに依りて神の善意に對する非難を芟除せんとしたのである。

予の考へでは若し多少でも説明上の役に立てば、或社會の各個人が正に自分の義務とするところを嚴守すると假定して見たところ差支なく、又自説が實行的價値を發揮し、所期の改良的效果——中庸部分的の効果が義務の完全な理解から豫期せられる效果の全部ではあるが——を收め得んがためには、社會の普遍的な遵奉服従が必要であるとも考へて居らぬから、夢想的であるとの非難を蒙る理由もない。

此の點に就いては前章假定の理想社會と、此の問題に關する他の多くの假定説との間に大なる逕庭がある。予の假定せる社會の改良は、從來大進歩が遂げられた場合に見たる如く、各個人が其の利害と幸福とに直接注意しさへすれば實行されるのである。吾々は新規な動機から行動するの要なく、又吾々によくも分らぬ一般的利益などを追求する必要もない。全體の幸福は個人の幸福の結果であるから、先づ個人に始まるべきもので、協同一致もいらぬ。各人のあらゆる行動は皆其れだけの効果を有するものだ。他の多くの個人が何うであらうと、自分の義務を忠實に行ふ者は其れだけの結果を得るのだ。而して此の義務の必要は何んな馬鹿にも分ること、其れは自分の養ひ得ない子供を生むなといふ事に外ならぬのだ。今教會區法や個人の慈善といふやうなものがあつて此の義務は不明確になつて居るが、若し一たび是等の雲を一掃すれば誰れでも此の義務の必要を痛感せぬものはないであらう。若し彼が子供に食はせなければ子供は餓死する。若し彼が自分の子供に食はされぬことが明であるのに結婚すると假定すれば、彼は自己、妻、並に子供自身に對して齋らす一切の弊害に付いて責任を負はなくてはならぬ。だから子供扶養の能力が出来る迄結婚を延期するのは明に彼自身の利益である。而して此の延期の間彼の情慾を満足せしむることは明に神の命に反することであり、自己並に他人を損傷するの危険が伴ふのだから、苟も自分の利益と幸福とを一考する者ならば、此の間道德的に行動

するの必要を痛感するであらう。

情慾の衝動は如何に強烈でも一般に多少理性に依つて變形せられるものである。だから貧の眞實な永久的な原因が明瞭に示され、各人の胸の中に力強くたゞき込まれたならば、多少の而して輕視することの出來ぬ影響を彼の行爲の上に表はすであらう。私が斯様に想像するのは必しも全然夢幻的な空想ではないと思ふ。少くとも此の事は未だ曾つて十分には試されたことがないのである。從來貧民に對して行はれた事はたゞ此の問題の真相を掩ひ隠し、彼等が貧乏になつた原因を見せざらんとするに止るのである。例へば勞銀が僅に一兒を支ふるに足る場合、結婚して五六兒を設けるとする。彼は苦しさの餘り、先づ教會區が救助義務を果すの緩慢なるを罵るのである。恐らくは彼は又神の配劑の悪きがため不可避的な困窮に陥れることを歎くであらう。が彼の罵倒は彼が貧乏の眞の原因には至り及ばない。即ち彼の貧の眞原因は實のところ彼自身に外ならないのであるが、自分が資本家達に欺かれたといふ一事の外は、彼は決して自分自身を責めないものである。彼は現に結婚の不便を感じて居るのだから或は結婚しなければよかつたとは考へるかも知れない。しかし其れにしても自分が此の爲め悪い事をしたとは思ひ及ばないのである。彼は國王の爲めに子供を生むことは一大勳功であると教へられて來た。而

して今彼は之れを行つたのだ。而して苦しむで居るのだ。だから國王と國家とが常に殊に要求して居た者を與へた代りに自分が苦しむのは、國王と國家が最不公平殘忍であると思はざるを得ないので。

是等謬想が打破され、人口理論に就いて自然と理性の言葉が透徹する迄は普通人の理解力が正當な實驗を経たとは云ひかねる。彼等自身が彼等の貧困の原因なることを十分に了解した後には、尙彼等が現在の如く行動すれば兎に角、然らざれば彼等の不用意と怠惰とを責めるのは責める者の不當である。又彼等を救ふべき手段は彼等の手中に在つて他の何人にも存せざること、社會も政府も之れに付いては何等直接の力を有せざること、社會と政府とは如何に熱心に力めて見ても、善意より企求し約束せることを眞實に實行し得ないこと、彼等の資金が家族を養ひ得ない時には、國王も國家も現在以上の臣民を欲しない、否少くとも現在以上を養ひ得ないと云ふこと。かゝる場合勞働者が結婚するのは社會に對する義務を果すどころか、却つて之れに重荷を負はせ、且つ自ら貧困の淵に投ずるに等しいこと、彼等は神の意志と正反對に行動して居るのであり、且つ自然法の各人に教ふる訓戒を守りさへすれば、其の凡て、或は大部分を避け得るところの、種々の疾病を彼等自身強いて自ら招くのだといふこと……等々十分に分り了解せる後に至る迄は、下層民の不用意と怠慢とを責めるのは不當である。

ペイリは其の倫理學中に論じて曰く(第二卷、第十一章)、食物の不足となれる國に於いては政府は殊に公共道徳の監視に注意するの必要がある。何故なら童貞の束縛下に在る本能以外、何物と雖、かゝる場合家族扶養上必要な労働を爲し、或は個人の自由と満足とを甘んじて犠牲にせしめるものはないからであると

惡を正して徳を進めるやうあらゆる努力を用ゆべきは政府の義務で、如何なる場合でも此の義務を弛めてはならぬ。だからペイリの勸説する手段、即ち性慾の束縛は常に結構であるが、併し此の手段に依つて達せんとする特殊目的、即ち人をして大に努力し、且つ自己満足を犠牲にして家族を持たしめんとする企は此の場合絶對的に罪惡であると思ふ。即ち生活資料が缺乏して小供を扶養するの望少き際、強ひて結婚せしむるは、恰も泳ぐことのできぬ者を強ひて水中に入れると等しく神を恐れぬ行爲である。かくて不幸と死とを免るゝは奇蹟にあらずんば不可能なること、上の何れの場合に於いても同様である。

眞に下層民の状態改善を念ふ人は賃金と食料價の相對比を釣り上げ、労働者をしてより多く氣樂な生活を送らしめることを目的としなくてはならぬ。從來吾々は貧民の結婚を奨励し、其の結果労働者數を増し、且つ口では物價の高いことを望みつゝ、事實としては一般貨物の供給過

多を惹起し、因りて以つて貧民の状態改善を企てるといふ矛盾に陥つて居たのである。かゝる計畫が失敗に歸すべは先見の明を待たなくても分る。世に經驗ほど尊いものはない。右の計畫は種々の國で何百年となく繰返され、常に失敗に歸した。吾々は何か他の方法を試みなければならぬ時機に迫られて居るのである。

酸素が豫想せられたやうな肺病患者を治癒せずして却て病狀を昂進させる事が分つた時に其の反對の空氣で療養が試みられた。救貧に於いても同じやうな哲學的精神を發揮すればよかつたらうと思ふ。即ち労働の供給を雨の如く多くするのが病狀を昂進せしむる所以だと分つたらば却つて之れを差控へたらばよかつたらうと思ふのである。

建國ふるく人口稠密な國家に於いて、労働階級の状態を實質的永久的に改善せんとすれば、此の方法に據る外途はない。

或國に於ける消費者の數に合せて食料の割合を昂めんとすれば、吾々の注意は自然、第一に食物の絶對量増加といふ事に向ふ。が極力之れをやつて見た所で、消費者數の増加が食物量の増加以上であると分れば、此方面に於ける吾々の努力は結局水泡に歸すべきこと亦明瞭だ。之れは恰も兎を捕えるのに龜を放つやうなものだ、かくて自然法の上から食物を人口に比例させることが出来ないと定まつたならば、吾々の次の手段は自然、人口をして食物に比例せしめる

といふことにならなくてはならぬ。若し吾々が兎を眠らせることが出来れば龜でも彼女に追いつく望が全くない譯ではない。

しかし吾々は食物量を増加せしむるための努力を弛めるべきではなく、之れとも一つの努力とを結合せしむべきである。即ち一たび人口と食物とが一致したならば、吾々の望む相對比が維持せられるやう人口を控制し、且つ之れに依つて二つの大なる要求、即ち實際の多數人口と極貧の比較的少ない社會状態——此の二つは決して矛盾するものではない——を一致せしむることに努力すべきである。

若し吾々が貧民状態を本質的永久的に改善すべき方法に付いて、眞に誠意を持つたならば、吾々は貧民に對して彼等の境遇の本質を説明し、勞働供給の削減が勞働價を釣り上げる唯一の可能的方法であること、竝に彼等は自ら此の貨物の所有者であるから、従つて右の方法は之れを行ふこと唯彼等の意のまゝであることを教へてやらなくてはならぬ。

此の救貧方法は理論に於いて頗る明白であり、又市場に在る如何なる他の商品との類推に依つても確證せられるのであるから、此の方法を用ふることに因り他に何等かより大なる弊害を生ずる事が明なれば兎に角、然らざる限り吾々は之れが實行を期さなくてはならぬと考へる。

## 第四章 道德的抑制に對する反對論

前章所論の目的に對して提示される反對論の一は市場に勞働不足を告げるだらうといふことで、反對論者の重要視する唯一の論點である。道德的抑制の實行はなるほど多少勞働供給を不足せしめるかも知れないが、併し國家の富と繁榮とが影響を蒙るほど勞働が不足すべしとは思はれない。假に之れから生ずる不利益を大きく見積るとしても、富者は平生貧民の状態改善を希望すと公言して居るのであり、之れに伴ふ多少の不利をだも尙之れを忍ばぬとすれば、彼等平生の言は眞實の聲でなかつたといふことに歸する。即ち彼等の慈悲は兒戲か或は偽善か何れかで、貧民の窮狀に對する同情を賣物として自ら樂むか或は單に氣休めを言つて居るのだと評されても仕方がない。一方貧民をしてより氣樂な生活を送らしめ、因りて以つて彼等の生活を改善せんと云ひつゝ、他方賃銀の高きをかこつのは、捨てた菓子を欲しがらだ、つ子の狂態だ。又勞働を供給過多にして置き而も各勞働者に十分の報酬を與へんとする如きは到底兩立し難きことであつて、有史以來未だ曾つて實際に行はれなかつたところだ。否空想の上に於いて兩者

を一致せしむることすら經濟學の最單純な理論に對して盲目であることを證するものである。

第二の反對論は道德的抑制の實行が人口を減少せしむるといふ非難だ。しかし此の人口減少は單に相對的のものである。人口を停止的ならしめることに依り一たび相對的減少が行はれ、他方食物が増加すれば、人口は再び新しき進行を始め、食物の増加に伴ひ、常に同一の對比を保ちつゝ、何世紀でも増加しつゞけるかも知れない。此の國に於いても若し國民の勤勉を適當に指導すれば、二三世紀の間に現在人口を二三倍とし、而も國民の誰れもが現在に比し一層よく衣食することが出来るかも知れない。勤勉の原動力が枯れず、其の努力の十分な部分が農業に向けられるならば、吾々は人口の減少不足を憂ふるの要はない。然らば貧民の間に勤儉努力の風を起さしむべきものは何か。貧民をして自己の幸福が主として自己に據ることを了解せしめることに如くはない。若し彼等が理性の命に反して情慾の命に聽き、或は獨身生活中、結婚後の萬一に備ふべき資金を蓄ふる爲め勤儉を行はなかつたならば、神が其の再三の訓戒に従はぬ者に對して與ふるところの、かの自然的弊害を受けるのだと了解せしめるより、もつと有效な手段はないのである。

第三の反對論であり、且つ私が多少の道理を含んで居ると思ふことは、貧民に道德的抑制を強ひることに依り、性的惡風を助長しはしないかといふこと之れである。

予は道德の淵源を破壊すと直接或は間接に解釋されるやうなことは、苟も言ひたくない。しかし性的不道德は必しも道德問題に付いて考慮さるべき唯一の惡事ではない。又其れが人間の品性を最多く墮落させるものだとも考へられぬ。なるほど性的不道德が行はれば何處かに不幸を醸さすには居られない。従つてひどく非難さるべきことではあるが、しかし世の中には一層邪惡な結果を生ずる不道德が行はれるし、結婚回避よりも更に甚しき不道德に吾々を導く事情が存するのである。童貞を破らしめる誘惑の力は大きいには相違ないが、不斷の貧苦から生ずる誘惑に比すればもの、數ではない。生涯の短からぬ部分を貞純に送り得た男女の數は少くないと信ずる。併し他方極貧の苦痛、否、長き貧困の境涯をば、大に品性を墮落せしめずして過し得た人が幾人あるであらうか。極貧は其れほど迄道德上有害なのである。

上中流に位する高尚淡泊な紳士で昔は名譽と德義とを重んじたるものが、貧の惱みにさいなまれ、初めは借金の申譯に友人の顔さへも敢へて直視得なかつたのが、卑怯極まる奸計や遁辭を用ひて返金を延ばし、終にはうそに慣れ世を恨み、人間としての態度と威嚴とを全然失ふが如き、實に悲痛な事實ではないか。

英國に於いて不斷に起る強竊盜罪其他多數の痛ましい死刑に價する大罪の大部分は、國民の一般的貧窮と、全く短見不用意な民衆に與へられる法外な補助金の結果である。コチュン氏に

Colquhoun

依れば、倫敦市にては毎朝二萬以上の各階級の貧民が一日中何に依つて衣食すべきやといふあてもなく目を醒ますのである。而して多くの犯罪は此の連中の所業であるが、彼等の中、既婚者であつて子供扶養の必要から犯罪を爲すものは少いと假定しても、而も最下層民があまりに多く結婚をするといふ事實が犯罪に對する主なる一誘因であることは恐らく疑のないところだ。是等犯罪者の大多數は恐らく無思慮な結婚に依りて生まれ、悪習の温室である救貧處で養育せられたか、或はあらゆる道德的義務といふものを全く關知せずして汚穢と襤褸の家庭に成長したものであらう。他方に於ては一時的失業の結果貧困に陥つて犯罪の已むなきに至り、かくてごろつきとなり下り、折角社會の好意(註1)で仕事が授けられることになつても、前科のため就業出来ない者は、前者に比して更に多數に上るのである。

凡そ赤貧は公然非行となつて表はれざる時は、あらゆる徳義心を麻痺せしめるものである。童貞は絶えず誘惑されれば時として守りをほせぬこともあらうが、之れがため他の點に於ける徳義心は其れ程害されないかも知れない。併し絶對的貧困に伴ふ不斷の誘惑と、其の原因を知らぬ爲、一般に貧困に伴ふ強い社會的不平の感とは氣質をこぢらせ、心情をかたくなにし、且つ道義心を渴らすもので、徳義はかゝる穢れた心を去つて二度と再び歸來せぬのが普通である。性的不道德は比較的軽いと云つたが、其れでも結婚は十分に之れを治癒するの力はない。

上流社會に於いてはドクターズ・コンモンズ(註2)や、並に多數妻帯者の送る周知の生活は之れを證して餘りあるものである。同種の悪行は下層民の間に其れほどひどいとは聞かないが、英國の大都市に於いては事實上恐らく之れに劣らぬものがあらう。

之れに加へて、赤貧が怠惰と結合する場合には、殊に童貞を守るに最不利な状態となる。貧困怠惰でも情慾は他の場合と殆んどかはらぬのに自尊心或は道義心といふものが一般になくなつて居るからだ。若し一人の少女が或程度の赤貧状態で育てられるとすれば、二十歳に達して而も眞に慎み心があるといふことは絶對的奇蹟である。他人が一人として自分を尊敬して呉れないのに尙自尊心を持つ人は必や眞に非凡人であり、同一境遇に置かれた人の通常達し得ぬところである。若しかゝる境遇に育てられた少年少女等が假りに二十歳で結婚すると假定するも、普通には恐らく既に過去數年間性的悪習に染潤しつゝ、あつたことと想定される。

いろく論じては見たが、結局若し此の議論が不十分であり、貧民間に道德的抑制を奨勵することも性的罪惡を生ぜしむるからだめだとし、却つてあらゆる方法で結婚を容易ならしめることが、民衆の道德と幸福上第一に重要な事柄であるとするならば、豫め吾々の目的を實現し得べき確實な方法を熟知し、前後矛盾せぬやうに行動したいものである。

(註1) 倫敦のやうな大都會では田舎から澤山の人々が流れ込むから失業者はいつも非常に多



い。だからコヒューン氏が其の著 *Police of Metropolis* 中で提議せると同一の國家的制度（同書第十三章）で一時的貧民を救ふことは、監理法さへよろしきを得れば結構なことかも知れない、併し此の制度によつて授けられる仕事の賃金は普通賃金よりも安くすることが絶対に必要だ。でなければ求職者が激増して資金は直き缺乏するからだ。…此の制度が始めに於いて大に貧困を救ふ力あることは疑を容れないが、次代になると益々多くの資金を必要とし、益々多くの貧民を維持しなければならぬから、利益よりも寧ろ害の方が多くはないかといふ疑問が起る。即ち結局乞食は従前と同數で、おまけに此の國家的制度の維持する貧乏人は救貧所に充滿するといふ状態に陥らないかといふ疑問である。今日英國の状態は略ぼ之れに近い。吾々は救貧法がなかつたとすれば果して之れだけの乞食があつたか何うかを疑ふものである。

（註2）ドクターズ・コンモンズとは、一五六八年聖デームズ寺院附近に建築された建物名稱であるが、宗教裁判所が置かれ、英國の主なる遺言狀記録處となつて居た。即ち離婚に關する裁判が行はれ、或は遺言狀の内容等が此處で明白となつた譯だ。此の建物はマルサス歿後、即ち一八六七年にとり壊はされ、遺言狀記録處は其の後一八七四年に到つてソマセツト館に移されたのである。（譯者）

## 第五章 反對方法を實施する結果如何

生活資料の増加率が如何に大きくとも人口の増加は之れに制限せられる。少くとも食物が生命を支持する最少限度の量に分たれ後に於いては人口が食物に制限せられることは明だ。此の食物量以上に生れた小兒は、大人の死亡に依つて餘地が出来ない限り、死亡しなくてはならぬ。本書從來の論述に依つて、舊國家に於ける結婚と出産は主として死亡數に關係すること、及び大なる死亡率ほど早婚に對して獎勵的結果を及ぼすものはないといふことが明瞭になつた。だから若し吾々が結婚と出産との大増加を念とするならば、死亡率を高めしむる自然の作用を徒らに阻止するよりも、むしろ之れを促進する方が合理的だといふことになる。而して若し吾々が饑饉の屢々襲來することを恐れるならば、吾々は須く自然の他の破壊作用を促して人類の死亡を高めしめるがよい。例へば貧民には清潔を勧めず、汚穢を獎勵するがよい。都市の町幅を狭くして多數人を狹隘な家屋に蝟集せしめ、黒死病の再來を祈るがよい。又田舎では腐水池を村の近傍に設け、殊に不健康な沼地の居住を獎勵するがよい。就中吾々は激烈な傳染病に對

する特殊療法を禁すべく、或病氣の根絶療法を企てるが如きは人類に對する奉仕どころか却つて迷惑であるとして排斥しなくてはならぬ。かくの如き方法に依り、年死亡率が三六若くは四〇對一から一八乃至二〇對一とならば、吾々は誰れしも青春期には結婚が出来、而も絶對に餓死する人はなくなるであらう。

反對に吾々が皆春情期に結婚しながら、他方自然の作用を阻害せんとするも其の努力は結局効がない。自然は必や其の目的を遂げずには置かないからである。即ち死亡率は何等かの形で必然的に高まり、一種の病氣を根絶すれば一層ひどい他の病氣が発生するにきまつて居る。貧困の海は一方を堰けば他方に漲る。吾々が之れを免れる途は唯此の水をどこかへ轉流せしむる一事あるのみだ。而して其の途が何れの方向に在るかに就いては、自然は常に吾々が反對方向に行動する時に與ふる懲罰に依つて之れを教へんとしつゝ、あり、且つ此の懲罰は人間の訓戒を守れる程度如何に従つて随分苛烈にもなるのである。例へば英國に於いては自然の訓戒は決して全く忽諸に附せられては居らず、人口に對する豫防的制限が大に行はれて居るから、従つて自然の懲罰も輕いのである。然るに上述の如く若し吾々が春情期に結婚し、自然の訓へを無視するとすれば其の懲罰も亦従つて苛烈であるに相違なく、物質的弊害に加へて恐らく政治的弊害をも伴ふことであらう。即ち不斷の貧困と屢發の食物不足とに悩む——之れ即ち自然の

懲罰——人民は殘忍な専制主義に依るにあらざれば到底制御し能はぬやうになるであらう。かくて吾々の状態は埃及アビシニアの人民に近逼すべく、其の場合果して吾々が今よりも一層道徳的となり得るか何うか、大なる疑問と云はざるを得ぬ。

醫家は夙く既に疾病の上起る大變化に注意し、或疾患が人間の注意を熟練とに屈服したことを見る間に他の疾患が激烈致命的となることを説いた。ドクトル、ウィリアム・ヘバデンは近頃倫敦死亡率統計の状態から歸納して價值ある觀察を發表した(註1)。其の序文に曰く、死亡統計中、或疾病の上に表はれた漸次的變化は、やがて死亡の潮流が不斷に流れる水道の變化に相應するものである……

人口が一定水準に止まる國に於いては、平均結婚數と出産數とが分れば死亡平均數も亦従つて明白である。ヘバデン氏の比論を用ゆれば死亡の潮流が不斷に流れる水道は常に一定水量だけを運び去るのである。今吾々が此の水道の一をふさげば死亡の流は他の水道からより大なる力で奔流するに相違ない。換言すれば或病氣を根絶すれば他の病氣の死亡者が其れだけ多くなるのである。此の場合表面に顯はれた唯一の原因は一水道、即ち必要な死亡の一流出口を堰き止めたといふ事だけだ。自然は其の大目的を達する際常に最弱點を攻撃するやうに思はれる。若し此の部分が人間の熟練で強くなれば、其の次の弱點を選ぶ。譬へば惡戯好きの神が吾々の

苦痛を弄び、常に吾々の勞力を徒費せしめんと欲するのとは違つて、曰はゞ親切な併し時としては苛烈な教師が吾々のあらゆる弱點を矯正し惡風と貧困とを地上から一掃せんと欲する如くである。元來吾々人間は一つの過を避けんとして他の過に陥りやすいものであるが、常に其の目的に忠實な自然は、吾々が一步を誤る毎に或は肉體的或は精神的弊害を課して吾々を矯正せんとするのである。例へば若し人口の豫防的制限が大に流行して疾病の多くが地を拂つたこと、他方に大に亂婚を伴ふとすれば、此の惡風から起る肉體的精神的弊害が擡頭して大に勢を増すに相違なく、かくて自然は吾々の過失を訓へ、自然と理性と宗教との是認する唯一の行狀、即ち吾々が子供養育の可能性を得るまで結婚を延期し、而も其期間貞純な生活を送るべきことを指示するのである。

上に假定した如く人口と結婚數とが一定せる場合、或疾病が減退し或は根絶せる爲、他の疾病が死亡率上必然的に受ける變化は數學的證明をもち得る位明瞭だ。此の問題に關係ある唯一の不明瞭な點は、死亡率の減少が人口増加上或は結婚數減少上に及ぼし得る結果を考慮の中に入れることより生ずるのである。死亡率の特殊原因即ち或疾病の一掃が人口に及ぼす影響は、生活資料の許す範圍外に出でないこと、又其の一掃が生活資料の上に確定必然の影響を及ぼさないことは讀者の既に十分承知せらるる事實である。唯其れが子供に對する需要を減少せし

むる爲、結婚を阻止するの傾向あることに付いては予は疑を挿まない。而して英國を震駭させたかの黒死病の消滅が此の結果を表はし、大に其の後の結婚を阻害したと考ふべき理由がある。ヘバデンは此の時期後英國國民の健康上に起つた善良な結果に付き明瞭な解説を爲し、此の事實を倫敦其の他都市に於いて漸次行はれた施設改善と、英全國に互る生活改善、殊に清潔と通風の改善に歸したが、之れは然るべき見解である。しかし是等原因でも若し他方に豫防的制限の流行を伴はず、又清潔を尙ぶ精神と生活改善とが共に流行して有益な自負心を助長し、此の制限の流行を資けることがなかつたならば、上述のやうな結果を生まなかつたかも知れない。併し此の結婚數減少も黒死病根絶による死亡率の大減少、及び赤痢病死亡者數の著しい減少を償ふに足らなかつた。そこで是等の疾患が殆ど一掃せられると、同時に他方に於いては肺病、中風、腦卒中、痛風、狂癲、痘瘡等の諸症が益猖獗となつた譯で、此の死亡原因の擴張は、豫防的制限の流行にかゝらず、又増加人口の一部が農業の擴張に因つて生活し得るやうになつたにかかわらず、尙過剩であつた人口を除去するに是非共必要であつたのだ。

ドクトル・ヘイガルトは偶發性痘瘡根絶法概説中にて、此の疾患が與へた死亡率に付き恐ろしい記述を爲し、人口増加の緩慢なるは之れが爲であると云ひ、其の根絶が人口上に及ぼすべき好影響に付き或る不可思議な算定をなした。予の考ふるところでは氏的前提からはかの結論

は出て來ないやうだ。なるほど古來痘瘡の爲に死した人は何百萬人か分らない。氏の云ふ通り其の猛威は黒死病に比して何千倍の激しさであつたとしても、而も尙予は地上平均人口が之れがため果して減少したか否かを疑問とするものである。痘瘡は自然が人口を生活資料の水準に維持するため、數千年來開き來つた死の水道であるに相違なく、而も其れは頗る大なる水道であつたに相違ない。しかし若し之れが閉鎖せられたらすれば他の水道が擴張せられ或は新しい死の水門が開かれたに相違ないのである。太古に於いては戦争と黒死病とに因る死亡率は近世とは比較にならぬ位に大きかつた。此の死水道が漸次縮少されるに従つて痘瘡が大に流行を極め、茲に吾々の注意と調査を要する死水道上の一大變化を見た譯である。しかし予の確信するところに依れば、痘瘡が若し種痘に依て絶滅せられるとして尙結婚數が舊の如く大きいとすれば、或他の疾病の死亡率が必然的に昂まるであらう。之れを阻止するの途は單に英國の農業をして一大進展を爲さしむるにあるが、若し將來之れが實行せられたら假定しても、其れは種痘に依つて多數小兒が救はれるためではなくして、むしろ最近の饑饉に依つて地主連が覺醒されたことと、最近不合理な非難的となつた農家収入の増加といふ事に歸すべきであらう。又予は上述の場合に於ける結婚數も從來と同一率を持続せずして減少し、折角痘瘡の絶滅に依る死亡率上の變化を有意義のものたらしめることを希望する。即ち此の興味ある研究問題に對

する理解が漸次普及せられ、一大流行病の根絶が一般社會の健康と幸福の上に眞の進歩を齎らすに至らんことを望むのである。

さて上述來、道德的抑制の義務に偶然附隨すべき惡風と、結婚と人口獎勵に必然附隨すべき貧困の増加を考察して、其の結果、吾々は如何なる點に於いても個人に干涉すべきものではなく、個人が何れの行動をとるも其れは彼自身の自由意志に屬することであり、之れより來る弊害に對しても、彼は單に神に對してのみ責を負ふべきものであるとの結論に達すると假定すれば、私は單にこれだけの事を主張するに留めて置いて其れ以上の事を主張する意志は毛頭ない。が目下の英國民は私の主張するところだけですら行ふどころではないことを私は斷言する。

予の所論と最大の關係ある下層社會に於いては、救貧法は、自ら養育出來ぬ小兒を生める貧民から、自然法の負はせる重大責任を解除してやり、因りて以て結婚に對する直接不斷の系統的獎勵を與へて居る。吾々の個人的慈善も救貧法と同一に作用し、殆ど常に結婚を獎勵し、結婚者、獨身者との境遇を出來得る限り平等ならしめんとして居る。

上流社會の中に在つては既婚婦人が著しき尊敬を受け、未婚老嬢が著しく輕視されるため、人柄も精神もよろしくなく、おまけに老境に在る男でも、自然の教示する通りに年頃教養の同

じ位の女を選ばずとも、若く美しき配偶を選ぶことが出来る、老嬢オールドミスといふ愚劣不公平な嘲笑的形容詞を嫌惡するの情が、多くの婦人を驅りて好まざる結婚或はさなくも全く無關心な結婚を急がしめることは疑ふの餘地なき事實である。かゝる結婚は苟も鋭敏な良心を持てる人に取つては合法的賣春行爲と違はず、他方かゝる結婚は又夫婦自身の幸福と道徳とを増進せしめないのに、不必要な小兒を生んで屢々世の負擔を重からしめるのである。

社會の各階級を通じ、結婚の義務に關する俗説は非常に大なる影響を與へて居るに相違ない。例へば自分の後繼者を残さずして死に行くのは重大な社會的義務を果さないのだと感ずる人は、結婚の慾望を抑壓せずしてむしろ強行せんとする。而して理性が彼に家族扶養の困難を暗示するも彼は之に聽從せず、飽くまで冒險せんとし、自ら義務と信ずることを果すのだからまさかまさかに神から見捨てられることはなからうと望むのである。

英國の如く開化し、上品氣樂な生活に對する趣味がかなり廣く行き渡つて居る國に於いては、積極的施設と通俗の意見が如何に結婚を獎勵したところが、該問題に對し理性と自然法の投ずる光を全然暗黒ならしむることはあり得ない。が其れにしても此の光を比較的比較的に薄弱模糊ならしめて居ることは争はれない。此の光が明くなり、貧民が貧乏の主因に對して誤解を去り、其の幸不幸を決する鍵が主として自己の手中に在るのだと理解するに至るまでは、吾々は結婚

問題に關し各人をして全く自由意志によつて行動せしめてよいとは言ひ得ないのである。

(註1)「各種疾病の増減に關する觀察」序文、

(註2)一七九九竝一八〇〇年の收穫不足を指す。又此こに云ふ農業の進歩は一八〇一年より

一八一四年に互りて確に行はれたるものにて、死亡率減少は農業増收に依りて十分償はれたり。

## 第六章 貧の眞原因に關する智識の普及が

### 人民の自由に及ぼす影響

下層社會の貧苦の大部分を専ら彼等自身に歸する學説は、政府に對して勝手に人民を壓迫し、且つ全責任を自然法と貧民の不用意とに歸せしむる機會を與へるものとして、人民の自由の爲によりしくないと思はれるかも知れない。しかし吾々は外見に欺かれてはならぬ。此の問題を深く考察する人々は、貧困の主因に關する十分な智識が普及することほど合理的自由の進歩に資するものはなく、現在此の問題に關する無理解と、此の無理解の結果とが、合理的自由の進歩を阻害して居ることを確認せざるを得ないであらう。

予の考ふるところに依れば、下層民に對する貧苦の壓迫と、此の貧苦を爲政者に歸する習慣の結合は却つて専制政治に對して磐石の防禦を與へ、城砦を與へ、守護神を與へるやうなものだ。其れは暴君に對して不幸無責任なる必要といふ口實を供するものだ。一切の自由政治が滅び行かんとするものれが爲であり、其の守護者を以つて任ずる人々が其の自由權の剥落を惜

むの念、日々薄らぎ行くも之れが爲である。自由の爲の尙き努力が多くは惨敗し、長く痛ましい犠牲を拂へる後に於いて、革命が多く軍事的専制に終るのも亦之れがためである。才幹ありて處を得ない不平等が民衆を欺き、彼等の不幸と貧困とが、事實あまり之れと關係のない稅政の結果であると説いて、彼等を服せしめ得る間は、新しい不平と新しい革命の種は常に蒔かれつ、あるのである。今或政府が倒壊して、而も貧民の困苦が依然として改められなかつたと假定すれば、彼等の憤懣は自然新政府に向ふであらう。而して此の政府が倒れて尙民衆の目的が達せられなかつたとすれば更に新しき犠牲が要求され、かくて限りなき革命が續くであらう。かゝる場合大多數の良民が立憲政治の遂に革命的精神に抗する力なきを知り、且つは永久的の動亂に勞れ果て、自ら争ふの力もなく、無政府状態の出現を恐るゝの餘り、彼等を保護してくれる眼前第一の實力に頼らんとするは寧ろ當然のことではなからうか。

凡そ暴動は過多の人口が眞の貧苦に激發されて起るものではあるが、暴徒自身は其の貧苦の因つて來る眞原因を知らぬ。あらゆる怪物の中で之れほど人民の自由を害するものはない。暴動は壓制を培ひ生むものである。暴動は其の恐ろしき發作の瞬間に於いて目に見えぬ其の子（即ち壓制）を食ひ盡すとも思はれるが、慘禍一過の後に於いては、如何に之れを避けんと努め

て見たところで、矢張り新しい壓制政治の胎生を如何ともし難いのである。

暴動が壓制政治を生むことに付いては英國に於いても昔に溯つて其の實例を求めるに及ばない。予は自ら自由政治の支持者として、又大常備軍の反對者として、次の事實を認めざるを得ぬことを遺憾千萬とする。即ち若し英國に此の大常備軍がなかつたと假定すれば、最近饑饉（一八〇〇年と一八〇一年）中に於ける人民の困窮は、無智愚劣な多數上流人士に煽激され、彼等をして恐駭すべき動亂を起さしめ、終に國家を舉げて恐ろしい饑饉に陥れたかも知れないといふこと之れである。かゝる時期が再來すと假定すれば——國家の現状から判斷すると其の虞れは十分にあるのだが——吾々の前途は極めて陰慘である。若し政治的不滿が胃の腑の要求と混じ合ひ、革命が食物缺乏に對する暴民の喧騒を機として勃發すると假定すれば、其の結果は永久の改變殺戮であつて、完全な專制政治が樹立せられる迄は決して已む時がないであらう。

英國自由の守護者たることを天職と心得る人たちが、近年自由に對する其の特權の漸次的侵害に忍從したのは、其れよりも一層恐ろしい弊害を他方に憂へたが爲であるより外信するところが出来ない。當時英國の地方紳士達は自由に對する危害は皇帝の側より來るよりも、むしろ人民の側から來る方が大きいと眞實に憂へたのである。若し左様でなかつたならば、如何に當

時墮落の勢が盛であつても、彼等が生得の自由權を一部なりとも放擲するほど卑怯であつたとは信することが出来ぬ。彼等は暴徒の脅威から保護して貰ふといふ條件付で政府に降服したやうに見える。若しかゝる暴徒が事實上にか若くは想像上にか存在しなかつたとすれば、彼等は決してかくほど迄陰慘無氣力な降服は敢てしなかつたであらう。此の問題に關する恐怖が人爲的に誇張せられ正常な判斷力の範圍外に出て居たことは疑を容れない。然し社會制度の不正を鳴らす放論と、下層民間に瀰蔓せる誤れる自由平等説とに鑑みる時は、「民の聲」は其れが發せられたならば、「神の聲」を代辯せずして、却つて謬論愚説となつたであらうと想像すべき理由があるといふことも亦疑ふの餘地がない。……

地方紳士に對して公平に云へば、英國自由の守護者たる彼等の位置を一部分讓歩したのは彼等が墮落せるためではなくて、むしろ恐怖の念に驅られた結果であつたと認めなくてはならぬ。而して予の考へるところでは、此の恐怖の主因は民衆の迷妄と無智に在り、且つかゝる心的状態に在る貧民が革命に依つて支配權を得た曉、果して如何なる結果になるかといふ疑懼の念に在つたのだ。

ペインの人權 (Rights of Man) といふ書物が刊行せられ、英國中下流に大なる害毒を流したと想像されて居るが、之れ恐らくは眞實であらう。が其れは人間に權利が與へられて居ない

ためではなく、又是等の權利を知らして惡いためでもなく、ペインが政治の原則に付いて根本的の誤謬に陥つて居るが爲であり、且多くの重要な點で彼が全然社會の構成を知らず、又英米兩國の國情の相違から豫期せらるべき、相違せる道德的結果をも全然知らないが爲めである。歐洲にて暴徒と稱せられるのと同じ性質のものは米國には在り得ない。米國は自然の國情からして財産なき人は比較的稀である。だから此の財産を守るために必要な政府の權力も他國に於けると同一でなくともよいのである。ペインが或叛亂の表面の理由は何にしても其の底には幸福の缺乏が常に存在するといつたのは至言である。併し一步を進め、此の事は政治の組織に缺陷があり、其れが社會を保存すべき幸福を蠶毒して居ることを示すと論ずるに至つては氏も亦一切の幸福の缺乏を政府に歸する俗説の誤謬に陥つて居る。なるほど幸福が缺乏し、人民の無智のため、其れが暴動蜂起の原因となつたとはあるかも知れぬ。而も之れは事實殆んど全然政治と無關係の場合もあり得るのだ。舊國家に於ける人口過多は、米國の如き國家では決して經驗されないやうな不幸の原因となることもある。しかし租稅收入をペインの説く如く貧民に分與することに依り、此の不幸を救濟せんとすれば、これより來る實弊は右の不幸を百倍にし、やがて如何に租稅を増加しても到底所期の目的を達し得ないこと、ならう。

ペインの人權説に依つて蒔かれた害毒を中和すべき最有效な方法は、人間の眞權利に關する

智識を普及せしむることである。然らば此の眞權利とは何か。今之れを説明するのは予の任務ではない、が茲に一つ人間が一般に持つと信ぜられて而も事實決して持たず、又持ち得ざる權利がある。即ち自己の努力にて正當に之れを購はざる生活權之れである。なるほど英國法律は此の權利の存在を認め、人間が正規の市場にて食物と仕事をを得る能はざる時は社會は之れを與へる義務があると規定する。しかし英國法の此の規定は自然法に反するものだ。だから當然其の目的を達し得ざるのみならず、法律が救はんとする貧民は彼等の上に行はれる此の非道なごまかしのため、却つて最も手ひどい苦痛を受けるのである。

レーナール僧正は曾つて曰く、社會的法律の存在以前には人間は生存の權利を持つて居たと。氏の説は社會的法律の成立前には人は百歳も生きる權利があつたと云ふに異ならぬ。なるほど當時人間は他の生存權を犯さずに百歳迄生きる權利があつた、又今でもある。否出來さへすれば千歳迄でも生きてよいのだ。しかし何れの場合にも其れは權利の問題ではなくして生きられるか何うかといふ體力の問題だ。社會的法律は其れが存在しなかつた場合に生活し得たよりも、より多數の人々を生活せしむるやうにしたといふ點に於いて、大に生命の力を増進し、又其れだけ大に人間の生存權を擴張したに相違ないが、此社會法成立の前に於いても將た又後に於いても無限數が生活し得たことはなかつたのである。即ち其の前に於いても後に於けると同じ



く、生活力を失へるものは同時に又生活權を失へるものであつたのである。是等問題に對する偉大な眞理が一般に普及せられ、且つ大生産上絶対に必要な財産制度以外、如何なる特殊の制度にも據らざる人間は、自然法に因り、働いて自ら之れを獲得せざる限りは生活權を社會に對して要求することが出来ないことと云ふことを下層民に承服せしむることが出来れば、徒らに社會制度の不公平を鳴らす如き有害な議論の大部分は其の力を失ふであらう。貧民は決して空想的ではない。彼等は其の貧苦の因つて來る眞相を知らないけれども、而も貧苦其のものは現實である。若し是等原因が適當に説明せられ、彼等現在の貧苦の幾何が政治の責任であり、幾何が其れに全然無關係であるかを知らしめれば、下層民間の不平と憤懣は現在のやうに屢發しなくなるだらうし、又發しても現在のやうに勢を得ることはないだらう。だから貧民が自分の境遇の眞相を自覺し、中流階級に於ける人騒がせの不平黨に依つて企てられる社會改善計畫に参加して、之れを助けるのは、決して自分達を利せず、却つて他人の野心を遂げしむる所以であると知るに至れば、是等不平黨の努力も何等恐るゝに足らなくなる。かくて英國の地方紳士と資産家は安んじて自由權の主張に立返ることが出来る。即ち公安のために臣民の自由を犠牲にすることなく、又他方民衆の暴動に原因する危険を招かずして、自己の失へる立脚地を回復し、斷々乎として時勢に應ずる漸次的改革、英國憲法の漸減を豫防するために必要な改革を主張することが出来るのである。

政治上の改良進歩は皆必や多少教育ある人々に發するものであり、是等の人々が有産階級に屬するのは勿論の事だ。彼等の中少數の者は兎に角、多數有産階級が皆實際に惡政稅政に關係せりとは信じられぬ。彼等が之れに默從するのは之れを除去せんとすれば却つてより大なる弊害を他方に生ずるだらうと憂ふるからだ。だから若し一たび此の憂を除けば政治の改良と進歩とは期して待つべき容易の事となるのだ。人生に於いては吾々は大きな弊害を避ける爲、常に小なる弊害に忍従すべく要求されるのであり、甘んじて之れをなすが賢人の事だ。しかし賢人とても若し何等危険を伴はずして弊害を逃れることが出来さへすれば決して之れに忍従することは無いであらう。だから民衆の暴虐愚行から一切の之れに伴ふ憂懼を芟除するといふことは直ちに虐政を芟除する所以である。即ち虐政は茲に辯解、口實、防禦を失つて無力となるからだ。原來脆弱な其の組織が一たび輿論の支持を剝奪され、又必要といふ口實を喪失すれば壓制政治は忽ち倒壊すべき道理であり、利己的動機から之れを辯護する者は赧然として隠れ、人間の恵智では辯護の餘地なき事柄を再び支持するの勇氣を失ふであらう。

虐政の支持者中最大の成功を収める者は、貧民の貧苦と凡ての社會的弊害を人間制度と政治

の不公平とに歸する一般的論者である。かゝる見解の誤謬と、其れが一般に認容せられ實行せられる場合に生ずる恐るべき結果とは、之れに對して極力抗辯することを絶對的に必要とする。蓋しかゝる印象の下に行動する民衆の運動は直接革命の慘禍を招徠すべく豫期せられるのみならず、かゝる革命は其れが打破したよりも更に甚しき虐政を生ぜしむるの虞れ極めて多いからである。是等の理由から壓制を辯護する人々の中に却つて眞に自由を愛するもの、眞の人權の熱心な辯護者が發見せられるかも知れない。即ち其れ自らに於いて悪い事柄でも、其の反對が更に一層悪きがため、而して現在に於いては右の兩者間の一を撰擇することが絶對に必要であるため、善人も已むなく或程度の壓制を支持しないと限らないのである。従つて政府に對して無茶苦茶な非難をなす人々の眞意は何所にあるとしても、其の實際の結果から見ると結局手腕あり主義ある人々をして、豫じめ豫想しなかつたところの援助を現在政府に與へしむることになるのである。

本書の讀者は、最上純眞の主義に基き、最高の誠意と手腕とに依つて運用される政治の下に於いても、人口の豫防的制限が行はれないため赤貧と不幸とが普く存在し得るといふことを眞理と認めるであらう。而も此の不幸の眞原因は從來世間から全然理解されず、社會は常に之れ

を減退せしめんとせずして、寧ろ助長させたほどであるから、吾々の知れる凡ての政府の下に於いては下層民貧困の大部分は此の原因から發生したと信すべき十分の理由があるのである。

だからベイン等が人民の不幸から演繹した政府攻撃の議論は明瞭な誤謬であり、吾々は眞理と公平との觀念から、かゝる非難を是認するに先つて、此の不幸の幾何が人口理論より發し、幾何が明に政府の責任であるかを確證すべき義務がある。此の區別が適當に明白となり、誤解に基く非難が芟除された後、始めてどれだけが政府の責任であるか明になるわけで、此の明白にされた部分に對しては政府は勿論責任を負はなければならず。其の頭上に負はされる分前は假令小さくとも其責任は決して小さくはないのである。政府は貧困の直接即刻の救援に付いては大した力はないが人民の繁榮に關する間接の感化力は著大である。其の理由は他なし、國家の食物を無制限な人口増加と調和せしむることに於いては比較的無力ではあつても、人口制限上必行はれるに相違ないところの妨害的手段に對して最良の指導を與へ得るといふ點に於いて政府は偉大な力を持つからである。本書前編に於いて予は專制暴虐最甚しき國は其の實人口は少くとも生活資料との相對比に於いて最稠密であることを明瞭にして於いたが、其の必然の結果は勿論非常な低廉な賃金となつて表はれる。かゝる國に於ける人口制限は早婚の普遍的流行を抑制する用心先見から發せずして、貧民の上に表はれる必然的疾疢と死亡率といふ形をと

るのである。即ち其の妨害はより多く積極的であつて豫防的ではないのである。

此の戒慎的習慣の發達に對して第一に必要な條件は財産の完全な安固といふことであり、第二の條件は恐らく、平等的法律に依つて下層民に與へられる尊敬と價値であり、又下層民が此の法律の形成に多少の勢力を持ち得ることである。故に政治がよければよいほど、かの戒慎的習性と高尚な情操——之れに依つてのみ吾々現在の貧困を避け得べき——を發生せしむるの傾向が益々大きいのである。

代議政治は何故よいか。其れは平等善良な法律を制定するに最好都合であるからだといふのが唯一の理由である。併し若し專制政治下に於いても同一の法律が作られるとすれば、社會の受ける利益は代議政體の下に於けると同じではないかといふ論法はよく耳にするところである。しかし代議政治の下に於ける下層民は上中流から一層自由公正な待遇を受けるから、個人の自尊心を増し、墮落に對する恐怖を高めしめる。果して然らば代議政治は、他方財産の安定と相待つて勤勉心を刺戟し、戒慎的習慣の發達を促進し、かくて同一法律が專制治下に存在する場合に於けるよりも、一層下層民の繁榮と富裕とを増進せしむるものなること明白だ。

自由政治と善政とが貧困を減退せしむるの傾あるは争ふの餘地なきことであるが、しかし此の方法に依る効果は間接緩慢であつて、下層民が習慣的に屢々革命の結果に期待する直接即刻

の救助に比すべくもない。右の如き過激急進を望む習慣と、其れの失望に基く激憤とは、常に自由に對する彼等の努力を誤らせて意外の方向に向はしめ、却つて實際實現の望ある政治の漸次的改善と、下層階級の徐々の改良とを挫折せしめるのである。だから吾々は政府のなし得る所と爲し得ざるところを明瞭に知ることが第一に必要なのである。今日自由の進歩の遅々として、あらゆる自由主義者を失望せしめつ、ある所以のものは、予の考ふる所に依れば社會に瀰蔓する不幸と不平の原因に付き、思想上の混亂が存在すること、及び政府が自分の權力を確保し、堅固にするため此の混亂を利用し得たこと、否實は利用せざるを得なかつたことに基因すると思ふ。故に貧乏と不幸の主因は單に間接に政府と關係するのみであつて、政府の力で直接に之れを除去することは到底能はぬこと、及び其の除去は全然貧民自身の行狀に依らなくてはならぬことを一般に周知させることは、政府に何等の利益を與へることなく、而も無智のため現在危険性を帯ぶる民論を正道に還へし、因りて以つて民論に重きを添へ、かくて大に合理的自由を促進すること、なるであらう。

## 第七章 貧困原因の無理解が人民の自由に

### 及ばず悪影響 (註1) (前章の續き)

前章所論は最近二三年の出來事に依つて著しき確證を與へられた。政治の改良から生ずべき結果に付、下層民が今日のやうに誤れる意見を抱けることはないであらう。又是等謬見が之れほど直接に貧困主因に付いての絶對的誤解に基いたこともなく、自由の上に之れほど直接の悪影響を與へたこともなかつたのである。

政府に對する不平の最大原因の一は、働らく能力と意志のある労働者の多數が全然就業することが出來ず、従つて必需品を使用し能はぬといふことであつた。之れが文明社會に見る最大の一苦痛であること、下層民間に於ける不平も一應は尤もなること、上流社會はかゝる不景氣の永久的にならないやう注意すると同時に之れを緩和するため、あらゆる努力を惜まざるべきこと等に付いては、苟も同情心に富む人ならば疑ふの餘地がない、併しかゝる情態が最上の指導と尤經濟的な政治の下に於いても起り得るものであることは、一國資源が自然に停滯し或は衰退する場合、政府が之れを指導して進歩的ならしめることが出來ないと同様に確實なことである。

政治のよろしきを得た國に繁榮の時期が廻り來り、富と人口とに異常な刺戟を與へる事はあるが、此の刺戟は性質上永久的ではあり得ない。例へば新しい商路が開かれ、新しい植民地が見付けられ、機械の新發明があり、農業上大進歩が行はれると假定すれば、増加生産物は有利な價額で内外市場に賣られ、かくて資本の急激な増加が起り、人口に對して非常な刺戟が加へられるに相違ない。然るに今若し右の商路が偶然に閉鎖され、或は外國との競争に依つて縮約されるとし、植民地を失ふか或は同一生産物が他方面から供給されるとする。又市場は生産過剩若くは外部の競争から、新機械が一般に普及せられると共に其の擴張が杜絶すると假定し、最後に如何なる原因から來る農業の改良も最早進歩の餘地なきとになれば、人口増加に對する刺戟が最大の効果を表はした丁度其時に、此の人口を雇傭し支持するの資力が自然に又全く政治上の何等の缺點を伴はずして不足して來るのである。此の不足は勿論労働階級に大なる貧困を生ぜしめる。けれども之れから政治上の根本的變革を行ふべしとの推論は生れて來ず、之れを遂行せんとすれば單に貧民間の不幸を助長し激甚ならしめるに止るのである。

右の假定に於いては政府は決して其の行動に依つて件の貧困を助長させた譯ではないが、實

際の場合には恐らく左様は云へないであらう。何故なら政府は戦争や課税に依つて大いに貧困を生ぜしむることが出来るのだし、他方國民の不幸が前の例に於ける如く全く自然に生じたものか何うかを判定するには多少の熟練を要するからである。英國の場合に於いては右の兩原因が混合して居るに相違ないが人爲的原因は自然的原因に比すれば遙に大きいのである。戦役と課税は其れが直接單獨に作用する限り、資本生産及び人口の進歩を破壊し、或は抑止する傾向がある。但最近戦役に際しては、是等は生産に異常な刺戟を與へる如き他の諸種の事情との結合に依り、差引却つて國家の利益となつたのである。然らば國民は其れだけ政府に負ふところがあかと云ふにさうは考へられない。政府は最近二十五年間、平和に對しても自由に對しても大した愛惜の念を示さず、又國家資源の利用に付いても格段の節約を示さなかつた。政府は端的に大費を戦争に投じ、重税に依つて之れを得んと欲した。要するに政府の執れる手段は國家資源の衰退を招くべきものであつた。而も明白な事實は公平な觀察者に對して之れと反對の結果を示して居る。即ち一八一四年、戦役の終に於いて國家資源は枯渴せず、國富と人口とは開戦當時に比して著しく進歩せるのみならず、其の進歩の率は未曾有の速度であつたのである。之れは恐らく史上最大の一異例に屬するかも知れない。此の場合に付いて論ずると、平和克復後に於ける國家の貧窮は戦役と重税から普通に又自然に生じた結果ではなくして、寧ろ生産

に對する異常な刺戟の急止に在るといふ結論になる。而して此の刺戟の中絶に因る貧苦は重税に依つて助長されたに相違ないが、實質上其れから基因したのではないから、今俄に諸税を撤廢したところで直接即刻に芟除されるものではない。

貧困の主因は或る程度迄、而して又或時期の間、何としても救済の途がない。唯勞働階級が之れを十分察知し得ないのは尤もの事である。又彼等が彼等にとつて不快な眞理をのみ説く人に聽從せず、直ぐにも彼等を救済してやると安うけあい約束する人々に聽從するといふことも決して驚くに足らぬ。平和後の危機は煽動的辯説若くは論文に十分利用された。勞働者に自己の實情を知らしめ、不可抗的の貧苦に忍從せしむる方面の事は一は無智から、一は計略のため、努めて隠蔽され或はやかましく非難された。他方彼等を瞞着して其の不平を助長し、且つ政治的改革から期待される社會救済に關して無法誇大な豫想を抱かしめるやうな事柄は努めて誇示された。若しか、る事情の下に件の改革が行はれると假定すれば、國民は必や甚しい失望に陥つたに相違なく、若し普通選挙が行はれ、議會が毎年開議されるのであつたならば、一般國民の失望は彼等を驅り政治上のあらゆる實驗を次ぎから次ぎへと行はしめることになり、此の不斷の變革は軍事的専制の樹立に依つて停止される迄繼續するに相違ない。だから苟も眞の自由を愛するの士がかゝる前途に對して疑懼の念を抱くのは當然で、かゝる主義に據り、恐らく

かゝる結果を見るであらうやうな政治改革に援助を惜むのは此の際むしろ彼等の義務であつたのである。而も今彼等が大なる困難を犯し、多數改革請願人の意志を無視し、一層穩和にして而して眞に有益な政治改革を行ふに假定して見ると、必然的に表はれる民衆の失望は、中途半端な改革の故であるとせられ、彼等をして終に已むなく一層過激な改革を行はしめるか、然らずんば人民の貧苦は改められず、其の不平も緩和されず、そうかといつて又貧民が多大の望を懸けて居る政治的萬能膏の效顯も未だ試されないのに、改革を中止するの已むなきに至り、かくて一切の勢力と人氣とを失ふことになるに相違ない。之れ實に自由主義者の私に恐るゝところなのである。

かゝる考慮は自然眞に自由を愛する人々の努力をにぶらせ、時代の經過に依つて生じた政治上の缺陷を補綴し、英國憲法の改正上必要と認められる有益な改革を一層困難にし、従つて容易に行ひ難からしめるのである。

民衆指導者の暗示する詐瞞的希望と妄想的要求とは、政府をして緩急何れを問はず改革の提議を却けしむる結果となつたのみならず、却つて憲法に對する攻撃の具を供することとなつた。民衆側の希望と要求とは自然多少の恐慌を惹起し、穩和な改革をも阻止することとなるが、一たび起つた恐慌は停止する所を知らず、殊に其の原因は誇張され易いものである。近年さしたる必要もないに人民の自由を害する如き法令の制定を見たが、其れは誇大な言論の結果であり、また誇張された恐怖心に依つて是等言論から抽出された推論の結果であると信すべき理由がある。而して是等誇張的恐怖を生み、是等法令を通過させた力は何れから來るか云へば其れは人民の無法な希望に起因するものなること議論の餘地がない。要するに今日の時勢は貧困の眞主因に關する無理解が人民の自由にまつて殊に不利益であり、其の理解が殊に有利であることを示す著明な一實例を與へるものと認めなくてはならないのである。

(註1) 此の論文は一八一七年の記述にかゝるものである。

## 第八章 救貧法を漸次廢止するの策

前章所論が試験に堪え、人皆之れが實行に努むるの義務ありと云ふことにきまれば、如何に之れを實行するか、第二の問題となる。之れに對し英國にて起る第一の大障礙は救貧法であるが、弊害著大な國債でも此の弊害に比べればもの數でないとい評されるほど恐ろしいものなのである（註1）。近年に於ける救貧税増加の速度は、將來社會に異常な割合の浮浪人が存在するの形勢を示す。藝術に秀で、商工業に秀で、而も從來試験を経た政治中、最上のものと一般に許される立派な政治を有する英國民としては信じられないほど多くの浮浪人が前途に生ずることを示すのである。

かゝる前途は吾々を震撼せしめるに十分であり、吾々は之れを除去するに熱心ではあるが、如何にせん其の禍根既に深く、救貧法の與へる救助は非常に廣汎に互るので、同情心ある者は敢て一舉に之れを廢止せんと提議することが出来ないほどである。從來救貧費増加の勢を以つてすれば、其の膨張は將來到底停止の時なきこと明であるから、同法の效力を限定し將來の増

額を防止するため、現在の税率、乃至何等か別の税率を決定して、救貧金額を一決し、將來決して之れを超過せしめない様規定すべしとの案を有する者もあるが、之れに對しては反對がある。即ち此の案では將來尙多額の費用を徵集しなくてはならず、又多數の貧民を救助しなくてはならないから、救はれる貧民から見ると現行法との相違はあまり認められず、各人は従前通り、困れば他人と同様に救助を受ける権利があると考へるであらう。而して一定額が徵集分配された後、不幸貧困に陥る人は、多數の他の人々が同法の救助を受けて居るのに自分だけ除外されるのは特別不公平な取扱であると考へるに相違ない。又徵集された額を窮民の數が如何に増加しても其れにかまはず全部の入々の間に分配すると假定すれば、なるほど後で窮民となつた連中に對しては割合公平かも知れないが、從來此の救助を受けつゝあつた人は云はれなく其の額を減せられる譯でつらく感ずるに相違ない。何れの場合に於いても貧民を救助すると云ふことが既に社會的に不公平である。まして其の數が増加した場合、食ふに足れない食物を給與して必然的に之れを餓死せしめ、或は病死せしむるが如きに於いてをやだ。

予は救貧法に就いては随分考慮を費やした者であるから、今恐らく何等大反對のあり得ないと信ずる漸次的廢止の一策を自ら提示するの資格ありと考へる。之れに付いては同法の結果たる壓制、倚頼、怠慢、不幸等の彌蔓を察知して眞面目に之が撤廢を期する者は、予の提案を採

用するか、少くとも予の主義を採用することを正義の上から已むなしとすることを確信する。かくばかり關係の廣い救助制度に對して、直接に其の原則を研究せず、且つ其の根本原因——即ち此種設備の急速な發達を促がし、而も是等設備を以つてしては如何にしても其の目的を達し能はざらしむるに至つた——に立至つて之れを緩和するため努力せず、一舉に之が撤廢を行ふは人道に反することのやうに思はれる。

該制度の撤廢はともかくとして、現在の制度に大變更を加へ、救助費の緊縮若くは其の増加の趨勢を阻止せんが爲めにも、豫備行動として貧民が扶養を受くるの權利を正式に放棄せしめることが、正義と名譽の上から第一に必要なやうに見える。

予は此の目的のため一法規の制定を提案したい。即ち該法實施一年後に行はれた結婚の出生兒、竝に二年後に生れた私生兒は教會區の補助を受ける權利なしと布告すること之れである。而して更に同法を周知せしめ下層民に其の精神を徹底せしめるため各教會牧師は結婚豫告の發表後短き演説をなし、吾人は自分の小兒を扶養するの義務あること、扶養の見込なくして結婚するは不當不道德なること、國家的制度をして全然兩親の義務であるべきことに助力せしむる計畫は却つて貧民自身に對して大なる禍害を與へたこと、かゝる制度は其の目的と全然相反する結果を生ずるものなるが故、之れが全廢は絶對的に必要であること……等々を切言するのである。

之れは明瞭精確な豫告で何人も誤ることの出来ないものである。而も或個人に壓迫を加ふることなく、肉體的精神的弊害共に測り知るべからざる政府と富者に對する倚頼から、將來の國民を救ふこととなるのである。

此の豫告が公然と與へられ、救貧法が將來の國民に關する限り效力を失つた後、尙家族扶養の見込なくして結婚せんと欲する者あらば、其れは勿論本人の勝手である。此の場合結婚は予の私見に依れば明に不道德ではあるけれども、社會が進んで之れを阻害し或は罰するの責はない。何故なら之れに對する自然法の所罰は直接猛烈に其の個人の頭上に落下し來り、彼を通じて間接微弱に社會に影響するのみであるからだ。自然が吾々の代りに治め且つ罰する時、彼女の手から鞭を奪ひ、吾々自ら刑の執行者たらんとするはつまらない野心である。だから彼の所罰はよろしく自然の罰、即ち困窮といふ罰に任せるがよい。彼は最明白精確な豫戒を犯して罪を得たので、其の結果に對しては自分自らの外他人を怨むことは出来ないのである。あらゆる教會の補助は勿論彼には與へられず、彼は覺束ない個人の慈悲に縋らなくてはならないのである。かくて彼は神の定めた自然の法則が再三の戒告を與へたに拘らず、是れに従はなかつたため、自分と自分の家族が其の罰を受けるのだといふことを知り、自分の勞力にて正當に購ひ得



る食物以上、一碗の食でも社會に要求するの權利なきことを覺るのであるが、此の際幸に個人の憐憫に依つて自分と家族とが飢えを免れたと假定すれば、此に始めて眞に感謝の念が起るであらう。

若し此の制度が實行されれば、極貧者の數は減じ慈善心に富める人々の好意と能力とに依つて救ひ得る程度に止るべく、此の場合に於ける主なる一困難は、慈悲の及ぶ程度を制限することである。即ち無茶苦茶に貧民を救助し、却つて怠惰と不用意とを獎勵するが如き結果に立至らないやう注意することが必要となる。

私生兒に付いては、適當な豫告が與へられた後に於いては決して教會區の補助に依ることを許さず、全然個人の慈悲に待たしむるがよい。若し親が子供を遺棄すれば之れに對して自ら責を負はなくてはならぬ。私生兒は社會にとつて比較的に殆ど價值がない。子供は後から續々と生れて來るからだ。私生兒の主なる價值は親の愛の對象たり得るところに在る。しかし若し此の愛を感じ得る唯一の人々が若し此の價值を認めず之れを遺棄したとすれば、社會は必しも親に代るの義務はない。即ち扶養上の義務ある親が小兒を遺棄し或は故意に虐待した罪を罰する以上に、其の保護に關する責任はないのである。現在では私生兒は教會區の保護下に置かれるが、少くとも倫敦では一般に第一年に死亡する。何れにしても社會の受ける損失は同一である。

が、現在では兩親の犯罪行爲は多數關係者に依りて緩和され、嬰兒の死は兩親自らが神と社會とに責を負ふべき非行の結果とは考へられずして、神の御召と考へられるのである。

兩親の逃亡はしかし片親の逃亡ほど多くない。下男や労働者が私生兒をまうける時は彼の逃亡は全くあたりまへの事である。又妻と多くの子供ある男が自分一人遠く逃走して家族を教會區に遺棄することも決して稀れな事ではなく、予はよく働くよささうな男が妻と六人の小兒を救ふ最上策として自分だけ逃亡して見やうかといふのを聞いたことがある。是時屢發の出來事が他國で話頭に上つたならば、英國人の性格に付いて妙な推論が下されるかも知れぬ。が若し英國の社會制度が説明されれば此の怪みも消えるであらう。

元來自然法に依つて小兒は直接獨占的に兩親の保護に任されてある。又自然法に依つて子供の母は同様直接に其の子の父に一任されて居るのである。若し是等の關係が自然的になつて居り、而して男が其の妻子の扶養を全然自己の責務に感ずるならば、之れを遺棄するやうな極悪人は恐らく世に十人とはないであらう。だのに英國法律は全く自然法に反して次のやうに宣言するのである。即ち兩親が其の子を捨てたら他人が之れを養育してやる。又男が女を捨てたら、女は尙何處かで保護を受くるのであると、換言すれば吾々は自然の繫縛を薄弱無効ならし

めるため、あらゆる努力をなす譯であつて、而も他方に於いては吾々は人間が不自然であるといつて之れを非難するのである。事實は正に然からず、かく自然法を破り、人間最上最高の感情を破壊する行爲に獎勵を與ふるが如き法律を制定する社會こそ、國家として不自然なのである。

私生兒の父が発見されると、投獄すると脅喝して結婚せしめるのが多くの教會區の慣用手段である。しかしかゝる處置はいくら非難しても足りないのである。第一、教會區役員たちのかかる處置はいかにも淺薄な處置である。若しかうしてうまく結婚が成立すれば、現在の制度は一般に一人の小兒の代りに三四人の小兒を背負はなくてはならない。第二に宗教的儀式を冒瀆することかゝる婚儀より甚しいものはない。女の品格がかゝる結婚に依りて救はれると信ずる人々、男の道徳的價值が聖壇の前に誓はれる虚言に依つて増大すると信ずる人々は、品格若くは道徳に付いて吾々が教へられたのとは頗る相違した觀念を持つて居ると云はなくてはならぬ。女を欺き結婚といふ奸餌で醜交を結ぶに到つた男は極惡人であつて極刑に償する。さればとて彼に新なる虚言をつかしめ、相手の女を不幸に陥らせ、社會に浮浪的家族を負はせるが如きは予の決してとらざるところである。

私生兒であるか否かを問はず、自分の小供を養育するの義務は明白重大なものだから、社會は適當に之れを勵行するため、制裁手段を有するのが當然だ。しかし予の信ずるところでは、如何に社會の制裁が強くとも、其の效果に於いては唯一片の知識に如かない。即ち將來生れる子供は全然兩親の責任であり、若し兩親が之れを遺棄すれば覺束ない個人的慈悲に一任せられるより外途がないと一般に周知せしむることに遠く及ばないであらう。

母と子が自ら格別の犯罪をしたわけでもないのに、父の非行のため苦むといふのはつらい事に相違ないが、之れは必然的な自然法の一部なのである。一たび此事實に想到する以上、吾々が系統的に之れが緩和を企圖するに先立つてよく此の問題を考察し、吾々の立脚地を非常に明確にして置かなくてはならぬ。

神は十誡中に親の因果が子に報ると宣へるがため、屢々非難の的となるが之れは少し考が足りないやうだ。人間性の全構造が完全に根本的變化を経ぬ限り、人間が天使になるか或は少くとも現在の人間とは全然違つた者にならない限り、かゝる法則の存在は絶對に必要だ。何故なら子供の道徳的社會的狀態が兩親の行狀に依つて影響されないやうにすることは、永久的奇蹟——之れは恐らく命題の矛盾ではあるが——に依るにあらざれば到底不可能であるからだ。苟も兩親に育てられた子供にして、現在其遺徳を享け、或は其の餘殃に苦まぬものがある

か。兩親の戒慎、公正、慈愛、節制に依つて道念を高められ、或は其の反對の資質に依つて之れを下けられない者があるか。兩親の名聲、先見、勤勉、幸運に依つて社會上の位置を昂められ、或は不名譽、不用意、怠惰、不幸に依つて之れを下けられない者があるか。而して此の福祉の遺傳に關する智識が人間の道徳的努力を刺戟し活氣づけることは果して何の位であるか。之れが確實性を認むればこそ兩親は熱心不斷の努力で子供に善き教育を授け、其の將來に對して備へんと欲するのではないか、男が妻子を遺棄して何等苦痛を蒙らないと假定すれば、妻に飽足らず結婚の枷がいやになつた人々の中、家庭の苦勞と困難とを捨て、自由獨立の獨身生活に歸らない者果して幾人あるだらうか。之れに反し、兩親の過失からして子供が苦しむかも知れないといふ考慮は惡事に對しても大なる制肘力を持つものである。自分だけは自分の日常行爲から來る結果を無視して平然たる連中でも、子供には自分の惡徳愚行の結果が及ばないことを祈る。だから世の道徳的機構の上から云へば親の因果が子に報ることが必要で、若し吾々の誇大な己惚れから、系統的に此の因果法の力を緩和せんと努めた位で自分の周圍の社會、即ち子孫を此の法則の範圍外に置き、よりよく彼等を支配することが出來ると想像すれば、其れは大なる誤りであると思ふ。

若し予の案が採用されれば、救貧税は數年後に急速に減少し始め、遠からず完全に撤廢されるであらう。而も予が今日考へるところでは一人として之れがために欺かれ或は傷はれるものもなく、従つて之れに對して不平を云ふべき正當な權利はないのである。

救貧法の撤廢もしかし其れだけでは不十分である。即ち之れに代ふるに良習慣を以つてしなくては折角の計畫も何にもならないのである。同法を過重視する人々に對しては、他の國々、即ちかゝる法律の行はれて居らない國の貧民の状態を英國貧民の状態と比べて見るやうにと答へただけでよささうでもあるが、しかし他方から考へると此の比較も多くの點に於いて不公平であつて、救民制度の功罪如何を決定するに足らないのである。蓋英國は自然的政治的に大した利益を持つて居り、比較の對手たる國には其れが缺けて居るかも知れないからである。英國の土地と氣候とは或國に起る如き一般的な收穫全減といふことを知らない。英國の島國的位置と貿易とは殊に輸入に便利を與へるし、澤山の工場は農業に従事しない人を皆工業に従事せしめ、土地と勞力の所産を全住民に規則正しく分配せしめるのである。就中大多數の人民を通じて便宜氣樂な生活に對する趣味と、自己の状態を改善せんとの強き希望（之れ實に國家隆盛の最大原因）と、従つて勤勉、用心といふ殊勝な精神が全般に普及して居るやうに見える。是等の傾向は專制國の特色たる絶望的怠惰とは全然相反するものであり、英國政治の組織と、各人

勤勉の所産を各人に確保する勝れた英國法律との結果である。だから他國との比較上、英國が貧民の状態に於いて勝れて居るやうに見えても其れは全く英國々情がよいためであつて救貧法に因るものと解釋すべきでない。目鼻立ちに一つの缺點ある女でも、此點に缺點なき他の女と比べて大に美人である場合がある。此の場合前者の勝れた美が此の一缺點あるためと斷定するのはおかしいではないか。救貧法は常に英國の先天的及後天的利益を割引せしめる傾向があつた。幸にも是等利益は著大であつたから、救貧法のため多少微弱にはなつたが全然消滅するに至らず、此の利益と同一法律に因る結婚妨害とがあつたため、英國は此の惡制度に對して長く自ら支持し得たのである。實際革命前の和蘭を除けば、世界如何なる國でもかかる法律を實施して全滅を免れ得る國はないであらう。

愛蘭にも救貧法を行はうと提議した者があつたが、若し同法が實施されたら所有土地の全部が久しからずして失はれるか、或は絶望裡に同法を撤廢するか、何れかに結果するであらうことは一般人民の貧困状態から疑ふの餘地がない。

瑞典は不順な氣候のため屢々饑饉が起り、且つ他面貧乏國だから大輸入は思ひもよらぬことである。だから英國に於ける如き教會區補助制を設けると、國中の財産がつぶれ、社會組織を癱痺せしめ、假令豊作が廻り來ても亦舊態を回復すること全く不可能となるであらう。

佛國の如く有利な國勢と氣候とを有しても、人口増進の勢頗旺盛で下層民間の先見の不足が著しいから、救貧法が施行されたら所有土地は其の重荷に堪えかね、人民の困窮は一層甚しくなるであらう。革命當初の窮民調査委員會が、當時發議せられた救貧制度を否定したのは實に是等事情のためで、其の處置は適切當然であつたといふべきだ。

和蘭を若し除外例とすれば、其れは同國の非常な特殊事情に因るのだ。即ち國土の狭小な割に、廣汎な外國貿易と多數の海外植民地とがあり、他方國土の一大部分が極端な不健康地で他國に於けるよりも遙に大なる平均死亡率を生ぜしむることが其れである。和蘭が貧民管理上有名になり、救助を訴へる凡ての窮民に仕事を與へて之れを養ひ得るのは、主として人の知らぬ此の事情に因るのだ。

獨逸の如何なる地方も、教會區救貧制度を廣く行ひ得るほど富んでは居ない。しかしかゝる制度がなければこそ或地方に於ける下層民の状態が英國の下層民に比して良好なのだと思はれる。瑞西に於いても、最近擾亂前に於いては同一の理由で一般貧民の状態は優つて居た。丁抹領なるホルシュタインとシュレスウエヒ公領を旅行した經驗に依ると、貧民の家屋は英國に於けるよりも良好清潔で一般に困窮の表はれが少かつたやうに思はれる。

諸威は不順苛烈な氣候といふ不利益があるのに拘らず、自分が數週間の滞在在中見聞したところ

ろに依ると、平均した所、貧民の状態は英國に於けるよりもよいやうだ。其の衣住はまさつて居るし、白パンこそなければ、より多くの肉、魚、牛乳等を消費する。殊に農夫の子供は英國に於けるよりも丈夫さうに見えた。かく其の氣候風土から豫想せられるより一層幸福な状態は何から來るかといふに、其れは専ら人口に對する豫防的制限の作用する程度から來るのである。若し救貧法が行はれ、此の制限が破壊されれば、下層民は極貧の状態に陥り、其の勤勉心は減退して土地と勞働の所産も亦従つて減少するであらう。のみならず穀物不作に際して之れを切り抜ける工夫力を缺き、終に國を擧げて永久的饑饉の状態に投ずるであらう。

若し國民が愛蘭や、西班牙や、其他南方に位置する國民のやうに、其の結果を考慮せずして子供を生むやうな下等な狀況に在れば、救貧法の有無は問題でなく、あらゆる種類の不幸が人口の増加に對して優勢的妨害となるのである。事實救貧法は常に國の一般資源を減衰せしむることに依つて此の妨害を助長せしむるものであり、かゝる状態の下に於いては假令法律が出來ても直きに實施不可能となるのである。が一步を進めて言へばかゝる法律が在らうがなからうが、又人間が如何に智恵と努力をしぼつて見たところが、こんな不謹慎な國民を極貧のどん底から救済することは出來ないのである。

(註1) 貧民状態改善協會報告第三卷第二十一頁

## 第九章 人口に關する俗説と矯正の方法

### 國民教育の必要

人口増進のあらゆる積極的施設を撤廢するだけでは十分でない。吾々は同時に之れと同様の、否一層有力な結果を人口上に及ぼして居る俗説を打破しなくてはならないのである。之れには必時がかゝる。而して之れを遂行するの途は、書き物や會談の中にて該問題に關する正しい觀念を流布することが第一に必要であり、人間は單に種を傳播するのみならず、同時に道徳と幸福とを傳播する義務があること、若し之れを遂行すべくかなりの見込がつかなければ、子孫を残すべからずといふことを、社會人心に強く印象させることが第二に必要である。

上流階級の間には結婚の過多を憂ふべきあまり大なる理由はない。該問題に關する一層正しき意見が弘通すれば上流にも大なる利益を與へ、多數の不幸な結婚を豫防するの效能あるべきは明白ではあるが、此の目的に對して特別の努力をしなくとも、上流には教育並に或身分と殆ど不離の關係ある自負獨立の精神が旺盛であるから、結婚に對する豫防的制限が強く作用する

ものと信じてよろしい。だから此の社會に於いては、各人は家族を養ひ得なければ之れを持つなどいふだけで十分だ。此の事は是非守らなくてはならぬ積極的義務として命令してもよいが是れ以上の制限は各人の選擇と趣味に一任すべきである。大體上流社會に存在する習慣から判斷すると、獨身婦人に一層多くの尊敬と個人的自由とを與へて、既婚婦人との差別を少くするだけで此の目的を達する事が出來やうと考へられる。而してかゝる待遇の改善は當面の目的、即ち結婚數の過多を避けるといふことから離れて考へて見ても、平明な平等主義上必要なことなのである。

上流社會に於いて結婚の豫防的制限を相當に作用せしめるとがあまり困難でないとするれば、此の問題に殊に重大關係ある下層社會に對しても、知識と先見を普及せしめ、有識階級に於いて之れが實行を容易ならしめたと同一の手段を採ることが明によき方法である。

而して此の目的を達成すべき最好の機會は恐らくアダム・スミズの提案通り、教會區教育制度を設けることに在るであらう(註1)。其の教課に付いては普通學とスミズの擧げたもの外に、予は人口理論が下層階級に對して如何なる影響を及ぼすかといふ點、竝に貧民の幸不幸は貧民自身に懸つて居るのだといふことを時々説明してやる事が殊に必要であると思ふ。而して此の説明に際して少しでも結婚の慾望を削引きすることは必要でもなく又適當でもない。むしろ

ありの儘に結婚は人間の性質上殊に好むところであり、大に幸福を増進し罪惡の誘惑を除去する上に效顯があるものだ。説く方がよい。が同時に又結婚慾も財産及他の慾望と等しく、其利益は一定の條件の下に於いて始めて實現せられものだ。いふ事を教ふるがよい。かくて青年が結婚の大に望ましいものなるを感ずると同時に、結婚の福祉を眞に享受せんがためには必要條件として家族扶養の力を具備しなくてはならぬと感ずることは、結婚前勤勉謹直の風を養ふ上に最大の效果を表はし、獨身時代の青年をして今日のやうに収入の剩餘を怠慢と惡風に蕩盪せしめず、將來合理的慾望の實現のため、之れを貯蓄せしむることなるであらう。

而してやがて此の教課中に經濟學の最簡單な理論が加へられることになれば、社會の受ける利益は殆ど限なきものとなる(註2)。最近饑饉中(註3)或労働者との會話に於いて、予は穀物問題に關する彼の根深い偏見を察知して極度に失望し、眞の自由政治はかゝる甚しい程度の無智とは殆ど絶對的に兩立しがたい事を痛感せざるを得なかつた。即ち彼等の迷妄は若し其れが實行されれば威力に依つて鎮壓せられるほか途なき種類のものであり、而して若し何日でも右目的に十分な位の權力を政府に與へ置くことになれば、其れが濫用されて人民の自由を脅すに至るは避けがたいことだと思はれた。

吾々は貧民に對して莫大の金を空費した。而も其れは常に彼等の不幸を助長せしむるの傾向

を有したのだ。しかるに彼等の教育に付いては全然爲す所がなかつた。即ち彼等に最痛切の關係ある重大な政治的真理の普及、彼等の状態を改善し得べき唯一の途であり、彼等を化して幸福平和の人民たらしむべき唯一の手段であるところの真理の普及といふ一點に於いては吾々の施設は從來憫れな程不十分であつたのである。英國下層民の教育は從來個人の寄附行爲に待つ少數の日曜學校に一任せられ、其の課程中には何んな個人の僻見でも勝手に加ふることが出来たのであるが、かくの如きは確に國民的恥辱である。此の日曜學校の進歩——或點に於いては反對すべき所があり、又あらゆる方面に不完全だらけではあるが、尙進歩は進歩に相違ない——でも實に最近の事柄ではないか(註4)。

自分の考では普通教育反對論は單に自由主義に反するのみならず、又其の論據も薄弱である。吾々が下層民の状態を改善し得るにか、わらず、吾々をして之れを差控えさせんぞ欲するならば、其の議論は最強く、又最明白必然的な論據に立つものでなくてはならぬ。而して右の反對論は之れをかくのである。他方理論に基く吾々の反駁に耳傾けることを欲しない人々でも經驗の與へる證據には目を閉ぢることは出来ぬ筈であるが、私はかゝる人々に對し優れた教育を受けた蘇國の下層民が此の爲果して多少でも擾亂不平の精神を生じたか何うかを尋ねて見た。而も蘇國の氣候風土は劣等で貧困の壓迫は不斷的であり、饑饉の來るや、度數に於いて多

いのみならず、其の激烈さも英國の比ではないのである。蘇國民衆間の知識は彼等の先見戒慎の習慣を促進せしめるほど十分普及しては居ないが、其れでも擾亂の狂愚無効なることを覺知せしめ、弊害に忍従せしむるだけの効果を舉げて居る。教育ある蘇國小農夫の冷靜平和な風習と無智好亂の愛蘭人との比較は苟も公平な推論家に對して教ふところがなくてはならぬ。

普通教育制度に對する主なる反對論は、予の聞くとくころでは民衆が若しヘインの著書の如きを読み得るやうになると政治上大害があるといふ所に論據があるらしい。しかし予はアダム・スミズと全く同感であつて(註5)、十分な教育ある國民は煽動的論說に動かされること最少く、野心あり私心ある煽動家の虚偽的辯論に對しても、無智の民衆より一層よく之れを判斷することが出来ると思ふ。目下のところでは教區中一二の讀書子は勝手に民衆を煽動することが出来る。若し彼等が民主的傾向を持つ者であると假定すれば、或著書中聽衆に最氣に入る章節を選び、自分の辯論が最大の効果を顯はし得る時機を捕へることに依り、教會區中の各人が著書の全部を読み、判斷し、且つ同時に反對の議論をも讀みて之れを判斷し得る場合に比し、更に大なる害毒を流す可能性を持つのである。

若し是等學校にて民衆の位置に付其の真相が教へられるならば、即ち彼等の用心と勤勉とが增加せられなければ政治上の變化も本質的に彼等の状態を改善することが出来ぬこと、及び彼

等が幸にして或特殊な艱苦から免れ得ても、自己の家族を扶養するといふ大きな問題に付いては恐らく何等利するところがなからうといふことが教へられるならば、又革命は勞働の需給状態を良好にせず、食物量を消費者数につり合せてはくれぬことが教へられるならば、而して若し勞働の供給が需要を超え、食物の需要が供給を超える場合には如何に政治が自由完全で、運用が最良最上であつても人民は矢張極貧の状態から脱し得ぬといふことが教へられるならば、アダム・スミスの教育獎勵論は更に千鈞の重きを添へることであらう。

教育によつて是等眞理の理解を普及せしむることは明に平和と安靖とを進め、煽動的論説の氣勢を殺ぎ、政府當局に對する不當な反對を阻止するの傾がある。其れでも尙普通教育に反對する人があれば、其れは無智な民衆を激成して壓制の口實を作り、政府の權力を増さしめる機會を作らんと欲するものだと思はれても仕方がなからう。

下層民の幸不幸は全く自己の所産であるとその眞相を説明してやる外、教會區學校は又幼年の教育に、報償の正しい分配法とに依り、兒童に禁酒、勤勉、獨立、用心の習慣を養成せしめ、宗教的義務をよく果さしむる絶好の機會を與へ、因りて以つて彼等を現在の墮落より救ひ、一般に比較的善良な習慣を持つ中流階級に多少なりとも接近せしむることが出来る。

多くの國の下層階級には貧困の一標準ともいふべきものがあり、此の點以下に身分を落して結婚し、子供を生みつゞけるといふことはないやうに見える。此の標準は勿論國に依つて違ひ、地質、氣候、政治、知識、文明の程度等に依つて形作られるものであるが、其れを高める主なる事情としては政治の自由、財産の安固、知識の普及、安易氣樂な生活に對する趣味等を數へなくてはならぬ、而して反對に其れを低下せしむるものは壓制と無智とである。

だから吾々が勞働者の状態改善を企圖する場合には、獨立の精神と、相當の自負心と、清潔安易な生活に對する趣味とを培つて、此の標準を出来るだけ高めしめることを目的としなければならぬ、善政が下層民の用心深き習慣と自尊心を増進するの結果を生ずることは既に説いた。しかし善政も善き教育を伴はなくては十分効果はない。否民衆的教育を伴はない政治は決して完全な善政とは云ひ得ないのである。教育の與へる利益は人數の制限なく享樂し得る一利益であり、此の利益は政府の力にて與へ得るものであるからには、政府は正に之れをなすべき義務があるのである。

(註1) 國富論第三卷、第五編、第一章

(註2) アダム・スミスは幾何學、機械學の初歩を教會區學校で教へなくてはならぬと云つたが、私は市場を支配する一般原則を明瞭に教へたら大なる利益があると考へざるを得ない者である。即ち此の問題は下層民に最密接な關係があるから又彼等の興味を引くことと思



ふ。がしかし社會の有識階級が是等原則に付如何に無智であるかを考へると此の點あまり多くを期待することが出来ぬやうにも見える。今經濟學を一般人民に教へることが出来ぬとすれば、せめては之れを大學の一分科としなければならぬと考へる。蘇國は此の點に於いて一つの範例を示すもので、吾々は早く之れに倣ふの必要がある。地方紳士殊に牧師等は無智のため、饑饉の發生する毎に其の害を著大ならしむるの愚に陥らぬことが必要だ。最近饑饉に際しては全國半數の牧師と紳士とは當然煽動罪に問はれる如き行爲をなした。即ち彼等が演説説教に依つて農夫と穀物商とを攻撃し、民心を激成した後には、識者が彼等に教へ、如何に壓制され瞞着されても貧民は平和的態度を採るべきものだと言つたところで、毒既に深く、殆んど何等の鎮靜的效力はなかつたのである。……之れを知らずんば單に利益を失ふのみならず又積極的に大害を生ずると云ひ得る學問があるとするば、其は恐らく經濟學を置いて他にないであらう。

(一八二五年追記) 以上のノートは一八〇三年に記されたものであるが二十二年後の今日將に其の主旨が達成せられんことを予の欣快に堪えないところである。其の後經濟學は世人の注意を惹起することになり、倫敦、ケンブリッジ、リヴァプール等にて講義が開かれ、他方オクスフォード、計畫中の倫敦大學、就中機械手養成所等に於ける經濟學科の設置は經濟

學の原則を上中流並に英國労働者中最重要な方面(即機械工)に普及せしむべき十分な希望を與へるものである。

(註3) 一八〇〇年並に一八〇一年、

(註4) 此の議論は一八〇三年に記されたものである。

(註5) 國富論、第三卷、第五編、第一章、

## 第十章 慈善心の指導に付いて

重要にして興味ある一問題が未だ残つて居る。吾々の慈悲心を指導し、現在の大目的——即ち生活資料の限度に對する人口の壓迫を緩和することに依り、勞働階級の狀態を改善するといふ目的——と矛盾せしめないやうにする方法如何といふ問題が其れである。

困窮せる同胞を救はんとする情緒は、他の自然的慾情と等しく一般的のものであり、且つ多少無差別盲目的なものである。吾々の同情心は如何なる實際の出來事に依つて刺戟されるよりも、演劇中のうまく仕組まれた場面や、小説中の作り話に依つて一層高潮に達するものであり若し吾々が十人の乞食に取圍まれるとし、單に彼等の話をきくだけで深く立入つて穿鑿をしないと假定すれば、吾々が其の中の一芝居上手な奴に金をくれるだらうことも疑のない事だ。だから慈悲の衝動も愛情、怒氣、野心の衝動や、飲食の慾や、或は其の他の自然的傾向と同様に經驗に依つて規正せられ、屢々效用といふ試金石にかけて見る必要がある。でないといつて其の目的に反する結果に陥るからだ。

兩性間に起る情慾の目的は明に種の保存にあり、又男女間の幸福を促進し、同時に無援の幼兒を適當に養育し、青少年の教育に當らしめるやう兩性の目的と興味とをしっかりと結合せしむることにある。しかしあらゆる個人が常に自然の衝動に従つて情慾を満足せしめ、敢て其の結果を考慮しなければ、上述目的の大部分は達し得られないし、種の繼續すら亂交のために不可能となるかも知れない。

慈悲衝動の目的は全人類を相寄らしむるにある。殊に同一の國民及び血屬をば同胞的愛情にて結合せしむるにある。彼等をして同胞の幸不幸に興味を有せしめ、之れに因りて自ら一般法則から生ずる部分的弊害を軽減せしめ、かくて人間幸福の總和を増加せしむるにある。しかし若し吾々の慈悲心が盲目的であり、表面的貧困を慈善行爲の唯一の尺度とすると、普通の乞食だけが救助され、憤み深い謙遜な貧困者にして、不可避的困難に抵抗しつゝ、尙ほ多少の上品さと清潔さを維持せるものが全然忽諸に附せられることになるだらう。かくて吾々は無價値を價値以上に陞せ、勤勉を貶して怠惰を進め、因りて人間幸福の總和を著しく減少させることになる。

吾々の經驗に依ると慈悲衝動は性的衝動の如く強烈でなく、一般的に前者の満足は後者の満足の如く危険を伴はぬ。此の經驗と並に此の經驗の上に立つ道德律とを離れて考へて見ると、

吾々は此の二つの衝動の何れをも同様に満足せしめて差支ない。兩者共に各固有の目的に依つて刺戟される自然的慾情であり、共に其の満足には快感が伴ふのである。動物としての人間、或は吾々人間が其の結果を知らない間は、吾々は單に自然の命に従へばよいのである。併し理性を具へた者としては吾々は飽く迄其の結果に注意するの義務がある。而して若し其の結果が自己若くは他人に惡であれば、かゝる満足の仕方は吾々の状態にも適せず、又神の意志にも添はない證據であると解釋しなくてはならぬ。だから道徳を具へたるものとしての人間は是等特殊の方面に於ける慾情の満足を抑制するの義務があるといふことになる。又かく自然的情慾の結果を商量し、屢之れを效用の尺度に當てはめて見ることに依り、漸次満足の方面を改め、何等弊害を伴はず、明に人間の幸福の總量を増し、神の明白な意志に添ふやうな方法習慣を探るの義務がある。

效用は如何なる慾情の満足に對しても直接の刺戟とはなり得ないが、神の意志表示といふことを除けば、或行爲がしてよいか、すべからざるかを知るべき唯一の試金石であり、其れ故自然法から推度される道徳律の最確實な標準である。慾情を理性に服従せしめよと教へるあらゆる道徳法規は予の私見に依れば其の宣傳者が之れを意識せると否とに拘らず、皆此の基礎の上に建てられたものである。

予が是等眞理を説くのは、人間慈善心の習慣的指導上に之れを適用せしめんがためだ。若し吾々が此の效用といふ標準を常に視界に置けば、吾々現在の大自然的と矛盾せしめずして慈悲心を發動せしむべき餘地が十分あるのである。

慈善の最價値ある部分は與ふる者自身に對する效果に在る。今吾々の慈善行爲が全體として眞に貧民の上に有益でないと假定しても、此の衝動を撲滅せんとするが如き努力には賛成が出來ない。何故なら此の衝動の適當な満足は明に人間の心を高尚純潔にする傾があるからだ。併し慈善行爲を效用の尺度に照して見たところで、最貧民に有益である場合は同時に又施主の心にも最良の結果を與へる場合であるといふことを知るのは殊に愉快である。

慈悲は其の性質尙哀憐の如く

據よんじころなく施すよんじこべきものではない。

春の小雨の自おのづからにして

地を潤うるすが如くに降ふるものぢや(註1)

英國にて教會區法に依つて貧民に分配される莫大な金は正しくは慈善とは呼び能はぬ。其れは慈善の最美しい特質を缺く。施主の任意でないと同時に其の特質精神を失つて居り、其の上該法律に依つて強制的となるので、施主即ち救貧税を徵集される人々に對しても、分配を受け

る人々に對すると同様に有害な結果を及ぼして居る。被救助者の側では、眞の救助どころか、却つて貧困の益々甚しく又蔓延するを見、施主の側では快感を感じるどころか絶へざる不平と憤懣とを惹起して居るのである。

任意寄附にて支持される大きな慈善的設備——中には確かに有害なものもあるが——に於いても寄附は往々にしていや／＼なされることがある。かゝる寄附は純眞の慈悲心から出でずして、却つて或身分或は資産から當然豫期されるものであり、寄附者の多くは自ら資金の監理に與らず、又救はれる人々の運命にも興味を有しないから、慈善行爲を爲す者自身の心に著しい有益な効果が起らうとは豫期し得ない。

普通の乞食に物やる際でも、彼を救ふ喜びに動かされると同様に、又いやな乞食のしつこさを免れたい希望に依つて動かされる場合がある。吾々は同胞の救助の機會が與へられたとて感謝するよりも寧ろこんな奴に出會はなかつたことを希望する。吾々はひどい表面的貧困を見て痛ましく感ずる。而も吾々の與へる僅少のものでは之れを救ひやうがないのである。否何等かの實質的效果を生ぜしめることすら出来ないのを知つて居るのである。加之、次の町角へ行けば同様な物乞に出會するのだし、而もそれが公然の詐僞であることを知つて居るのだ。其れ故時としては吾々は道を急いで彼等の強請に耳を閉づるのである。吾々は吾々の感情を傷けること

なくして與へずにするならすませたいのだ。吾々の慈善は多少強制されて居る。だから従つて吾々の心に満足な印象を與へず、同情心と愛情の上に有益な効果を持ち得ないのである。

任意能動的な慈善は之れとは全く違つて、親しく貧窮者を知り貧者と富者とを結合させる絆に一種の誇を感じる。自ら貧家に入りて其の窮亡を實見するのみならず、又其習慣性癖を實驗し、かくて襤褸の外何等取るところなき喧騒鐵面皮な貧困者の要求を却け、何等罪なくして飢に泣く沈黙謙讓の貧困者には十分の救助を施して之れを勵ますのである。かゝる慈善は強制的な慈善行爲とは比較にならぬ。かゝる慈善と教會區救助との對照に至つてはかの讚歎すべき救貧法論中に、タウンセンド氏が使用した言葉を借用するに如くはない。

性質上何がいやだと云つて教會區の救助金支給處の光景ほどいやな光景はない。其所に出て來る連中は、同じ貧困人でありながら嗅ぎ煙草と、チンと、襤褸と、虱と、狼藉と而して罵詈雑言を作ふ者共である。而して之れと對比して世にも美しい光景は自満足の慈善家が勤勉有徳な貧者の困窮を救ひ、饑餓を養ひ、裸體を覆ひ、やさしき子供と暮す寡婦の悲を緩和せんと貧家に急ぐ有様である。若し其處に貧困の涙にかゝやく瞳、落つる涙と舉げられた兩手、豫期せぬ恩恵に對する是等僞らざる感謝の無技巧な表情の、より美しい状

景がなかつたとすれば、上述の光景より喜ばしい光景は又とないのである。

かゝる光景の中に居るものが道徳に於いて日々進歩せぬといふことはあり得ない。又吾々の情愛の作用中之れほど吾々の心を純潔高尚にすることも他にはあり得ない。與ふる者の幸が感ぜられるのはかゝる慈善に限られ、又一般に與へられた者の幸を感じるのも殆んどかゝる場合に限られる。否大金を散じて弊害以上の利益を齎らす慈善の方法がありとすれば、これは其の唯一ではないとしても少くとも其の一方法である。

教會區の役人や判事やは救助を與へ或は之れを差控へる權利を或程度迄持つて居るが、之れは個人の隨意的慈善に伴ふ被救助者の辨別とは其の性質上大差があり、結果に於いても又大に異なるものだ。あらゆる英人は一定事情下に於いては教會區の救助を受ける權利がある。だから若し其の無資格が明白に證據立てられない限り、誰れでも救助が差控へられ、ば苦情を申立てる權利がある譯だ。此の點を決定するに必要な調査と、與へらるべき救助の程度とが屢々出願人をして虚偽の申立てを爲さしめ、監督者に依怙と壓制とを行はしめる機會を作るのである。而して申立て通りの救助が與へられても勿論受取人は何等感謝の念を起さず、若し之が拒絶されることになれば、關係者は待遇の不公平に對して憤懣怨恨を感じるのである。

任意的慈善の場合にはかゝる種類の事は起り得ない。被救助者は心中に快き感謝の念を感じ

るが之れを受けないとして毫も憤慨すべき理由はない。人は誰れでも自分のものを勝手に處分する權利があるのだし、一人に與へ他人に與へなかつたからとて其の理由を一々説明する必要はないのである。任意慈善の特質である此の種專斷的權利は何等惡結果を伴ふことなくして對手を撰擇するの自由を保留し、必然的に之れに伴ふ不確實性といふ點から却つて最良の効果を表はし得る望がある。貧民の一般的幸福から論ずれば、あらゆる貧民をして慈善をば必倚賴し得る二資金と考へしめなないことが最重要だ。貧民は自分の努力、勤勉、先見が唯一の正しい據り處であると教へられなければならぬ。而して萬一彼等が此の據り處に頼りて尙生活し得ざる場合、救助が始めて合理的希望となり得ること、而してこの希望すら彼自身の行狀に依るものであり、彼自身の怠惰と不用意とのため貧困に陥つたのではないとの自覺に待つべきものであることを了解せしめなくてはならぬ。

吾々が慈善を行ふ場合には、對手の適當な辨別をなすことに依り、貧民に此の教訓を與ふべき強い道徳的義務があること明である。若し富者の資産四分三を投ずることに依つて一切の貧者が皆救はれ、貧乏が英國から影を没するといふことになれば、私は凡ての貧民を無差別に援助し、貧乏の程度のみを尺度として補助金を與へることに一言半句の反對も言はぬ。而も從來の經驗が一の除外例すらなく吾人に示すところに依れば、貧困と不幸は無差別な慈善が行はれる

こと多ければ多いほど比例的に増加し來つたのである。だから例に依つて自然法から演繹して見るとかかる慈善の方法は適當な方法でないといふ結論になるのである。

自然法は聖ポールと共に「働かざる者は食ふべからず」と云ひ、又貧民のみだりに神をあてにすべからざるを教へる。其れは齊一不斷に貧民が何をあてにすべきかを明示し、家族を扶養し得る見込なくして結婚する者は必貧困に陥るべしといふが如くである。而して是等教訓の啓示は人間性といふものから考へて絶對的に必要であり、又著しき有益な効果を持つやうに思はれる。若し吾々が公私慈善の指導に際し、働かざる者も食ふべしと云ひ、家族を扶養する力なくして結婚する者に對しても其の家族を援助すべしとするならば、吾々は明に自然法より生ずる部分的弊害を助長するのみならず、また是等自然法の有益な結果を規則的系統的に打消すものであると云はなくてはならない。吾々には神がかゝる目的のため人間の胸に慈善の衝動を宿したまうたとは解することが出來ぬ。

人生に於いては十分基礎ある豫想も時として實現せられないことがある。勤勉、戒慎、道徳も其の正しい報償を得ず、罪なくして災禍に陥る者もある。かゝる人々こそ眞に慈善の對象たるべきであり、かゝる人々を救ふ場合こそ、慈善の固有任務たる自然法から來る部分的弊害を緩和することになるのである。従つて此の場合には吾々は毫も其の惡結果を憂ふるの要がない。

即ち他方に尙一層烈しい貧困者があつても若し其れが無價値な人間であるならば、吾々はよろしく上述の如く努力の末に已むなく貧困に陥れる者を吾々の資力相當金を惜まず十分に救助すべきである。

此の種の貧者が救はれ、吾々の慈悲心に對する第一要求權が満された後に於いては、吾々は勿論怠惰不用意の連中に吾々の注意を轉換させてよい。しかし人類幸福といふ立場から考へて吾々の與へる救助は過多であつてはならぬ。自然法が彼等に與へつゝある罰を緩和してやることはよいことであるが、決して全然之れを除いてやつてはならぬ。彼等が社會のどん底にあるは自業自得であるのに、之れを救つて其の位置を高めさせるのは、明に慈善の主旨に反するのみならず、社會上彼等の上に在る人々に對して最明白な權利の侵害となる。要するに彼等の使用する必需品は決して普通賃金にて購ひ得る以上であつてはならないのである。

上述の理論は怠慢不用意の習慣と關係なく不慮の災難から來る急迫焦眉の不幸に適用の出來ないこと勿論だ。若し腕や足を折つた人がある場合、彼を援助するに先立つて道徳的品性を尋ねる必要はなく、即刻の救助が却つて合理的であり、效用といふ試金石も十分吾々の行爲を是認してくれる。かゝる場合いかにも無差別な救濟を行つても故意に腕や足を折ることを獎勵する結果とはならぬからだ。クリストは曾つてサマリア人が慈悲の衝動に従ひ、不慮の災禍に惱め

る他國人を救へることを嘉尚したが、クリストの此の讚歎は效用といふ尺度で測つて見ても、少しも聖ポールの言葉——働かざる者は食ふ勿れ——と矛盾しない。

又吾々は如何なる場合にも、もつと立派な人を助け能ふからといふ假定の下に、慈悲を行ふべき現在の機會を失つてはならぬ。疑はしい場合には慈悲衝動の命するまゝ、行動するのが吾々の義務であるときめてよい。しかし理性の動物として人間は行爲の結果を商量しなくてはならないものであり、自他の經驗から、或慈善の方法が結果に於いて有害であり、或他の方法が有益であるとの結論に達したとすれば、吾々は道德を具ふる者として、惡果を結ぶ慈悲行爲を抑制し、其の衝動が善き結果に向つて働く習性を養成しなくてはならないのである。

(註1) 坪内博士の譯に依る(譯者)。

## 第十一章 救貧方法に關する諸説 (一)

慈善を行ふに場合、或は貧乏救済に關して如何なる努力を爲す場合にも、人口論上尙殊に注意すべき一點がある。即ち吾々は直接結婚を奨励したり、さなくも獨身者と妻帯者との間に必存する境遇上の相違を一定の組織的方法で平均せしめんと欲するが如きことは決してしてはならぬといふこと之れである。人口理論を最よく理解せる人々でも、自分の見る所に依ると皆此の點に付いて重大な誤謬に陥つて居るやうに見える。

サー・ジェームス・スチュアートは彼の所謂有害的繁殖を十分に了解し、且つ人口過多に隨伴する不幸を察知しながらも、廣き棄兒收容所の設置を望み、且つ一定事情下の小兒を兩親よりひきとつて國費で養育することを推奨し、同じ貧乏人中、獨身者と妻帯者との差があまりに甚しいのを悲んで居る(註1)。しかし是等議論を敢えてする同氏は實は重大な事實を忘れて居るのである、即ち現在棄兒收容所を増さず、或境遇下に於ける小兒に對しては國費の扶助を與へず、加之妻帯者の側に於いては經濟上の大不利益があるに拘らず、尙人口が過多であるとすれば——

—其れは貧民が子供を養育しきれないといふ事實に依つて明白なことである——其れは國家の勞働維持資金がこれ以上の人口を適當に支持するに不十分であるといふ證據であり、若し人口増加が一層獎勵されるなら其の結果は氏の非難せる所謂有害繁殖となつて表はれるに相違ないといふこと之れである。

タウンセンド氏は救貧法論中にて明晰に此の問題を論じて居るが氏の提案も實は氏の所論と矛盾せるものである。即ち氏は今日好意的に多くの教會區内に設けられて居る福利増進團體或は相互扶助組織をば、強制的普遍的ならしめんと欲し、又法律を設け、獨身者には其の賃金の四分一を納めしめ、四子の兩親には僅に其の賃金の三十分一以下を納めしめんと提議するからである。

第一上述慈善事業の經費を強制的寄附に俟つといふことは、勞働者に對する直接税と全く同一の結果を表はすに相違なく、而して其れは既にアダム・スミズも正しく論じて居る通りに結局一般消費者が負擔することとなるのである。而して土地所有者は此の方法では少しも利益を受けず、現在教會區税として支拂へると同一金額を賃金並に貨物の高價といふ形式で支拂ふに止るのである。此の種の強制寄附は現在救貧制度のあらゆる惡結果を兼有し、而も救貧法といふ名稱がつかないだけで矢張救貧法の精神を脱し得ないものである。

タカー副監牧師はビュー氏の提案にかゝる同一種案に付きて曰く、此の問題はいろいろ議論され且つ考察されたが、結局任意的寄附がよく制的強のものとするはよくないといふ結論に達した。何故なら任意的寄附なら奢侈税の如く必しも勞働賃金を昂けしめないからであると。

又小規模の任意的團體なら團體員は各監督を行ふことが出来るから始めの規約が嚴守され易く、さなくば何日でも團體から脱し得るといふ自由がある。然るに若し寄附が強制的國民的となれば始めの規約は必しも行はれず、又現在の如く少數の勤勉戒愼で而も不幸貧困に陥れる人を救ふのみならずして、懶惰無頼の徒でも皆此の國家的制度で救ふことになつて、資金が不足せる場合には寄附額が増加せられ誰も之を拒むことが出来なくなる。従つて殆んど今日の救貧税と同じやうに弊害が益々増大して底止するところを知らないであらう。若し之れに依つて與へられる補助が現在の任意的慈善制度と同じく特定の、其の額も一定して漸増せぬならば、なほほど之れは著しき便益には相違ないが、此の便益は現行教會區税制に依つて徵集される資金を同様の方法で分配すれば全く同一の結果となる。だから自分の考では慈善團體を普遍的強制的ならしめることは結局教會區税の取立て方法を異ならしめるといふ事に歸し、強制的慈善に依る分配方法は何んなものでも亦同様に教會區救貧制度の上でも採用することが出来ると思ふのである。



若し夫れ獨身者に週收入の四分一を支拂はせ妻帯者に三十分一を支拂はしむるといふ提議に到つては、明に獨身者に對する重大な罰金であり、妻帯者に對する重大な補助となる。従つてタウンセンド氏の名論に一貫する精神に正反對のものである。蓋曾て氏の提唱せる一般原則に依ると如何なる救貧制度にせよ、労働需要の緩急に從ひ人口の調節をしないものは救貧の目的を達するに足りぬ。しかるに氏の此の提案は明に労働需要に關係なく人口を促進するものであり、労働需要が少く従つて勞銀が家族を養ふに足らない時に、自ら謹慎して獨身生活を送る者を罰する結果になる。要するに私は如何なる強制的制度にも反對だ。若し獨身者が將來妻帯の場合に救濟を受けるため多少の税金を餘義なくされると假定すれば、彼等は當然其の不自由な獨身生活の長さに應じて其れ其れ大小の便益を與へられるが至當であり、収入の四分一を一年出捐した者を十年出捐した者と同一標準下に置くことは明に不公平である。

アーサー・ヤング氏は種々の著述中にて明に人口理論を理解して居り、且つ労働需要と安易生活の資料以上に人口が増加すれば必然諸種の弊害を生ずるといふことに氣付いて居たやうである。氏は「佛國旅行記」中殊に此の點を力説し、土地のあまりに細かい分配法から佛國人口が過多となり、其れが佛國民の不幸を増大せることを切論し、かゝる人口増加は單に貧困を倍加

する所以であるといつた。曰く、

二人の男女は何うにか暮しがたつだらうと云ふ假定の下に子供を繁殖する。かくて都市と工場との需要以上に人口が増加する。其の結果は貧苦となり、營養不足で罹病する死亡者數となつて表はれると。

又他の部分に於いて氏は佛國の食糧調査委員會報から至極尤もな一文を轉載して居る。即ち人口過多の弊害に付いて次の如く論定せる部分が之れである。

所詮勞銀は労働者の競争に依りて下るものであるが、此の競争は失業者には全的貧乏を惹起し、假令仕事のあるものも衣食の不十分なるを免れぬと。

而して氏は此の一文を評して曰く。

此の事の眞實なることに付いて佛國自身争ふべからざる證據を提供して居る。何故なら予が佛國各地にてなせる觀察に依れば佛國人口は佛國産業に比して頗る過多で、若し現在人口中五六百萬も少かつたならば佛國は現在に比して著しく強大隆昌を極めたであらうと思はれる位である。此の人口過多のため、佛國は舊政府時代に達し得た國民的幸福に比し、遙かに劣れる貧困状態に至る處に出現し、予の如く此の種事象に特別の注意を拂はない旅行家でも一歩毎に疑ふべからざる貧乏の表はれを見るのである。而も勞銀と食糧價額と

の關係を知り、小麥が少しでも騰貴する場合下層民が必然的に貧困状態に陥ることを一考する者は、決してかゝる状態の存在を怪まぬであらう（註2）。

又曰く

人若し佛國舊政時代の政治組織下に發生し得た氣樂な小貧困者を見やうと思ふならば、小物持の居ない地方に行くに限る。諸君が若しボースピカルデイ、ノルマンデイの一部、アルトア等の大農場を訪はゞ規則正しく雇用せられ一定の賃金を收入とするものだけで其れ以上の人口がないことを發見する。而してかゝる地方に於いて萬一此の原則に外れ、極貧住民があるとすれば其れは常に必や多少の共同牧場ある教會區に限られて居る。蓋しこの共同牧場は彼等を誘つて牛馬を飼はせるからである。云ひ換へれば財産を持たしめるからである。従つて貧困ならしめるからである。若し諸君が此の視察旅行の終りに英國へ来るならば、予は土地家畜財産等を有することなくして皆相當に衣食し、其の餘分で酒を飲みつゝ、ある或小作人等の状態を見せて上げることが出来る。

佛國に於ける結婚の獎勵に付いては更に次のやうに論じて居る。

佛國最大の弊害は雇用し扶養しきれないほど過大な人口を有することである。其れだのに何故結婚を獎勵するのか。何故人口を繁殖するのか。佛國民中には食物の競争は頗る激

烈で人民は飢え、或は貧乏して居る。此の上尙結婚を獎勵するのはいやが上に人口を増し、右の食物競争に油を注ぐものである。むしろ結婚に對する政策を反對にし、十分子供を扶育し得る見込なき者に對しては、其の結婚を阻害すべきではないか。結婚は其れが行はれざるべからざる境遇にさへなれば自ら行はれるのであるから殊更之れを獎勵する必要はない。即ち一定の規則正しき仕事さへ存在すれば結婚は必之れに應じて行はれるのである。故に現在の政策はよくとも不用であり、悪くば大に害毒を残すものである。

人口理論に付、之れと同様に正常重要な多くの他の考察を隨所に爲したほど、此の理論に精通せる同氏が、「饑饉問題の説明と其の救済策」（一八〇〇年出版）と題する小冊子中にて次のやうに説けることは少からず予を驚した。曰く、

現在かくばかり貧民を苦しめて居る饑饉が將來に發生することを阻止すべき最確實な手段は、三兒以上を有する地方勞働者に半エイカーの土地を與へて馬鈴薯を作らせ、且つ一二匹の牝牛を養ふに足る牧地を供するにある……若し各人が十分な薯耕地と一匹の牝牛を有すれば小麥價の變動は多く齒牙にかくるに足らざること、猶愛蘭に於ける如くなるであらうと。

更に又曰く、

此の制度の善きことは何人も之れを認めるが、たゞ如何に之れを實行すべきか、問題である。

予は此の制度が其れほど一般に善いと認められて居るとは少しも氣が付かなかつた。予は「何人も」の中の一人と見られることに絶對反對である。何故ならこんな制度は英國下層民の福祉に對して未曾有の大打撃を與へるものであるからだ。

唯ヤング氏は尙更に次の如く論じて居る。

目的の重大な事を考へれば大抵の困難は忽諸に附してよい。忽諸に附し得ざる不可抗的困難も次のやうな手段に依つて之れを避けることが出来るであらう。

一、共用牧場在る所では——人以上の小供ある労働者は教會區役人等の裁量に依り、家族數相當の地面を分與せられ、又牝牛一頭の配給を受く。此の地面と牝牛の使用權は一生涯に互るものとし、右労働者は之に對し年額四十志を牝牛の價額に滿つる迄支拂ふものとす。該労働者死亡に際しは土地と牝牛とは最多數の家族を有するものに讓渡せられ、讓受人は生涯前權利者の寡婦に對し毎週——志を支拂ふものとす。

二、家族のため土地分讓要求權を有する労働者の權利は、其の土地並に牝牛が共用牧場の廣さ——分一に達するを以つて限度とす。

三、共用牧場なき教會區に於いては——人以上の小供ある貧民が、一定時内に、一般普通の使用料にて使用すべく牝牛一頭並に馬鈴薯一エイカーの培養地を割當てられざる場合には、教會區委員に請求し、右地面の分讓が實施せらるる迄、小兒一人に付、毎週——志の補助を教會區に要求するの權利を有するものとす。而して右地面の分讓は地主と借地人とが之れを行ふべきものとし、牝牛は年々償還の方法にて教會區之れを提供するものとす。此の制度の大目的は、地方貧民の大部分をして小麥の消費を廢止して同様健全にして營養に富める牛乳と馬鈴薯を代食せしめ、且つ神の意志に反せずして、自然的若くは人爲的小麥不足より獨立せしむるにある。

此の方法はしかしヤング氏が佛國旅行記中にて正當に非難した結婚獎勵小兒補助として最直接的に作用するものではないか。又氏は英國民の大多數が牛乳と馬鈴薯にて生活し、愛蘭人の如く小麥の價額と勞働需要から獨立し得るものと眞面目に考へるのであるか。

佛蘭西と愛蘭に於ける下層民貧窮の特殊原因は、前者に在つては土地の極端なる小分配、後者に在つては住むべき小屋と馬鈴薯とが容易に得られるため、人口が國家に於ける資本の總額と仕事の總量以上に上るが故で、其の結果は前述を食調査委員會の報告中に喝破せられた通り、一般に激烈な競争に依りて勞銀を引下げ、失業者を極貧に投ずると同時に就業者をも營養

不十分ならしめるのである。

ヤング氏の提案は穀價や労働需要に關係なく結婚を奨励し、安價な食物を供給することに依り、下層民を全く上述の状態に陥れる傾向明瞭である。

かう云へば次のやうな反駁が起るかも知れない。現在英國の救貧法は家族數に應じて補助を與へ、因りて結婚と産兒を奨励する。此の提案は救貧法に代るものではあるが其の方法救貧法の如く不都合ではないと。しかし吾々が救貧法の弊害を脱せんと努力する以上、此の最有害な部分を保留したくない。ヤング氏は予の如く明瞭に何故救貧法が常に其の目的に對して無効であるかを理解して居られるに相違ない。即ち其れが人口を促進して労働需要以上に上らしめんとする傾向之れである。ヤング氏自身此の點に言及し、英國の工業が無比の殷盛を極めて居るに拘らず、人口が往々あまり急激に増加することは地方村落に於ける救貧税の危惧すべき増加率に省みて明であると言つて居る。

ところでヤング氏の提案は労働需要以上に人口を促進するの傾向、現行法に比して更に一層甚しい。教會區の補助を受けることは、一は人民の獨立心より、一は救助法の不快なることより頗る嫌惡せられ、従つて教會區の厄介になることが確實に分れば多くの人々は結婚を回避する。だから前に注意して置いた全人口に對する出産數と結婚數との割合から見ても明であるや

うに、救貧法は一寸豫想せられるほど結婚に對する奨励とはなつて居ないのである。然るに今早婚を念ふ労働者があつて、救貧處と教會區役人達の不快な連想に代ふるに地面と牝牛といふ愉快な夢想を以つてするならば事情は大に相違してくるであらう。若しヤング氏が幾度か繰返した通り、財産慾が大に人を刺戟するものであるとすれば、當然彼は自分にとつて決していやではないところの結婚を決行するに相違ないのである。

かくの如くにして生れ来る人口は馬鈴薯耕作地の擴張に依りて維持せられ、労働需要には關係なくどしどし増加して行くであらう。現在英國の製造工業は殷盛を極め、人口には幾多の障礙があるに拘らず、實際問題としては貧民に職業を與へることより困難な問題はない。しかしヤング氏の假定せる社會に於いては此の困難は現在に百倍するであらうこゝ明白だ。

常食が馬鈴薯であり、結婚する人が凡て馬鈴薯を植ゑるとし、又一家を支へ得るほど地面を與へられると假定せば、國庫が空乏する迄、貧民就職の良策に付いて懸賞論文を募つてたところ、其の目的（即ち貧民に職業を與へんとする）を遂げることは出来ない。即ちかゝる状態から自然に發生する人口増加の停止が来るまでは貧民は決して十分の仕事を得るこゝは出来ないのである。

ヤング氏は若し人が牛乳と馬鈴薯で生活すれば現在に於ける如く饑饉に悩まされることにな

くなるといふが、私には其の理由が解らない。なるほど馬鈴薯を常食とする人々は小麥の收穫不足から影響されることは少からうけれども、馬鈴薯の不作といふことも想像が出来る。否馬鈴薯は穀物よりも冬期中より大なる損害を蒙るものと一般に了解されて居るのである。他の農作物を植ゑた場合に比し馬鈴薯の收穫量は多いから、馬鈴薯を勞働者の常食とすれば其の當座は需要以上の收穫があり食料は豊富であるかも知れない。ヤング氏も佛蘭西旅行中に此點に付いて次のやうに記して居る。

ピレニイ山麓地方に於ける如く多少の肥沃性ある廣い荒蕪地のある地方で、其の所有主たる社會が喜んで之れを賣却するならば、定住と結婚の希望は大なる刺戟を勤勉儉約の上にと與へるに相違ない。かゝる地方では米國に見る如き人口増加が行はれ、若し地價が廉なれば殆んど貧乏といふものの影響を止めないだらう。併しかゝる事情の下で人口が盛に増加すると、萬一多少でも食物の上に故障が起れば直ちに大なる貧困を惹起する。即ち例へば荒蕪地が高くなり、上等地が賣り盡され、或は之れを購買することが困難となる等の事情が起れば大なる困窮を惹起するものであり、予は實際是等事情の發生をか山麓地方にて目撃したのである。かゝる支障が起る時、かゝる人民の蒙る困難は曩日人口を促進した勢の猛烈さに比例するのである。

若し英國で土地を小分して一般人民に與へ馬鈴薯を彼等の常食たらしめたを假定すれば正に右の記事に於ける如き情勢を馴致することであらう。なるほど一時は此の變化は有益に思はれ、貧民も土地所有慾から之れを歓迎するであらう。併し他の場所でヤング氏も論じた通り、「土地が其の生産の極限に達し、他方風俗が單純で結婚が尙盛に行はれるとすれば、其の結果は最慘憺たる貧困といふことより外にあり得ない」のである。

若し共同牧場が皆分配され、馬鈴薯栽培地を得るのが困難となり始めると、既に一たび習性となつた早婚の風は極貧の状態を現出せしめる。而して人口の増加と生活資料の減少との爲、馬鈴薯の收穫不足は現在の小麥不作と同様に豫期せられなくてはならず、又其の來るや、其の害到底現在小麥不作の比ではなからうと思ふ。

例へば英國民の小麥に於ける如く一般人民が最高價な穀物を常食とすれば、萬一不作に際しても一層廉價にして而も營養價に富む食物、例へば大麥、燕麥、米、廉價肉湯、馬鈴薯を代食して大に其の困難を減ずることが出来る。然るに彼等の常食物が最下等品であれば、かゝる場合下層瑞典人と同様に木皮でも食ふ外に仕方がなく、大部分は餓死を待たなくてはならぬ。一體勞銀といふものは常に主として需給關係に依つて左右されるものである。而して今馬鈴薯常食制度の下に於いて勞働の供給が需要を越え、常食物が廉價であるため勞働供給が頗る低

廉となつて來ると、普通賃金は現在の如く小麥價に依らずして、主として馬鈴薯價に依つて左  
右せられることとなり、終に愛蘭に見る如き下等生活に墮するやうになるのである。

勞働需要が折々供給に越え、勞働が最高價な穀物價に依つて規正されば、一般に單に食物代  
以外に多少の餘裕があり、一般人は相當の衣住を得ることも出来るのである。若しヤング氏の  
記した佛英兩國勞働者の狀態對照が多少でも眞理を穿つて居るとすれば、英國勞働者側の有利  
な點は正しく専ら右の二事情に因つて來るものである。然るに今若し牛乳と馬鈴薯が常食とな  
つて是等事情が一變し、勞働供給が常に勞働需要を越え賃金が最低食物價を標準とするやうに  
なれば、此の有利な點は忽ち消滅し、如何に慈善的努力を行つても極貧狀態の出現を避け得な  
いであらう。

同様の主旨でラムフォード伯の廉價肉湯も一般人民の常食とはなり得ない。なるほど之れは  
公共の諸設備に對して、又時折の手段としてはよい工夫であるに相違ないが、一たび之れを常  
食とすれば結局賃金は之れが爲に左右せられるに相違なく、當初に於いては勞働者は食費以外  
の餘裕を持ち得ても、最後には其んな餘裕はなくなつてしまふであらう。

そこで一般人民の幸福上から、望ましいことは常食物が高價であつて賃金は之れを標準とす  
ることであり、又不作其他折々の不幸に際しては人々がよろこんで廉價食物をとることであ

る。予は此の過渡を容易ならしめ、且つ教會區の補助に衣食する者と然らざる者との區別を立  
てるため、ヤング氏提唱の一案が最然るべしと思ふ。即ち「一條令を設け、食事に關する限り  
に於いては、馬鈴薯、米並に肉湯による外一切他物に依る救助を禁すべく、其は單に目下應急  
の策たらしむるに止らず、永久的たらしむべきものなり」といふこと之れである。此の案が行  
はれても上述の食品は必しも下層民の常食とはならぬ。而して之れがため彼等が一時餓死を免  
れ、而も他面獨立者と寄食者との限界線を明瞭ならしめることが出来れば、其の益決して小な  
りとせぬ。

下層民の常食として牛乳と馬鈴薯、若くば廉價肉湯を採用すれば、賃金が下がるといふこと  
は一般に認められる事だから、冷酷な政略家たちは歐洲市場で他國品と競争する關係から寧ろ  
此の常食制度を可なりとするかも知れない。しかし私はかゝる提議の精神に賛同し得ない。否  
予は此の國の勞働者を故意に愛蘭人の襁褓と茅屋の生活に陥れて、僅少の羅紗とキャラコミを  
賣らんとする思想ほど惡むべき思想はないと考へる。國民の富と力とは結局幸福を増進せしむ  
ればこと望ましいのだ。予は富と力とを一般國民の幸福上絶對的必要と認めるものだから決し  
て之れを輕んずる者ではないが、富と力とが民衆の幸福に正反對の方向に在るやうな特殊事情

の下に於いては、其の何れを選ばべきかに付いては道理上少しも躊躇するする必要がない。

幸にも如何に狹隘な政治的原則の上から見てもかゝる制度の採用は可能性がない。主として自己の資産に依りて働く者が一朝他人のために働くこととなると一向出精しないといふことは常に認められることであるが、今頗る低廉な常食が一般に行はれるやうになり、人口が大に勞働需要を超過すると、工業の隆盛と全く相容れざる懶惰好亂の習性を醸成するといふ結果になる。今日愛蘭の賃金は低廉であるが英國品に比して廉價なる品物は製造されて居らぬ。其れは何故であるか 規則的の就業に依つてのみ得られる勤勉心が缺乏して居ることが其の主因である。

(註一) Political Economy Vol.1 b. 1 c. 13.

(註二) Travels in France Vol. 1 c. 17.

## 第十二章 救貧方法に關する諸説 (二) (註一)

近年全く或は多少教會區補助に寄食する者増加し、他方救貧税に對する地主の負擔増加せるより、現在制度の下層民並に一般社會に與へる利益に付き輿論が多少づ、變化し來つたのである。殊に一八一四年の平和克復に打續ける困苦と其のため教會區税の激増せる事とは此の輿論の變化に油を注げるもので、救貧に關する正當明識の意見が漸次勢力を得、法律に依る貧民救助の困難なることがよりよく了解せられ、より一般に認識せらるゝに至つた。若し二十年前に發表されたと假定すれば國家に對する叛逆と考へられたかも知れないやうな諸種の意見が今日では或は印行され、或は話頭に上るのである。

此の輿論の變化は現在の重税といふことに刺戟されて世間多數の注意を救貧法に向けしむることになつたが、一般に現行制度を本質的に無効と認め、諸種の代案若くは改善案が提唱されるに至つた。そこで是等提案が所期の目的を達成するの可能性ありやといふことを一瞥するの

も必しも無用の業ではなからうと思ふ。一般に現在の輿論から何か重要な政策が生れ出づるであらうと豫期されて居るが、併しかゝる政策が永久的成功を得るが爲には多少でも現在貧困の因つて來れる根元に觸れることが絶対に必要であるのに、諸種の問題に對する理解が相當に深められた今日でも尙此の根元即ち貧困の眞の原因は大に看過されて居ると考ふべき理由がある。

諸氏の提案中大に輿論を動かしたのはオーウェン<sup>OWEN</sup>氏の説である。予は既に平等論中にて氏の意見に言及し且つ氏の經驗に對しては相當の好意を表して置いた。若し問題が單に千二百人位の社會を如何に救助し、扶養し、訓練すべきやといふことであるならば同氏ほど適切な意見を持つて居る人は殆んどないであらう。併し氏の提案を見ると氏は全く問題の性質を看過して居るやうに思はれる。こゝに問題とは貧民の數竝に全社會に對する其の比率の繼續的增加を阻止するやうに貧民を救ふの途如何といふことであるが、氏の説は此の目的に少しも觸れて居らないのみならず、却つて其の反對の勢を助長し浮浪人の數を増すの傾向があるのである。

若し氏の推奨する制度が氏の明白な意志通りに經營されるなら、自然の順序と儉約の教は全く逆施せられ、懶惰放逸の人間が却つて勤勉有徳の士から羨まれることになるであらう。今日労働者職工等は住衣に不足し、家族を養ふため一日十二時間の労働をも忍ばなければならぬのであるが、若し仕事を懶けて教會區の補助を求めらるることに依り、善き住宅と衣服とを得、子供

の養育をすることが出來、且つ不健全な工場に於ける十二時間のつらい労働を、愉快な農園に於ける四五時間の容易な労働と代へることが出來るとすれば、誰れも目下の勞苦を繼續する必要がないことになる。かゝる誘惑が一方に存在する限り、労働者も職工も皆新制度に頼るのが當然で、社會自身の急速な繁殖作用と相俟つて、初め購入した土地では忽ち之れを支持しきれなくなるであらう。かくて新しき土地が更に購求せられ新しき部落が出來るであらうが、若し上流社會がどこまでも該制度の明白な主旨に従つて行動する義務があるとすれば、幾何もなく國民を擧げて共產主義の浮浪人たらしめるであらう。

かゝる結果に立至つてもオーウェン氏自身は少しも驚く必要がないかも知れない。蓋かか提案を爲せる氏は正しく此の結果を豫想して居たかも知れず、又氏が社會の道徳と幸福との完上必要と考へる共產主義を暗黙の中に採用するためには之れを最上の方法と思つたかも知れないからである。しかし共產主義から豫期せられる結果に付き、氏と全く意見を異にする人々にとつては——即ち人を教へて消費量以上に生産せしむることが出來るといふ氏の持説は現在事情では眞理であるが、私有財産制度に依る耕作の奨励がなくなつた後に於いては、其れは忽ち眞理でなくなると信ずる人々にとつては、こんな制度に接近することは、社會を擧げて怠慢、貧困、不幸の状態に接近せしめる所以であると考へるであらう。



だからオーウェン氏の提案がうまく實行され、各地に散在する浮浪的社會が氏の希望通りに救はれたと假定しても、其れは當座のことであつて、人口理論の自然的必然的作用からしてやがて上述の如き状態に終るであらう。

しかし凡ての共產主義に對しては他の一大支障がある。其れはオーウェン氏の試みを始めから阻害し豫期せられ幸福を破壊することとなるであらう。ラナーク工場にては二つの有力な刺戟が作用して勤勉と徳行とを資けて居るが、氏が理想の社會に於いては全然之れを缺くのである。ラナークでは各人の所得は全部自分のものであり、自己と妻子とを氣樂に生活せしめる力は全く自己の勤勉、攝制、儉約に比例するのである。又ラナークでは若し或職工が怠慢疎懶であり、飲酒に耽つて仕事をだめにし、或は何等か本質的に悪行をすれば、自然に収入が減ずるのみならず、何日解雇されるかも知れないのである。然るに現在の提案に依る浮浪人救濟制度の上に於いては、各人の勤勉、節制、善行等と、彼の資産即ち自己と家族とが安易な生活を送り得る資力との關係頗る薄弱であり、且つ疎懶悪行の場合に於いても解雇といふ簡便有效な匡正方法を用ゆることを得ず、監督者の決定負課する或種の直接的刑罰を用ゆる外はない。而してかゝる刑罰は常に悲痛であつて而も一般にあまり効果のないものである。要するにラナーク工場に於ける如き制度にて經驗せる効果が如何によかつたとしても、之を推して共產主義に據る

社會——其所では各労働者の所産が共有となり、制度上解雇が不可能である——の改良に對し、其の論據たらしめ得ないのである。若し吾人の所産が共有に歸し解雇が不可能であるといふ不利益の下に、此の制度を適當に行はんとすれば一通りの判斷力や、果斷力や、忍耐力を以つてしては到底所期の目的を遂げることが出来ぬ。果して然らば一百万乃至二百万の民衆を指導すべき偉大な人才を何處に求めんとするのであるか。

だから全體として考へるとオーウェン氏の案は前述の通り出發點に於いて不可抗的の困難に遭遇すべく、若し此の困難を突破して完全な成功を收め得たと假定しても、何か最不公平不自然な法律に依つて人口の増加を停止せしめなければ、必や普遍的な不幸と貧乏の状態を惹起するであらう。而して此の際に於いては凡ての富者から資財を奪つて之れが救済に充つるとしても尙一人の貧者を富ましむることも出来ない。否現在に於ける普通労働者の状態にだも達せしむることが出来ないであらう。

カーウェン氏の労働者救濟案なるものは自ら概要と稱するも、其の主旨は正に吾々の一考を要するものであり、氏の根本精神は大綱として氏の掲げたところに明瞭に表はれて居る。

一、下層民現在の窮狀を改善すること、

- 二、救貧税は必要なるも新税法に依つて之れを公平にすること、
- 三、自ら保護を受くることを至當と考へる人々に、救貧資金の地方的監理並に分配上の發言權を許すこと、

第一は勿論此種提案の目的であり、後の二個條が之れを達成する方法である、

是等の二方法は他の關係からは或は望ましいことかも知れないが、件の大目的には事實觸れて居らないのみならず、又觸れやうとしないものである。吾々は全體としての勞働階級により大なる富と幸福と獨立とを與へんがため浮浪人の割合が増加することを阻止し且つ之れを減少せしめんとするのだ。しかるに救貧税の平等化は單に其れだけを考へると寄生的貧困者を減少せしむるよりむしろ大に之れを増加させる傾向がある。現今教會區税なるものは或特殊の資産に頗る重く、納税者は一般に極力之れを低廉ならしめんと望んで居る。然るに今其の負擔があらゆる種類の資産に平等に課せられ、殊に大きな地方區劃或は郡から徴收されることになれば、地方配給者は件の税金を低下せしめる必要がなくなり、かくて税金は急激に増加するものと豫想される。

救貧税が土地に對して殊に重き負擔となつて居ることは本質的に不公平である。殊に出産が大に死亡を超過する或地方教會區はつらい立場に置かれて居る。何故ならかゝる地方からは絶

えず市や工場へ出稼ぎに行く連中があり、其の大部分は老廢職を失ふに至つて又故郷に歸還し來るからである。かゝる教會區では自分の境界内に生れる人々に職を與へ或は之れを扶養すること到底不可能である。否、是等出稼が行はれなかつたと假定すれば、事實上其の大きな出產數もなかつたであらうと思はれるのである。だからかゝる事情下に在る教會區が貧窮して歸り來る凡ての人々を抱容し之れを扶養するの義務を負はせられるのは苛酷である。がしかし現在の狀態下に在つては、最大の弊害は土地に對する重税ではなくして、浮浪人の増加其のものである。而して税の平等化は確かに浮浪人の割合を増進せしむるものであるから、假令かゝる案は實行容易であつても、平等化された税率が將來増大されぬといふ強力確乎たる保證なき限り、其の實行に對しては予は之れを悲まざるを得ない者である。

カーウェン氏の今一つの提案も同様に浮浪人の増加に對して何等妨害的保證を與へない。現在の互助團體の資金は寄附者自身之れを監理するに相違ないが、永久的効果を發揮するやうな經濟的方法に依りて分配されて居らぬ。而して今提案の如く之れを國家的團體としたところが其の資金の大部分は救貧税から流用されることになるであらうから、寄附者の意向に依つて左右せられる問題は、一層氣任せな而して一層非經濟的な原則に依りて決定せられることとなるであらう。……………

カーウェン案の最勝れた部分は各寄附金醜出者に對し、寄附金額に應じて信用を與へ、病氣の際には手當を、老境に於いては年金を給するといふことで、而も何等弊害を伴ふことなく容易に此の目的を達し得るといふ點にある。氏が「仕事の無いといふことは社會に對して何等の要求權を與へない。何故なら若し之れを認めれば社會は其の結果惡弊に堪えなくなるであらうから」と説けるは至言である。併し之れと同時に働き得る者には凡て仕事を求めてやらなくてはならぬと云ふのは輕卒の譏を免れぬ。又一時的失業の際、是等團體が時機を得た救助を與へても、其のため被救助者を墮落せしめる虞れはないと他の個所で説いて居るのも失當である。

大體此の案による國民的互助團體が出來ると莫大にして多分漸増する救貧寄附金が是等團體に與へられることになり、従つて團體員はやはり教會區の救助から獨立せるものとは考へられず。而も他方普通の救貧税は依然として何等制限なく徵集されることになるであらうから、カーウェン氏の案が行はれても全體としての救貧税を輕減し、寄食的貧民の割合を減少せしむる上に何等かの成功を望むことはむづかしいのである。

貧民監理に就いては現在社會の陥り易い二つの誤謬がある。其の第一は貧民自身からの醜金の効果を過大視し、而も其の分配方法に十分な注意を拂はないことである。しかし實を云ふ

と醜金方法よりも分配方法が重要なのであつて、若し之れが本質的に悪ければ何んな風に醜出されても、即ち貧民自身の醜金であらうと其他からの寄附であらうと、其れは殆ど何等の價値もない。若し始めから労働者の所得に比してかなり大なる割合と思はれる金額を普遍的に義捐させても、疾病、老年、失職に際して、竝に又二人以上の小兒が出生した場合に際して之を救助するならば、資金が忽ち缺乏をつづることは明白である。こんな風に分配を行ふことは限定的地域に急激に増加する無限の人口を養ふことを意味し、従つて益々貧乏を助長する結果となる。吾々現在の相互團體や慈善團體は單に限定的目的を有するに過ぎないが其れでも其の多くは既に失敗し、更により多くの團體は資金の缺乏から失敗すべく豫想されて居る。然るに或團體が一層廣く其の團員を救助せんとするか、或は救貧法に依つて部分的に實施されて居ることを模倣し、コンドルセ氏が達成し得べき見込みありとした其れ等目的の達成に努力すると假定すれば、始めには如何に大きく見える資金でも、將た又如何なる方面から徵集される資金でも、到底之れに應じきれないこと明白である。要するに此の問題に付いて如何に智恵と工夫をめぐらし、又貧民若くは富者、乃至兩者共同の努力で醜金して見たところで、或は又如何なる他の方法を以つてしたところで、人口稠密な舊國家に於ける労働者の状態を改善し、新國家に於けると同様ならしめることは到底不可能である。即ち舊國家では、新國家ならば結婚して少しも差

支なく却つて又有利であるやうな年頃で、一般に結婚し能ふやうには到底なし得ないのであつて、寧ろこの事を社會一般に周知せしむることが必要であり、之れが爲には其の説の猛烈なるを厭はず、又繰返されることを厭はないのである。殊に貧民の状態改善が當面の問題たる際に於いて其の必要を痛感するのである。

現社會の陥りやすい他の一誤謬は貧民の就業を過重視することである。一般人は現行制度失敗の一主因がエリザベス第四十三號法、即ち貧民を働かしむるため材料を買與すべしといふ條項のうまく實施されなためと考へて居るらしい。なるほど出來得れば貧民を就業せむることは多くの點に於いて望ましい。しかし彼等自身が努力すべき自然の動機を有たないのに、進んで働かせるといふことは極めて困難であり、又強制制度は恐らく或人々に大なる權力を委任しなくてはならず、其れは又濫用せられる虞れがあるが、兎に角出來れば凡ての貧民に仕事を與へたく、又貧民に從來より多く仕事させて彼等の習性道德に善良な影響を與へ、他方何等の弊害を伴はぬやう方法を講ずることも出來るかも知れない。が其れにしても救貧法の本質的弊害、若くは現社會目下の苦境の根本原因が、貧民を就業せしめなかつたところから來ると考へるものがあれば其は大なる誤解である。貧民の強制就業が如何によく行はれたところで、労働の需給關係を一層正確に比例せしむべき直接の傾向は生じ得ない。否、非常な注意と戒心と

を用ひなければ却つて其の反對の結果を呈すること明白である。例へば需要不足若くは資本缺乏のため、賃金が低下せんとする強力な傾向ある際、吾々が一般の寄附金若くは政府の出資に依つて人爲的需要を作り賃金を平常額に維持すると假定すれば、吾々の行爲は正に人口が資源の減退に一致せんとするの傾向を妨害するもので、譬へば不作の年に穀價の上昇を妨げんとするに等しく、其の結果は必益々困難を増大ならしめるに相違ないのである。

吾々は必しも貧民の雇用に對する凡ての提案に反對せんとするものでなく、或場合一定の制限を附すれば一時應急の策として有益な場合もあると考へる者であるが、唯吾人の求めつ、ある永久的救濟策が此の方面から來らないことを十分了解し置くことは最重要で、此の理解がなければこそ無用の努力を繰りかへして絶えず失望するのである。

然らば永久的救濟策は何に在るか、思うに合理的に囑望し得べき唯一種の救濟策は、労働者をして先見用心の風を助長せしむる傾向あるもの即ち之れであると斷言してよろしい。貧民の状態改善策は如何に多くとも此の試金石に依りて適否が決せられなくてはならぬ。若し或方策が自然と天意の指示する教訓に一致し、先見用心の習慣を助長せしむるものであるならば、本質的永久的の利益を豫期することが出来る、若し此の傾向を有しないとすれば、其れは一時の策として、或は又他の點から多少有益ではあるかも知れないが、吾々當面の目的たる貧民の

改善に付いては其の根本義に觸れることの出来ないものと斷言して差支ない。

勞働階級の救助策として提議された案は少くないが、現在のところでは貯蓄銀行が若し一般的になれば、最よく下層民の永久的改善の上に有效であるらしく自分には考へられる。蓋貯金は各人に自己の勤勉用心から生れる全利益を與へることに依り、大に自然と天意の指示する教訓を助長するものであるからだ。少年が二十四五歳若くは其の前に結婚する目的で十四五歳から貯金を始めても不景氣であるとか、小麥價が高くて賃金が廉いとか、或は貯金額が少く經驗上未だ十分な保證たり得ないとかいふ場合には、或は尙二三年間結婚を延期しなければならぬいかも知れない。が現在収入の一部を將來のため貯蓄する習慣は先見用心の一般的習性がなければ出来ないことであり、若し貯蓄の利益が分つて此の習慣の實行が一般的になれば、國家の資源には變遷があつても、現在に於ける如く大した苦痛と貧乏に陥らしめずして、人口を實際の勞働需要に調和せしめることが出來ると合理的に豫期されるのである。

貯蓄銀行の目的は人民をして自ら不時に備へしめ、因りて以つて缺亡と倚頼を豫防するにある。社會の常態に於いては此の制度に加ふるによく指導された個人の慈善を以つてすれば貧民狀態の改善上、實際の效果に於いて他に手段を求めんに及ばぬかも知れない。唯英國目下の狀

態は全く之れと事情を異する。習慣的に國費に倚頼して生活する者がこんなに多數では貯蓄銀行の制度を救貧税に代へるだけでは到底不十分である。全社會に對する窮民の割合が絶えず増加し行くことを阻止するやう、彼等を救助するには如何なる方法に依るべきやといふことは、従つて今後未決の問題として殘る譯である。唯將來救貧税が漸次廢止せられ、或は輕減せられて或額を限度とするやうな案が實施されるとすれば、貯蓄銀行の利用は之れを援助することになるであらうし、同時に又銀行も其の代りに有力な保護を社會から受けることになるであらう。事實として貯蓄銀行は殊に不利益な一般的不況の時期、教會區救助が最廣く行き互れる時期に於いて創設せられたが、是等不利益があるに拘らず、尙成功を收め得たことから推論すると、好景氣と高賃金の時代に於いて、若し教會區補助が削減せられたならば、貯蓄銀行が廣く利用され、人民の一般的習慣上著しい効果を表はすだらうこと明白である。

最近貯蓄に對して一層大なる獎勵を與ふる目的で一條令が發布され、貧民はよし貯蓄があつても一定額以下である場合には、裁判官の認定に依つて教會區の補助を受けることが出來ることとなつた。しかし之れは少し短見淺慮な政策である。何故なら貯蓄銀行設立の本旨を没却し貯金あるがために得られる利益を犠牲にするものであるからだ。吾々は勞働階級に對して飽く迄、自己の努力と資力とに倚頼せしむることに依つて其の狀態を改善せしめんとする。しかる

に他方に於いて貯金を爲したまふことの報酬として教會區補助を受くることを可能ならしめるのは矛盾である。かゝる規定を伴ふ貯蓄銀行の發達が果して何れだけの利益があるか疑問である。かゝる規定さへなかつたなら、貯蓄は確實に効果を表はし、新しき貯金は教會區救濟から獨立したいといふ希望の發達を證據だてるものと見られる。かくて互助團體の大發達と創設日残き割合に貯蓄銀行の收め得たる成功とは、是等制度が事情さへよければ將來大なる發展を遂げ得ることを示すのである。

前に論じた救貧税の輕減と限定に付いて云へば、其れは確に目下の禍根に觸れるものに相違ないが、貧民の被救權を正式に撤回せざる限り、之れを行ふことは明に不公平であり、若し之れを實行することになれば予が前章にて提議した救貧法全廢案よりも更に一層苛酷な結果に立至るであらう。が若し英國の救貧法が長く既に其の社會組織の中に織り込まれて、今之れを全廢することが出来ないとするれば、やむを得ないから救貧税額を限定し、寧ろ一層公平にして合理的な方法、即ち國家の富力と人口とに應じて救貧税率を限定するといふ方法をと、且つ何故救貧法の上にかゝる變更を加へなければならぬかを十分明瞭に布告するがよく、かくて眞の利益が生れ、貧民の習性ニ幸福ニに資するところ少からぬと信ずる。

(註1) 一八一七年記す。

### 第十三章 此の問題に對する一般原則の必要

ヒュームは會つてあらゆる學問中で始めの外見に欺かれやすいもの政治學に如くものはないと云つたが、これは疑もなく適評であり、政治學の中殊に下層民の状態改善に關する部分に對して適切である。

自ら實際的と稱する人々は、理論と理論家に對して非難を絶たない。なるほど悪い理論は惡いに相違なく、其の論者は社會にとつて無益な、否時としては有害な分子であるに相違ない。併し此の實際家と自稱する連中も自分が往々にして無益な部類に屬すると、竝に其の大部分は案外にも自分自身が最有害な理論家の部類に屬することに氣付かないやうに思はれる。其の觀察は如何に狹隘でも、其の範圍内の事柄を忠實に記せば、一般知識の總和に貢獻して社會を益することになる。然るに局限された経験や、自分の監理する小さな農園の監理や、或は附近救貧處の細事やを基礎として世間屢々見るやうに一般的推論を下し、一躍理論家となるもの比々皆然りで、是等は経験を土臺として居るだけに一層危険である。何故なら経験は理論の唯一の正し

い土臺たるものではあるが、人々は單に言葉の調子に囚はれ、其の經驗が部分的のものであるか——かゝる經驗は此の種問題に對しては正當な理論の基礎とはならぬ——或は正當な理論の唯一の基礎たるべき一般のものであるかを見分けるに違がないからである。

凡そ貧民の状態改善に關する問題ほど從來人間の腦漿を絞つた難問はなく、又これほど明瞭な失敗に終つた問題もない。自稱實際家と眞の理論家との間の相違は、單に救貧處の細い隅を窺ひ、教會區の役人達がチーズの屑や蠟燭の切れ端を捨てたとて之れに罰金を課し、又配給の馬鈴薯やスープの量を多からしめることに満足するか。或は溯つて此の失敗の原因を示し、且つ同時に制度が始めから根本的に誤つて居たことを證據立てる一般原則に立還へるかといふ點に在る。此の問題ほど一般原則の適用せられること少き問題はない。しかし同時に又人間智識の全範圍に互つて一般原則を忘れることの危険、之れより大なる問題は他にはない。何故なら貧民救助上或特殊的方法の收め得る部分的直接的結果は、屢々一般的永久的效果と正反對の方向をとるからである。

例へば或地方の下層民は少しばかりの土地を持ち、牝牛を飼養する習慣があつたため、最近の不作に際し、教會區の補助を受けなかつた。或は受けても稀少であつた。

ところで此の問題の考察に際し件の部分的見解に従つて、此偏狹なる實例から一般的推論をとらざりて、若し凡ての勞働者を右の如き境地に置くことが出来れば、彼等は皆氣樂に生活し、教會區の補助を必要とせぬと論斷する。しかし之れは決して正しい推論ではない。現在牝牛を飼ふ貧民の有する利益は主として其の特殊事情から發生するものであり、若し其れが一般的となれば著しく減少すべきものである。

或る地主若しくは紳士が其の農場に或數のコテイヂュを持つと想像する。彼は物惜しみせず、自分の周邊の人々が安樂な生活を送ることを望み、一二頭の牝牛を飼ふだけの餘裕を各家屋に附し、且つ高率賃金を與へるかも知れない。かくて彼の勞働者は豊かに暮し大きな家族を養ひ得るであらう。さればと云つて彼の農場は左程多數の使用人を必要としない。だから現在の使用人には高賃を支拂ふかも知れないが、仕事の必要以上には勞働者を要しないであらう。従つて彼は現在以上の家屋を建てず、使用人の子供等は明に他に出て居住しなければならぬ。而してかゝる制度が或家族或地方に限られて居る間は、出稼に行く連中も他の地で容易に仕事を求め得るであらう。此の農場に働く勞働者は勿論羨むべき境地に在るもので、英國勞働者の凡てがかゝる境遇に置かれることは吾々の大いに希望するところである。しかしかゝる制度は其れが若し一般的になれば本然の性質上同様の利益を齎らし得ないものである。何故なら此の場合には子供等は仕事を追ふて出稼ぎに行く先がない譯だから。かくて人口は都市と工場との需要

以上に増加し、勞銀が普遍的に低下すること明白である。

尙注意すべき一條は、今日牝牛を持つ勞働者が非常に氣樂である一理由は、使ひ残りの牛乳が著しく利益を齎らすからであるが、若し此の制度が一般的になれば其の利益も當然大に減少するであらう。最近の不作に際し、彼等勞働者は小麥以外の資源を持つて居た爲、自然他の勞働者に比して救助を要すること少かつたのであるが、若し此の制度が一般的であつたと假定すれば、牧草の不足と牝牛の斃死とから損害を蒙ること殆んど今日普通の勞働者が小麥の不足に苦むと同様であつたらう。だから吾々はかゝる外觀を前提とし、此種部分的經驗から一般的推論を下すことについては極めて細心の注意を用ひなくてはならぬ。

「貧民の慰安増進状態改善會」が據りて以つて立つところの主義は非常によい。かの勤勉といふ原動力、即ち貧民自ら其の状態を改善せんとする慾望は、彼等の状態を改善すべき眞の方法でなくてはならぬ(註1)。吾々はサー・トマス・バーナードが同會報に附した立派な一序文中に述べた説に安んじて同意することが出来る。曰く、貧民中に勤勉、先見、用心、道徳、清潔を促進するものは皆貧民並に國家に有益であり、是等性質の何れかに對する刺戟を除去し、或は減退せしむるものは皆國家並に個人に對して有害であると(註2)。

バーナード氏は社會が其の目的の遂行上遭遇すべき困難に付いては大體十分之れを察知して

居るやに見えるが、やはり前述の誤謬、即ち不十分な經驗から一般原則を推論せんとする危険に陥つて居るやうだ。食物を低廉にし教會區工場を設けることに關し、或人々の提案は有益かも知れないが、其れは或家族若くは教會區に特殊のもので、若し其れが一般的に行はれば勞働賃金を低下せしめることに依つて其の利益と相殺するであらう。私は今等提案には觸れず、上述の會の會報第二卷の序文に表はれた一層包括的な一點に付き少し注意して見たいと思ふ。右序文に曰く、同會の經驗から結論すると、貧民救助の最良法は家庭に於いて彼等を援助するに在り、又彼等の子弟を出來得る限り速かに他の職業徒弟等に轉出せしむるに在ると。なるほど之れは臨機差別的な援助を與ふべき最良の又最愉快な提案であるが實行に際しては多大の注意を加ふることが必要であり、又一般普通の原則として廣く實行することは出来ない。何故なら此の制度も結局上述の牝牛飼養制度や或はエリザベス第四十三號法中の規定、即ち「教會區監督者は貧民の子弟に職業を與へ且つ之れを養ふべし」といふこと、同一の非難を受けなくてはならぬ。或教會區中の少年が適當な年齢に達するや否や兩親の膝下から離し他區で適當な位置につけてやるといふことになれば、なるほど其の區は大に氣樂であらう。けれども此の制度が全國一般に行はれ、又貧民が自分の子供全部がかく養育されるのを知るに至れば、何の職業も人が一杯になり、従つて其の結果は推して知るべしである。



或家族、或教會區、否或地方を十分に救助することは、なるほど金の力、即ち富者の力で出来るに相違ないが、しかしよく考へて見ると此の方法で全國民を救ふことは到底出来ない。少くとも過剰人口のため移民といふ安全瓣を設けるか、或は或特殊道德が貧民間に流行せざる限り到底不可能のことである。而して此の特殊道德なるものは、上述の如く救助が一般に行はれば之れがため必や阻礙せられる傾向を有するものである。

此の點に於いては勤勉といふことも貨幣とあまりかほりがない。或る人が普通人以上、多少の勤勉量を有すると假定すれば現在の事情下に於いては、生計を得ること殆ど確實である。しかし若し凡ての人々が一度に彼と同様に勤勉になつたと假定すると、彼が從來所有し來つた勤勉量は最早貧窮に對する保證とはならぬ。ヒュームは曾つて人間の道德的並自然的弊害は殆んど凡て怠惰より起ると斷定し(註3)、是等弊害の救済に對しては、唯全人類が生れながらにして一定度の勤勉、即ち現在多くの人々が習慣と反省とに依つて達し得るのと同程度の勤勉を有することが必要だと論じたが之れは大なる誤解である。若し一定量の勤勉が全人類に依つて所有されるだけで、ヒュームの氣付かなかつたところの或種の他の道德が之れと伴はなかつたならば、到底缺乏と不幸から社會を救ひ得ないのみならず、謂ふところの弊害のたゞ一つだも除くことが出来ないであらう。

予の是等の議論の要旨に對しては一見大なる眞理を含むが如き反駁が來るかも知れない。予は之れを豫知するのである。即ち曰く、かゝる議論は直ちにあらゆる貧民救済方法に反對するものと異ならない。何故なら事柄の性質上、差別的に個人々々を救へば社會に於ける相關的位置を變化させ、他の人々を其れだけ壓迫することになるからだ。又曰く、家族を有する者は自然最貧困に陥りやすく、他方吾々は援助を要求しないものを助けなくともよいのだから、苟も救済を講ずる以上、吾々は必然的に子供を持つ人を救助することになり、かくて結局やはり結婚と人口とを促進させる結果になるのではないと。

之に對しては予は既に述べて置いたことを繰り返へすに止めて置かう。即ち是等問題に關する一般原則は必ず常に之れを眼界に置くこと必要であるが、あまり極端に推進められてはならぬ。又多くの場合の中には現在の貧苦を救ふことから生ずる利益が、遠い未來の結果から憂懼される弊害を償ふて餘りあることもあるといふこと之れである。

自身の怠惰と不謹慎な習慣から發したのではない貧困者の救済は、明に此の種の場合に屬するものである。而して一般に云へば、貧民が其の平生の狀行如何に拘らず、安んじて倚賴し得るやうな確實組織的な救助方法が悪いので、救助の一般的結果が、救助の目的たる特殊弊害より

も尙一層悪いといふことが明瞭であるやうな一般原則にはづれた救助法は此の確實組織的な方法を除けば他にはないのである。

此の辨別的な臨機の救助が有益な結果を持ち得ることは前章にて予の十分に認めたところであるが、之れとは別に予は又一層勝れた普通教育の制度からも多大の利益を豫期し得ると説いた。教育に依る利益は凡て頗る特殊の價值を有するのである。何故なら教育は他人に妨害を與へることなく萬人が受けることの出来る利益であり、一人の向上が實際多くの他の人々の向上にも資し得る利益の一つであるからだ。例へば或人が教育に依つて相當の自負心と一層正しく物を考へる習慣を得、之れがため自分の扶養し得ない多數小兒を社會に負はせることを免れ得たとすれば、彼の行狀は、此の場合だけに付いて云へば、明に同胞労働者の状態を改善せしむる効果がある。又無知から來る其の反對の行狀は明に社會を沈滞せしむる傾向があるのである。

又貧民の家屋に付いては、あまりに之れを大きくして二家族の共棲し得るやうにせず、又其の家族數が労働需要を超えて急速に増加しないやう注意することに依つて、貧民の状態改善上多少貢獻し得るのではないかと思はれる。英國に於ける早婚の豫防上、最有益無害なる一事は住宅難であり、又労働者が愛蘭に見るやうなみすばらしい土屋に住むよりは寧ろ數年間結婚を延期して適當な空屋を待つといふ賞讃すべき習慣である。

かの牝牛飼養制度も若し其れが或種の制限を附せられれば必しも非難するに當らない。之れを以つて救貧法に代へ、且つ労働者に家族數と比例する地面と牝牛との要求權を與へることや、或は又一般人民を小麥の食用から轉じて、牛乳と馬鈴薯を代食せしめること等の目的を以つて此の制度を行はんとするは没常識の沙汰であるが、單に善良勤勉な労働者を氣樂な境涯に置き同時に一般貧民間の重大な缺乏、即ち小兒に對する牛乳の不足を補給せしむる目的で此の制度が行はれるならば極めて有益であり、貧民間に勤勉、儉約、用心の習慣を養成せしむる上に付き有力な刺戟となり得ると思ふ。しかし此の目的に對しては各教會區に於ける労働者の一部分だけが其の制度に浴すること、しなくてはならず、又其の實施に際しては單に人民の貧困の程度のみならずして其の行狀が參酌せられなくてはならぬ。但し小兒數にはあまり注意しないがよい。更に又一般に自分で牝牛一頭を求め得るほど貯金したものは、教會區から牝牛の給與を受ける者に比して優先權を與へらるべきである。

人はかの勤勉と儉約に對する萬人周知の刺戟、即ち財産に對する慾望と愛着とを出来る限り利用しないことを大に不服とするであらう。しかし此の刺戟は財産が自分の努力で得られ保持せられる時に主として顯はれるもので、他の事情下に於いてはさほど一般的でないといふこと

を忘れてはならぬ。若しどんなに怠惰な家族持ちでも權利として牝牛と或地面とを要求し能ふことになれば財産慾の作用は其れほど重要でなくなるだらう。

牝牛を飼ふ地方貧民等は之れを飼はない人々に比べて勤勉であり几帳面であると云はれる。なるほどさうであらう。其れは當然の事である。しかし此の事實から直ちに凡ての人民を勤勉ならしめる途は牝牛を與ふるにありといふは必しも當らない。現在牝牛を飼ふ連中は自己の勤勉の結果として之れを購買したのだ。だから勤勉が彼等に牝牛を與へたのであつて牝牛が勤勉を生んだのではない。尤も一面に於いては急に財産を持たせることは勤勉といふ習慣養成上有效であるかも知れず、私は決して之れを否定するものではない。

貧民が牝牛を飼育することから來る實際上の好果は、事實上予がさきに述べた局部的のものであつたからこそ生じたのである。此の種貧民の最多い地方に於いても、其の數は全教會區人口に對してあまり大なる割合を占めて居らず、又多くは自ら牝牛を購求し得た比較的善良な労働者である。だから彼等の特殊な安樂生活は彼等の有する絶對的利益から生れたものであると同時に又比較的の利益からも生じたものである。

だから彼等の勤勉と安樂とを觀察して、同様の所有物さへ與へれば凡ての貧民に同様の勤勉と安樂とを與へ得ると推論するが如きは大に戒心しなければならぬ。凡そ世に相對と絶對、原

因と結果の混同ほど多大の誤解を起すものはないのである。

貧民の住宅を改善して、一層多くの貧民に牝牛を飼育せしむるやうにするといふ提案は、明に一層多くの小兒を養育せしむる力を與へ、かくて人口を促進するものであるから、予の確立せんとする原則に反するではないかといふ議論が出るかも知れない。しかし本書の主なる主張が幸に讀者の理解を得たものと假定すれば、何故予が國家の扶養し得る以上の小兒を生むべからずと考へるか、又生れた小兒は出來得る限り多く養育しなくてはならぬと考へるか、其の理由も同時に諒解されたものと想像する。吾々が貧民を救助すると必然的に其の小兒の一層多くなる數を成人期迄養育せしむることになるが、之れは個人から見ても社會から見ても殊に望ましいことである。貧乏の結果小兒が死亡するといふことは、個人の大なる不幸が其の事實の前にも後にも存在することを意味するのだし、社會からいふと十歳以下の少年の死は其れ迄の食料に投ぜられた費用の全損を意味することになる。従つて如何なる點から見ても、各年齢に於ける死亡率の減少こそ正に吾々の目的としなければならぬ事柄である。而して此の目的を達せんがためには現在より一層多數の少年を成人の域に達せしめることに因り必ずや多少人口を稠密ならしめるに相違ない。が他方は等少年達に對しては、彼等が兩親同様の利益を享受し得ん

がためには家族扶養の可能性が出来る迄結婚を延期すべきものであるといふことを諒解させさへすれば、之れがため何等弊害を生ぜしめず済むであらう。唯此の諒解を得ることは是非共必要である。でなければ吾々從來の苦心は全然水泡に歸するわけである。要するに貧民の状態を一般的永久的に改善せんとすれば、本然の性質上、必ず豫防的制限を行はなくてはならず、此の一事が行はれなければ、如何に努力しても又努力しなくても貧民のために行はれる一切の事柄は單に一時的部分的に終るにきまつて居る。即ち例へば今一時死亡率が低下しても將來死亡率の増大を見るべく、一個處に於ける貧民状態の改良は其れだけ他方に於ける貧民状態を改悪せしむるに相違ないのである。此の事は頗る重大な真理でありながら一向了解されて居らない。だから何度繰返して主張しても差支ないのである。

ペイリは「道德哲學」中人口食物等を論ずる章にて、一國人口に對し、同時に又其の一般幸福に對して最好都合な状態は「勤勉節儉の人民が富裕贅澤な國民の要求を満たすため働く状態」であると説いた(註4)。しかしかゝる状態は少しも好ましくはない。一千萬の人口が僅に衣食するだけの状態に居りながら、他の百萬の人口の極端な奢侈慾を満たすため困苦して不斷の勞働に従事するが如きは、其れが絶対必要でない限り、吾人の如何にしても同意することの出来ない状態である。が事實上吾々はかゝる社會状態を決して必要とせぬ。換言すれば一國の製造工

業を維持する爲めに富者が極端に奢侈であることは必要でなく、又貧民が十分多數ならんがためには、彼等はあらゆる贅澤を放棄する必要はないのである。此の國に於ける最上の、而してあらゆる點から見て最有利な製造品は一般人民の消費するものであつて、全く富者の消費に局限せられて居る製品は分量の些少なため重視する必要なく、却つて流行の變化が甚しきため之れに従事する人々の間に大なる不幸を醸す如き非常な不利益を伴ふものである。だから國民的富裕と幸福と兩方から見て最有利と思はれる状態は、寧ろ國民全般が贅澤になることで、少數者が極度に贅澤化することではないのである。従つて又ペイリが眞に奢侈の弊害であり、危険であると考へた一般人民の生活向上は、實は弊害ではなくして眞の利益であると考へたいのである。かく例へば植民地に見る如き新社會を除き、あらゆる舊い社會に於いては、人口増加上有力な妨害が必行はれると假定し、又便宜氣樂な生活に對する趣味が之れを失ふことの虞れから人々をして結婚を延期せしむるものと假定せば、吾々は茲に次の事實を認めなくてはならない。即ち結婚に對する妨害中、此の趣味の普及ほど社會の幸福と道德を害すること少き方法は他に求め得られないといふこと、従つて此の意味に於ける奢侈の普及趣味の向上は殊に望ましく、前章に論じた貧困の標準を向上せしむる最良の一策であるといふこと之れである。